
星光の魔王-シュテル・ザ・エルケーニヒ-

星朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星光の魔王・シュテル・ザ・エルケーニヒ -

【Nコード】

N4448Z

【作者名】

星朔

【あらすじ】

次元断層に巻き込まれ死んだ1人の平々凡々のヲタクが居た。そのヲタクは無限大数に存在するとある高町なのはに転生を果たし、リリカルマジカルな宿命へと立ち向かっていく。リリカルマジカルもとい『リリカルバイオレンスマギウスなのは』、始まります。？注意？この小説のなのはは血みどろの戦いに身を投じる為、そんな無様ななのはさんが嫌だ！という方は閲覧をお控え下さい。

ブローグ 高町なのは、始めました。(前書き)

導入というかテンプレですね。

ブログ 高町なのは、始めました。

皆様初めまして、こんにちは、こんばんは、おはようございます。

高町なのは、3歳です。

いきなりのご挨拶に、3歳児ならぬ流暢で小難しい言い回しをしています、これが私の素です。

何故私がこのような行動をとったのか、簡潔に述べてしまえば、私が転生者であるからです。転生の詳しい経緯は、アホの子戦記をよろしく！

すみません。おかしい電波を受信しました。ちなみに私はヒーロー戦記からのファンです。

話が逸れてしまいましたね。

とにかく、つい今し方、私は私が転生者である事を思い出したのです。

ですがまさかりリカルマジカルの世界で、しかも主人公の高町なのはに私になってしまうとは夢の端にも思いはしませんでした。

閣下、予想外にも程があります。

しかし驚いている場合ではありません。

このまま行けば、5年後、私はリリカルマジカルな戦いに身を投じなければなりません。

正直、自信はありません。ボディ的に言えば恵まれているのでしよう。しかし精神的には平和大国日本在住の自宅警備員。

こどもなりの怖いもの知らずに見え、正義感もあつた高町なのはならつゆ知らず。私のような小心者では万に一つも戦う心はないでしょう。リリカルマジカルは見ているから良いのであつて、実際にやれと言われてやりたいとは思いません。

魔法には憧れますが、私は平穩無事に2度目の人生を謳歌したいのです。それが私に出来る、この高町なのはへの贖罪なのでしょうから――

|||||

1年が経ちました。

私はやはり高町なのはでなく、正しく高町なのはなのだと、この1年間で思いました。

この1年。私は元来のラノベ好きから発展し、良く本を読むようになりました。しかし読むのは魔法ファンタジーな物ばかり、父様や母様におねだりして、魔装機神や第○次シリーズを買って貰ったり

しながら、スケッチブックにはわけわかめな発想や設定、理論ばかりを書いて、さらには電子機械系の本を読んだりと、ロボットヲタクで物静かな子となっていきました。

本を読み、電子機械系の参考書を読み、理解する為、必然と理数系と文系は得意になったりはしたのですが、運動はからつきしダメでした。走れば転ぶ、ボールで遊べばボールに遊ばれる始末、これ程までに運動神経がダメだったとは思いませんでした。特に私の場合は男の大人の運動神経感覚がまだ抜けきらない為に余計ダメなのではないかと思つてしまいます。

運動出来なら、出来ないなりにやるしかない、私は方向転換。腕立てや腹筋背筋スクワットを敢行し、少しでも太らないようにします。喫茶翠屋は乙女の敵。その経営家である高町家は、元男の私でも気になるくらい3時のおやつが豪華絢爛です。代わりに乙女にとっては力ロリーとの戦いという聖戦を強いられますが……。よく高町なのは太りませんでしたね。

私でさえ2ヶ月+1キロに抑えるのがやっとだというのが、

4歳の一年間は、とりあえず魔法的な物を遊びながら調べ、カロリーとの大合戦の日々でした。

[illegible]

5歳になりました。

この年は幼少期のワーストスリーの年でしょう。

幼稚園から帰ってきたら、いつも迎えにきてくれるはずの母様は居ず、代わりに姉様が私を出迎えてくれました。しかしその表情には覇気がなかった。

家に着いて、挨拶をしてもシンツとして、姉様の返事以外には聞こえませんでした。

母様は店の方なのでしょうか？

しかし、昨日から父様が出掛けるということで、昨日今日明日の3日間は店を休業にすると一昨日の夜に聞きましたから、母様が居ないのは買物にでも行ったのでしょうか。でもそれならば姉様に覇気がないのが不自然に思えます。私は自慢じゃありませんが、姉様より中身年齢は大人です。自宅警備員でも人の顔から様子を読み取るくらいは出来ます。

そして覇気のない姉様の顔は、まるで何かを我慢しているかのようでした。

私は姉様には事情を聞かずに、自分の部屋へと向かいました。

私の部屋は、間取りこそ高町なのはのへやと同じなのでしょうが、一言で言い表せば、女の子らしくはない部屋でしょう。

ブラモが飾っており、部屋のポスターもスパロボですから。

机に向き、スケッチブックを開き、また新しい設定や絵を書いては、息抜きにαをプレイしたりして過ごしました。

そして夜になると兄様の気配がし、そして母様の気配も家に帰ってきました。しかし、2階にまで漂う言い知れぬ感覚に、私は1階の様子を見に行こうとは思いませんでした。

気づいたら私はそのまま寝ていて、翌日となっていました。誰かに起こされた感覚はなかった為、いよいよおかしいと思い、1階に降りました。しかし1階はものけのから。

テーブルの上にはラップ掛けされた食事と、しばらく忙しくなると
という旨の書かれた母様の置き手紙。

おそらくよっぽど忙しかったのだらう。朝食はあっても、お弁当がなかった。

とりあえず朝食をレンジで温めつつ、冷蔵庫の中身から適当に食材をチヨイス。

この身体になつてから料理はしていませんが、2年のブランクなど
なんのその。自宅警備員は伊達や酔狂ではありません。

フライパンに油を引き、出汁と刻んだニラを入れた溶き卵を投入。
出汁巻き卵にします。

朝食をつまみながらお弁当を作る。少し行儀が悪いですが、御勘弁を、幼稚園の始まりは遅くとも、私の5歳児の身体ではこうでもしないと間に合わないのです。ちなみにキッチン周りには私の足場とする為、イスがズラリと並んでいます。

そして1人で迎えのバスに乗り、幼稚園から帰ってくれば姉様の迎

え、家に到着後は部屋へ、そして寝倒しての日々が一週間続いたあと、いよいよ色々とも私も気になってきてしまい、姉様にそれとなく尋ねてみたのですが、はぐらかされてしまいました。

しかし、最近の高町家はおかしい。家で母様を見かけることはなくとも、朝食やお弁当に夕食があり、置き手紙もある分、家には帰ってきている様子。

姉様は毎日私を出迎えてくれますが、日に日に顔が悪くなっている様子。

そして一番は兄様でしょう。日に日にピリピリとイラついているようで、道場の方から怖いと思える程の気迫のある雄叫びが聞こえることもザラです。

そして父様。この一週間、まったく姿も気配も感じません。ここまできると、私も嫌な予感が頭を過ぎります。

私の父様、高町士郎。

以前は世界を旅し、重役のボディガードなどを務めていたというトラハの設定は私も知っています。そしてSPの仕事中に殉職したことも。

ですがトラハでは父様は高町なのは顔を見ないまま逝ってしまっただ人。時期が合いません。

ですが家族第一我が家の大黒柱の父様が一週間も帰らないのはそれこそ一大事を疑います。

ですが、母様も姉様も兄様も、私には話してくれませんが、

ガードの甘い姉様ですら話してくれないのならば、兄様と母様に訊いたとて無駄でしょう。子どもの私には座して待つしかないのが、辛い。

少し飛んで2ヶ月が経ちます。

この頃は高町家空中分解半歩手前とも言えるかもしれない時期でした。

2ヶ月経とうとも、父様は帰って来ず。冷静な私もいよいよ心が不安定になっていき、家に居ることを少なくするようになりました。それはただ単純に家に居たくないという私の思い。

未だに話しはされず、家族は疲れた表情を浮かべ、兄様は余計にピリピリとし、はつきり言つて最悪な雰囲気なのです。

もう六歳を迎え、来月は幼稚園も卒業。そして小学校に上がる身としてはとてつもなく不安定であり、そして嫌だった。

私に話してくれないのは、私が子どもだからではなく、私が本物の高町なのではない、高町なのはの立ち位置、存在を奪った赤の他人だから、家族ではないからなのでしょうか……。

ポタポタと流れ落ちる雫。

何故私は泣くのでしょうか。わかつていたことです。所詮私は高町な

のではない。別のナニカ。

本来の高町なのはには似ても似つかない私は、高町家の一員として暮らす資格など……。

気づけば足は近所の公園に向き、私はブランコに座っていました。

今更砂場遊びをする年齢でもありませんし。私はブランコの方が好きです。

ブランコをかなりの高さまで漕いで高さと速さに要らぬ思考が頭を過ぎる。

ここで手を離せば、家族は心配してくれるだろうか？

父様に逢えるだろうか？

あるいは頭を強かに打てば自分は死に、本来の高町なのはが帰ってくるのでは？

そんな考えが浮かび上がる程、この時の私は随分と追い詰められていたのでしょう。

もうどちらかに一回転しそうな角度までブランコは上がり下がりを繰り返している。

でもチキンハートの私にはそんな勇氣もなく、結局はブランコから降りて、人の居なくなつた公園の滑り台の上で最近開いてないスケッチブックを広げました。

中には様々な魔装機や魔装機神のラフ画や設定。魔装機神のプラナーやエーテルに関する私なりの考察などなど。

いつか役に経つのではと書いていたスケッチブック。それをパラパラと捲り、とあるページでそれは止まる。

そこには私が理想とする魔法少女の姿。

杖を片手に脅威と苦難に立ち向かう不屈の心を持った少女、高町なのはのスケッチ。

無印の9歳、コミックの15歳、stsの18歳、さらに23歳と25歳。

私の覚えている限りの高町なのはが描かれていた。

私の、決して届かない目標にして理想の高町なのは。

高町なのはが一番星ならば、私は肉眼では見えないちっぽけな星でしかないのだろう。

私には愛も力もない。

リリカルマジカルでもとらいあんぐるハートでもない、『理』を真似ている私のような存在は所詮――

暗がりゆく空を見上げれば、そこには輝く星光。一番星。

視界が歪む。

目に力を込めても歪みは強くなっていく。

こんなこと程度でないではいられないというのに、高町なのはが涙を流すのは誰かの為なのに――

ポタポタと、スケッチブックに雫が落ちる。流れ出した涙は堤防を決壊させ、鉄砲水となり吹き出す。

「…わ、たし…は、なぜ、たか…ま、ち…なの、は、につ」

辛い。悲しい。怖い。寂しい。

色々な感情がぐちゃぐちゃになって吹き出す。もうせき止めは出来なかった。

「だ、れか、たすけ…て……」

2年間。たったそれだけでも心を病むには十分過ぎた。とくに自分が高町なのはとして産まれたから余計に。

高町なのはの幸せを奪ってしまった。

高町なのはの居場所を奪ってしまった。

高町なのはの存在を奪ってしまった。

いずれは戦いに身を置かねばならない運命。

普通の凡人には過酷過ぎる運命だった。

特に高町なのはが歩むだろう16年を大まかに知るだけに余計。

『Please do not cry. (泣かないで下さい)』

「うっぐすっ…………えう？」

ふと耳に聞こえた電子音調の英語。

「だ、だれ、です、か…………」

『Please do not cry. I will also become sad if you are crying. (泣かないで下さい。貴女が泣いていると、私も悲しくなります)』

顔を上げて、誰も、どこにも、なにも居ない。

「そ、ら…みみ？」

『It is not a mishearing. I am in a you side perfectly. (空耳ではあ

りませんよ。私は貴女の傍に、ちゃんと居ます」

「わた、し、の…そば？」

『Yes. Therefore, please do not cry. My meister who loves (はい。だから泣かないで下さい。愛するマイ・マイスター)』

また、涙が溢れてきた。

でもそれは……

『Meister? Did it carry out if you please? In something, I am impoliteness by no means. (マイスター? どうかしましたか? まさか私が何か失礼を)』

「いい、え……いいえ、違い…ます」

嬉しかったんだ。

独りぼつちだと思い込んでた自分に、傍に居てくれた存在が居るのを。

「あなた……なのですね？」

スケッチブックに語りかける。

それは奇跡か、あるいは高町なのはである自分が書いた物だからなのか――

『Yes・That's right・My master
(はい。その通りです。私のマイスター)』

スケッチブックから聞こえる電子音は、とても温かに包んでくれるような声だった。

誰も居ない。私達しか居ない公園で、私は声も抑えずに、泣き散らした。

最初で最後にするから、今は自分の為に泣き、そして産まれてくれたことに感謝を込めて、泣いた。

そしてまた1ヶ月。腕に包帯を巻いて申し訳なさそうな顔をする父様に、私は素直に「お帰りなさい」と言っ
て抱きついた。

少し苦悶の声が聞こえましたが無視です。3ヶ月も心配をかけた罰なのですから。

第1話 タイムリミットまで、あと——（前書き）

連投です。

第1話 タイムリミットまで、あと――

side：高町なのは

あの日の出逢いから3年が経ち、私は私立聖祥大附属小学校3年生として過ごしています。

あの日以来、私と共にある自称アリスは、簡単に言えば、私の著書した魔導書で、私の使い魔のような存在であるらしいのです。

まだシステムの未完成のアリスは、その活動には私からの魔力供給を受けて活動しているそうです。

夜天の書よろしく自立飛行とかも出来ませんが、私はアリスのお陰で大分救われました。

父様は、あの一件以来、長期間、家から居なくなることともなくなりました。あってもちゃんと、2日3日で帰ってきてくれます。

未だに何をどうしてあんな怪我をしていたのかはわかりませんが、3ヶ月という期間を考えれば、幾つかの予想を推論出来ますが、所詮推論。気にしないことにしました。

そして私は私立聖祥大附属小学校に入学を果たし、初めての友人を得ました。

「あ、おはようなのは」

「おはようなのはちゃん！」

バスに乗り込むと、その初めての友人であるすずかとアリサが手招きしてるのに気付き隣りに座りました。

「おはようございます。すずか、アリサ」

「前から時々思ってるけど、なーんか固いわよね、あんたは」

と、アリサが口をとがらせる。

「そうは言われましても、これが私ですから。今更変えようもありません」

中身が一応大人であるからにして、高町なのはのように子どもを私に出来るわけもなく、少々演じているような部分も無きにしも非ずですが、これが『私』なのです。

いつも通りに登校し、いつも通りに授業を受け、いつも通りの昼を迎える。

今日もそうなると思っていました。ですが――

昼休み、学校の屋上。

いつもなら楽しいはずの昼食。ですが今日は色を失い、いつもとはまったく異なる昼食です。

昼食前の4時限目の授業は将来の夢について――

とうとう、来てしまったのです。運命のタイムリミットが――

今日は4月22日。もし劇場版コミックのようにならば4月26日が運命の日であるならば、あと4日。不吉過ぎるのにも程があります。

「で、なのはちゃんは？」

と、すずかに尋ねられました。恐らくは将来の夢についてでしょう。

「…私ですか？」

頷く2人に、どうやら心中はさらけ出していないと安堵しつつ、考えてみます。

「翠屋を継ぐのもいいですが――」

私はバックからA4サイズのスケッチブックを取り出す。

「イラストレーターやアニメーターというのも、道筋のひとつかもしれない夢——なのかも、知れませんが。」

叶わない夢——なのかも、知れませんが。

「なるほど、あんた絵、得意だもんね」

「なのはちゃんならきつと凄い有名になれるよ！」

「ありがとうございます。すずか」

スケッチブックに何が書かれているのか若干知っている2人は納得してくれましたようです。

放課後。2人は塾の為、校門でお別れです。

私は塾に行くよりもゲームとか新しい設定を考えたりする時間が欲しかった上、今のところ全筆記テストオール100点を独走中の為、塾には通っていません。

帰り際、人気の少ない方に歩いていったら、海岸線まで来てしまいました。

人の気配がなくなった途端、進級してから良く起こるようになった発作に胸が苦しくなる。

「くっ、はっ、うっ、はっ」

服を握り締め、苦しさを耐える。

タイムリミットを迎えるプレッシャーによる発作。

戦うことへの恐怖が、私の心を蝕んでいた。

『マイスター
Meister』

「アリ、ス……」

スケッチブックを胸の中に抱き締める。

私の本当の意味での味方は、彼女だけしか居ない。

アリスは私が記述した物すべてを覚えている。言わば辞書・ライブラリーー。

だから端々にも、これから起こること、私の正体も知っている。

高町なのはでなく、『私』自身の唯一の味方。愛おしい、私のファミリア。もうひとりのわたし。

「ア、リス……わた、し……」

『Please cry and breathe out now.
It muffles, although it is awkward. (今は泣いて、吐き出して下さい。拙いですが、消音をしておきます)』

「うつ、あ、つつ、うあああああああー……っ
！……！！」

私には勿体無さ過ぎるファミリア。

この子のお陰で、私は泣く事が出来る。私はやっぱり弱い、ちつぽけな星でしか——否、スペースデブリの星屑でしかない。

「はっ……はっ………」

『Could it settle down? Meister
(落ち着きましたか？マイスター)』

「……はい。一応は……」

涙を袖で拭い。幾分か楽になれた心持ちで、私は帰路に着きました。ですが、この苦しみでさえ、まだ序の口でもない程軽い物だと、この時の私は知る由もありませんでした。

第1話 タイムリミットまで、あと——（後書き）

ここのなのは見た目も性格も喋り方がマテ子の星光ことセイことシュテルですが、ヲタク成分と大人頭脳の為、思考がかなりまわりまくり超賢く見えますが、一般人だった故に、かなり臆病で精神的強さに、本家なのはと銀河中心核とミトコンドリア並みの差があります。

第2話 星の光の生誕・Birth of a stellar light

side：高町なのは

「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……」

今日は人生最悪の日だと言えます。

4月26日。

とうとうこの日がやって来ました。

少年が怪異と戦う夢も見ました。

十中八九、あれがユーノとジュエルシードの暴走体。

夢だというのに言い知れぬ迫力と命のやり取りに、私は夜中に目を覚まし、それ以後寝れずに翌朝を迎えました。

その所為か、頭は痛い。胃はキリキリする。時々眩暈もする。

正直、コンディションは最悪と言っても過言ではありません。

「大丈夫？なのはちゃん」

「…ええ、軽い寝不足ですので、ご心配なく」

「また夜中までゲームでもしてたんでしょ？あんた普段生真面目なのにそういうことだけは不良よねえ」

「ゲームとアニメは私の生き甲斐ですから…」

以前素で夜更かしし、今に似た状況が何回かあるので、すずかとアリスには怪しまれずに済んではいますが、アリスの胸に抱かれるフレット、その首にある赤い宝石を、私は直視出来ません。

その後、フレットことユーノを病院に預け、すずかとアリスは塾へ、私は古本屋で新しいラノベと漫画を数冊買い。また何時もの海岸線に居ました。

「今夜……なのですね…」

『マイスター
Meister』

「…大丈夫ですよ、アリス。私には……『私』には貴女も居るのですから……」

そう、高町なのははユーノとレイジングハートが味方であった。

でも私にはそこにアリスという存在が、私の味方が居る。

それだけで心強い。それだけで、今まで心が折れずにいられたのだから――

II

夜。

すずかやアリサと、ユーノの引き取り先について相談していたところ、とうとうやって来てしまった。

《誰か》

マイスター
Meister

「ええ、わかっています」

スケッチブックをキュッと抱き締め、アリスから勇気を貰う。

カバンにスケッチブックを入れ、気配を殺し、外に出て、自転車で病院へ。

自転車であるからでしょうか、私が病院に着いた時丁度、フェレットことユーノが窓から飛び出す瞬間でした。

私はペダルを踏み込み、ロケットスタート。運動が出来ない私です

が、自転車の扱いとスピードにはちょっとした自信があります。

窓から飛び出したユーノを横からかつさりながら一目散に走り抜けます。後ろから破碎音が聞こえましたが、無視です無視。

「あ、あなた、は……」

「喋らない方が身の為ですよ。舌を噛みます」

私は自転車のギアと脚のギアを上げ、住宅地をひたすら突っ切る。

戦うにしろ何をするにしろ、この辺りでは被害が大きくなる。

「っ！後ろ！！」

「くっ！」

自転車を横に倒し、片足を地面に着いてのドリフトをしながら十字路を強引に曲がり、目指すは人口が少ない海岸線。

「…はっ…はっ…はっ…はっ…はっ…」

後ろから狙われる恐怖とプレッシャー。

狩られる側の恐怖。

そしてジュエルシードの暴走体ならば非殺傷設定なんて甘っちょろい機能なんて搭載していないでしょう。

正に命のやり取りに、私の恐怖のボルテージは何時の間にかMAXをオーバーブレイク。

勝手に溢れる涙を零しながらやっとの思いで海岸線へ到着。

浜に通じる階段をそのまま自転車ごと飛び降りるものの、着地の瞬間砂にタイヤを取られ、派手にズッコケてしまう。下が砂で助かりましたね。

「ケホッ！ケホッ！こ、ここ、まで、くれば…」

カクカクと震える脚を叱咤しながら立ち上がる。

「あ、あの、大丈夫ですか？」

「ええ、あなたこそ、平気でしたか？」

「は、はい。僕の方は、大丈夫です」

とりあえずは、第一関門の戦闘フィールドの移動は成功ですね。

住宅地でドンパチやるよりは周りを気にしなくて済みますし、視界も開けていますし。

「なにが起きてるのかよくわかりませんが、私はどうすればいいんでしょうか？」

「えっと、あの、それは……」

口ごもるユーノ。

言うなら早くした方がよろしいですよ。

「もう、追いついてきましたか……」

空を見れば、夜空に小さく蠢く影。遠目ですが気持ち悪い不定形生物ですね。

「っ、ごめんなさい！でも今の僕には貴女にしか頼れる人が居ないんです」

本当なら管理局に任せていても良いはずの事を、発掘者だからと先行調査な来る程の責任感。

好感は持てますが、もう少しちゃんとした準備というものをして来

の方が良いと思う私は悪くはないはずです。

「これを——手に取って下さい」

ユーノが口でくわえる赤い宝石。

レイジングハート——

レイジングハートを見た瞬間。心臓が震え、胸が苦しくなった。

今更、もう、後戻りは出来ない。

私は高町なのは——

魔法少女として戦う宿命の星の下に産まれた存在なのだから……。

レイジングハートを受け取る。

煌めく宝石は、星光は今、私の手に渡った。

私は紡ぐ。

其れは聖約——

其れは誓願——

其れは不屈の力を手にする為の聖句――

「我、使命を受けし者成り――」

宝石が光りを放ち、私の足下に幾何学の円形魔法陣――ミッドチルダ式魔法陣を展開する。その色は闇を照らす桜色。

「契約のもと、その力を解き放て――」

宝石と呼応する胸の鼓動。躍動するのは、現実では手に入る事はない。御伽噺の中だから許される超常のチカラ。

「風は空に 星は天に そして不屈の心はこの胸に この手に魔導を――レイジングハート、セットアップ！」

『Stand by Ready・Setup・』

桜色の光りが天に解き放たれ、光柱を作り出す。

『Welcome・New User・』はじめまして、新たなユーザーさん！』

「初めまして、私は高町なのはと申します」

『I am the Raging Heart. I need your help well henceforth. (私はレイジングハート。以後よろしくお願いします)』

「ええ、こちらこそ。それで、私は何をすれば良いでしょうか？」

『Your magic love qualifies you to use me. May I select the optimum configuration for the Barrier Jacket and the Device? (あなたに魔法素質を確認しました。デバイス・防護服ともに、最適な形状を自動選択しますが、よろしいですか?)』

「デバイスはお任せます。服については私のイメージをトレースして構成して下さい」

『It understood. An image, trace e start. (了解しました。イメージ、トレース開始)』

光りが強くなり、文字の書かれた光りの帯が私を包む。

『Stand by Ready.』

宝石だったレイジングハートにパーツが合体し、魔法の杖となる。

それを左手で掴むと、服が光りとなって弾ける。

『Barrier Jacket setup.』

上半身が黒いインナーに包み込まれる。

下半身には黒いハーフズボンが形成される。

インナーの上に白地に黒の縁取りのコルセットと金色の胸甲が形成され、胸甲の上部には赤い宝石を付けた金色のパーツが付き、そのパーツを羽のように左右に広げる。

白地に青い縁取りのオーバーコートジャケットが形成され、袖口には青い腕甲が形成され、上下に別れていたパーツをボルトで固定される。そして両肩にも青いショルダーアーマーが形成される。

下半身はズボンの上に黒いベルトが通され、前開きの白いアウトスカートが形成される。

金色の脛当てが形成され、圧底の黒いブーツが形成される。

レイジングハートをバトンのように頭上で振り回し、利き手の左手に保持し、振り下ろす。

光りの柱が消え、地上に降り立つ。

『How much do you know about magic? (魔法についての知識は?)』

「無きに等しきと思って下さい。ですが説明を受けている暇もないようです」

暴走体が浜辺に降り立つ。

いきなり襲って来ないのは、先ほど私のセッアップした光りの所為でしょうか？

「レイジングハート、私に今出来ること、使える魔法をステータス形式で表示してください。それと、敵の判る範囲でのデータも下さい。出来ますか？」

『Comprehension・Various status is displayed.（了解。各種ステータスを表示します）』

空中に投影される複数のモニター。

敵はジュエルシールドの暴走体。魔力ランク推定A A。

高町なのは、つまり私。

魔力ランクA 空戦適性C 陸戦適性D + 総合ランク推定C +

使用可能魔法

シュートバレット

デイベインシューター
パイロシューター
クロスファイアシュート
チェインバインド
デイベインバスター（2発限定。3発目は不発の可能性大）
プロテクション

ほとほと自分の才能無しには涙すら流れず、渴いた笑いも出ませんよ。A・Sで高町なのはがA A Aランク。この歴然の差はなんなんですか！？

……ですが、チェインバインドとクロスクロスファイアシュートが使えるのは重畳ですね。この時期の高町なのはに出来ない戦法も取れますし。それに私にはアリスも居てくれる。私は退くわけにもいきません。

しかしパイロシューターとなれば、私に魔力変換資質があるのでしょうか？

なのにブラストファイヤーが無いのは単に私の実力不足なのでしょうか？

考えていても仕方ありませんね。

『G a a a a a ! ! !』

「くっ」

第2話 星の光の生誕 - Birth of a stellar light

今の主人公なのは、実力的にはs t s開始時のフォワード陣よりも弱い実力でリミット付きのなのはに挑むような感じで暴走体と戦うような物だと、頭の片隅に置いておいてくださいな。

英語があっているかどうかは激しく微妙なのであまり気にしないでください。

第3話 更なる絶望。しかし星光の輝きは力強く（前書き）

レイハさんは劇場版モデルです。

なのはのバリアジャケットは、簡単に言えば上半身は劇場版に両肩にショルダーアーマーを追加。下半身がstsのアウトスカートというイメージで充分かと

第3話 更なる絶望。しかし星光の輝きは力強く

Side: 高町なのは

『G a a a a a ! ! !』

「くっ！」

飛び込んでくる暴走体を数回のバックステップで回避する。

砂地に脚を取られますが、間一髪で避けられました。

粉塵が舞う地点から目を離さないように努めながら、距離を開けます。

転びそうになりながらも、躓きそうになっても、気合いで脚を動かします。

大体10m離れた所で脚を止め、レイジングハートを暴走体に構える。

『G a a a a a ! ! ! ! !』

暴走体が触手を伸ばして襲ってくる。その数は4本！

「デイベインシューター！」

『Divine shooter』

今形成出来たシューターは3発。

それを放ち、3本の触手を弾く。

『Protection』

「くっ！」

残った一本はバリアで受ける。

ピキピキピキ――

受け止めたバリアが不吉な音を立ててひび割れ始める。

「っ、やはり私では――」

『Front cautions!（前方注意!）』

「なっΣ!？」

レイジングハートの警告。暴走体が触手を押し当てながら私に突っ込んで来たのだ。

『G a a a a ー！！』

ぶつかりあうバリアと暴走体。だが亀裂の入っていたバリアは易々と碎け散り、暴走体の体当たりは私に直撃する。

「がふっ！！」

吹っ飛ばされた私は、防波堤にめり込む形で激突した。

「がつ、あぐっ、…」この、使徒のように器用な」

劇場版破のように、触手を突きながら体当たりなんて攻撃をして来た暴走体に毒づく。あれで目からビームなんて出した日には私は死んでいたでしょう。

『I s i t s a f e ? (ご無事ですか?)』

「な、なんとか……」

めり込む身体を動かして抜き出る。

「くっ、がはっ！」

込み上げる吐き気を無視して、レイジングハートを構える。

しかし暴走体は襲っては来ない。

襲ってこないのならば好都合！

「レイジングハート、デイベインバスターを撃ちます」

『All right・Devine Buster, standby・Mode change・Cannon Mode.』

レイジングハートがその形を変える。白いバレルが追加され、トリガーユニットが展開される。

トリガーに指を掛け、カノンモードの砲口を暴走体に向ける。

『Shoot in Buster Mode.』『直射砲』形態で発射します！』

砲口にミッド式魔法陣が展開され、身体の奥底から湧き上がる力を腕を通して、すべてレイジングハートに！

『Immediate fire when target is locked.（ロックオンの瞬間にトリガーを）』

網膜に投影されているのか、眼に見える景色がロックオンディスプレイに変わる。

「っ、デイベインバスター！シュートッ！！」

脚に力を込め、トリガーを引く。

腹に響く重低音をあげて、桜色の砲撃は暴走体へと一直線に向かう。

この時私は勝利を確信しました。

高町なのはの代名詞、デイベインバスターに撃ち碎けぬものはないと。

ですがそれを放ったのが私だった。そして暴走体が私の恐怖を糧にでもしたのでしょうか。

デイベインバスターが直撃する瞬間、暴走体と眼が合い、そしてその赤い眼は厭たらしく歪めたのです。

直撃し、粉塵を巻き起こすディバインバスター。

『Front watch! Hostile object energy reaction increase! (前方警戒! 敵性体エネルギー反応増大!)』

レイジングハートの警告と同時に粉塵が吹き飛び、目の前が真っ白に染まる。

『Protection』

「きゃああああー!!!!」

展開したバリアごと吹き飛ばされ、再び防波堤にめり込む。

瞬間、バリアが弾け、大爆発を起こした。

「うつ、ああ、ああっ」

『F O O O O』

閃光が晴れ、震える眼差しで見つめる先。

ジュエルシードの暴走体は、不定形な形を捨て、確かな実体物として存在していた。

髪の毛のようになびく触手。

仮面の様な顔。

白いヒトのカラダ。

その胸に輝くジュエルシード。

その全体像は力を司る、最強の拒絶タイプの神の使い。

第14使徒、ゼルエル。その劇場版『破』の第10の使徒の姿に相違なかった。

「は、ははは、はハハハハハ——」

めり込んだ防波堤から抜け出すこともせず、私は笑うしかなかった。

世界は……神は、そうまでして、私のことがそんなにも嫌いなのですか？

私という異物を、排除したいのですか？

暴走体が触手の一対を円柱状に束ねた。

詰みですね。

心が折れた私には、もはや抗う意志すら湧いてきません。所詮私は高町なのは成りえない――

シュキンッと、空を裂くような音が聞こえた。

触手が射出された音。

これで、終わりですね――

『Protection』

無駄ですよ、レイジングハート。

アレには私程度のバリアでは紙に等しいのですから。

バリアの弾ける音、防波堤のコンクリートが砕ける音、そして全身を襲う衝撃。

でも、痛みはありません。ハズレたのですか？

『Please do not give up.（諦めないでください）』

無理ですよ。私には……。

『I do not want to give up. (私は、諦めたくはありません)』

.....。

『I was able to meet the person using me at last. (私はやっと、私を使ってくれる人に出逢えました)』

レイジングハート.....。

『Let's offer all of me to you. I would like to become your power. (私のすべてを貴女に捧げましょう。私は、貴女の力になりたい)』

レイジングハート.....。

『It must not be discouraged. A master and you are not one person. (挫けてはなりません。マイスター、貴女は独りではありませんよ)』

背中のカバンから聞こえるレイジングハートとは別の電子音。

それはずっと私の味方で居てくれる、私のファミリア・もうひとりのわたし -

アリス……。

『being in a you side and keepi
ng the heart, although I can d
o nothing - - if - - it can do.』
私には何も出来ませんが、貴女の傍に居て、その心を守ることぐら
いなら出来ます(』

アリス――

『Therefore, the Raging Heart.
Please become the power which
cuts a master's way. (だからレイジング
ハート。あなたはマイスターの道を切り開く力になってあげてくだ
さい)』

『I understand. I mean to from
the first. Are reliable. (わかりまし
た。もとよりそのつもりです。ご心配なく)』

レイジングハート――

レイジングハートの石突を地面に着き、笑う膝で立ち上がる。

「レイジングハート、私に勇気を、恐怖を打ち砕く勇気を私に！」

『All right, My Master』

自分の脚で地に立ち、レイジングハートを左手に構える。

『Hover Feather』

後ろ腰辺りに桜色の一对の羽が生え、踝辺りにも小さな羽が生える。

これはいつたい？

『The magic for empty games was arranged in land battles. Movement on land becomes smooth now. (空戦用の魔法を陸戦用にアレンジしました。これで陸上で移動がスムーズになります)』

「ありがとうございます。レイジングハート」

ふわりと、少しだけ腰辺りに浮力を感じます。

踵も少し浮かんでいます。

Hover Feather

つまりホバー走法を可能とする魔法ですか。

改めてステータス画面を確認します。

ジュエルシード暴走体 推定ランクA A +

物理質量攻撃 触手（円柱）威力A A 射程推定A + 発動速度推定B +

砲撃 威力A A A - 射程推定B \ A A 発動速度A

高町なのは

魔力ランクA 空戦適性C 陸戦適性D +（ホバーフェザー発動中はA +） 総合ランク推定C +（ホバーフェザー発動中はB）

使用可能魔法

シュートバレット

デイベインシューター

パイロシューター

クロスファイアシュート

チェインバインド

デイベインバスター（2発限定。3発目は不発の可能性大）

プロテクション

ホバーフェザー

「さあ、2人とも、反撃の時間ですよ」

『Comprehension .

Please leave support .（了解。サポートはお任せください）』

『About the fortune of war , it

is
my
my
master
・（ご武運を、マイマイマスター）

第3話 更なる絶望。しかし星光の輝きは力強く（後書き）

ジュエルシードの暴走体が思念体であるからこうしてみました。

デバイスの会話が難しい上に面倒で、さらに確実性なしと散々ですが、レイハさんとアリスはなのはの嫁なので頑張ります。

第4話 星光よ、使徒を撃て！

side：高町なのは

対峙する私とジュエルシードの暴走体。

戦闘力は別として、戦闘能力的にはATフィールドを張らないゼルエルそのままのようです。

捕食やATフィールドはイメージしていなかった為、余計なことを考えるのはもう止めにして、今は目の前のことだけを考えます。

戦力的には圧倒的に不利。

それでも『理性』と『作戦』ならば、高町なのはより私の方が上であるのは確かでしょう。

戦力不足でも、作戦次第ではそれを覆せる。

ティアナだってやってみせたんです。

10年後、出逢うかもしれない1人のガンナー。

彼女の気持ち、今なら私にはわかる。

彼女は周りが、私は高町なのはが、優秀過ぎて負い目を感じるその気持ち。

『Comprehension・Best evasion, Cross Fire deployment! (了解。全力回避、クロスファイア展開!)』

「くうつつ!!」

右から左に後ろに、景色が速流れ、視界の隅に黒い細い影。

視界がディスプレイに変わり、正しく周囲が見えるようになる。

自身の触手を次々に差し向ける暴走体。その数は30本。

レイジングハートとホバーフェザーによる高機動マニューバーによって、バリアジャケットに掠めながらも、直撃は0。

優秀ですね、レイジングハート。私には勿体無いデバイスです。

周囲に浮かぶスフィアは6つ。

「クロスファイア! シュートツ!!」

6発の魔力弾が暴走体に向けて放たれる。

4発は迎撃され、残り2発はあろうことが、暴走体が展開したバリアに弾かれる。

「バリアまで!？」

『Barrier generating of presumed A+ is checked. (推定A+のバリア発生を確認)』

「ならばバリアごと撃ち抜くまで! シュートツ!」

6つのスフィアが一つとなり、砲撃を放つ。

デバインバスターは残り1発。

それ以外で威力を持つ攻撃は、クロスファイアシュートの砲撃バリエーションしか思いつきません。

「レイジングハート! カノンモード!」

『mode change. cannon mode.』

カノンモードのレイジングハートの柄を脇の下に通し、手はライフルを支えるように添え、トリガーユニットを握る。

デバインバスターの衝撃を子どもの私が抑えるのには、やはりライフル銃を保持するようにした方が効率が良いでしょう。それに高町なのはの握り方は、実際にやるとレイジングハートが反動で吹き

飛びそうで怖いんですよ。個人的に。

「デイベインバスター！シュートッ！！」

クロスファイアシュートに続くようにデイベインバスターを追撃に撃つ。

1発でダメならば2発一度に叩き込めば！

暴走体はクロスファイアシュートをバリアで防御。その直後を襲ったデイベインバスターが、バリアを貫くのを、私は確かに目にしました。

バリアを破り、暴走体に直撃する桜色の閃光。

爆発が起き、粉塵が視界を隠す。

「はあ…はあ…はあ…はあ…はあ……」

荒んだ呼吸を整える。

デイベインバスターの直撃。これで片をつけられなければ、私の勝ち目は――

「It is an energy reaction to the center of an explosion!（爆心地

にエネルギー反応！）』

「何ですってΣ!？」

粉塵が晴れ、そこには表層を焼きながら、太い一対の触手をジュエルシードを守るようにクロスさせた暴走体の姿。

「そ、そんな……」

今ので落とせなかった……。

もう、デイバインバスターは撃てないというのに……。

「ッ!!..うおおおおーッ!!..」

地を蹴り、私は一直線に暴走体へ跳ぶ。

「パイロシューター!!..クロスファイアシュートッ!!..」

『Pyro shooter and Cross Fire Shoot』

クロスファイアシュート6発とパイロシューター4発の計10発を

至近距離で撃つ。

ジュエルシールドには、まだ届かない！

「いい加減に——墜ちなさい!!」

カノンモードの砲口を触手に押し当て——

「シュートバレット連射！」

『Shot Barrett automatic fire!』

カノンモードの先端から連射されるシュートバレット。しかし零距离射撃にも関わらず、触手は焼かれるだけでびくともしない。

「あああああ————!!!!」

込めるだけの魔力を込め続け、攻撃の手を緩めず撃ち続けました。
しかし——

プシュン！

「レイジングハート!?!」

『Overload・Compulsive cooling』

撃ちすぎた!？

廃熱の為に攻撃を中断せざる得ないレイジングハート。

その時、視界の片隅で動いた黒い影。

「がつ!！」

気づけば私は上空に打ち上げられていました。

空中では私は身動きも取れない。

真っ逆様に墜ちた私の目と暴走体の目が交差する。その身体には束ねて円柱になった触手――

空中コンボ……

『Protection』

「っ、きゃああああ――!！」

またバリアごと吹っ飛ばされ、砂浜にうつ伏せになる私。

『Is it safe? Master(ご無事ですか? マスター)』

どうする!?!? どうする高町なのは!?!?

デイバインバスターは撃ち尽くし、次点高威力のクロスファイアシ
ユートの砲撃バージョンではバリアを破るには至れない!

他に私が出れることは!?!?

逃げる?

そんなの論外です! 私が高町なのはとなるためにも、こんな所で退
くわけにはいかないのです!

誰かに援軍を?

ユーノは戦えないでしょう。

それにこうも長時間派手に戦い続けているのに人が来ないのは、ユ
ーノが結界を張っているからでしょう。

姿は見えませんが、ユーノがやられてしまっ=ジ・エンド。

バインドで拘束して集中砲火?

無駄でしょう。シュートバレットとはいえ零距离連続射撃に耐え抜いた体組織やクロスファイアシュートとディバインバスターでやつと破れるバリアの前では。

もつと、私に攻撃力のある魔法が使えれば――

『Hover Feather, Output fall! Please master and concentrate! (ホバーフェザー、出力低下! マスター、集中してください!)』

「レイジングハート……」

詰み状態で諦めかけていた私。

そんな私とは反対に諦めずに戦い続けるレイジングハート。

その名の如く、不屈の心を宿すデバイス。

私のような者には分不相応な子。

十全にその性能を引き出してあげられない私をマスターと呼んでくれた子。

私には、レイジングハート、あなたの力を出し切れ――

「……レイジングハート」

『What is it? Master（何でしょうか？マスター）』

「フルドライブを使います。もうそれしか手立てはありません」

『It is it why?（な、何故それを？）』

やはり、あなたは私には勿体無いデバイスです。

初対面の私を気遣う優しい心も持っているのですから。

フルドライブ――

インテリジェントデバイスの最大出力モード。

しかし、リンカーコアが本格的に覚醒したばかりの私では負担も大きいでしょう。伏せていたか或いは使えないのか、レイジングハートの様子から見ればおそらくは前者なのでしょう。

ですがこの暴走体は、手加減して勝てる相手でもないのは本モデルの時点、そして暴走体の耐久性から一目瞭然です。

「生きるか死ぬかの瀬戸際に、躊躇いや出し惜しみは不要です！ですから、レイジングハート！」

『I understand. Surely prepared

ness of the master was received . (わかりました。マスターの覚悟は確かに受け取りました) 』

「ありがとうございます。 レイジングハート」

私はレイジングハートへの感謝の意を噛み締め、身体を立ち上げらせる。

「レイジングハート！その名の如く、不屈の力を私に！」

『All right limit release . Full Drive 』

カノンモードのレイジングハートの砲身フレームから一对の桜色の翼が生える。

フルドライブと同時に身体を襲う倦怠感。 ですが、それを上回る力の鼓動も確かに感じます。

「チェーンバインド！」

『Chain Bind 』

突き出した右手の先に展開されるミッド式魔法陣。

そこから飛び出す6本の桜色の鎖は一直線に暴走体へ。

バリアを展開されましたが、そのバリアごと雁字搦めにしてしまいます。

『Hover Feather, output full op
en!』

「やあああああー！ー！！」

地を蹴り、ホバーフェザーの推進力を得て、私は暴走体の懐へ突貫します。

「デイベインバスター！スタンバイ！」

『All right. Devine Buster, sta
nd by. Charge start.』

カノンモードの砲口に環状線型魔法陣が展開。砲口の先に桜色の閃光が集まっていく。

「うぐっ！」

急に苦しくなる胸を右手で抑える。

『Master！（マスター！）』

「私に構わず続けなさい！」

『∴Comprehension・（∴了解）』

今さら覚悟していたことです。

今は身体よりもアレを撃ち抜く力を――

『It is 5 more seconds till the completion of charge！（チャージ完了まで後5秒！）』

「ホバーフェザーへの魔力供給を80%カット！少しでも良い、チャージにまわして下さい！」

『All right・80% of magic supply cut・Count 4（オーライ。魔力供給80%カット。カウント4）』

速度がガクリと落ちましたが、今は速さよりも攻撃力を少しでも上げなければならぬ時。機動力の低下は何とかすれば良いだけです！

『An enemy part, bind break! A counterattack comes! Numbers are 3 and evasion! (敵一部、バインド・ブレイク！反撃が来ます！数は3、回避を！)』

「構いません！そのまま直進、最小半径で回避！」

襲い来る3本の触手を、東方弾幕よろしくグレイズで回避！

ジャケットとスカートが裂かれ、右腕を掠めましたが――

被弾0。

「周囲に散る残留魔力もチャージにまわして下さい！」

『All right. Count 2 (オーライ。カウント2)』

強固なバリアと体組織を撃ち抜くには、高町なのはの最強魔法でなければならぬでしょう。

デイベインバスターすら2回しか撃てない私には、これを御せるかはわかりません。一か八かのただの博打ですが――

『An enemy and bombardment come! (敵、砲撃が来ます！)』

「空へ!!」

地を蹴り、空へ跳ぶ。

ホバーフェザーに滞空能力があるかはわかりませんが、空へ跳躍した私達の足下を閃光が通り過ぎます。

『Completion of magic charge! (魔力チャージ完了!)』

「レイジングハート! 私を敵の眼前へ!」

『All right. My master! (オーライ。マイマスター!)』

再び襲い来る砲撃を、一瞬だけ解放された推力を得、夜空に輝く星光を背に宙返り、砲撃を回避。

砲撃の熱が直ぐ傍を通るのを感じつつ、再び推力を解放。

また新たにバインドを破壊した触手が反撃に放たれる。

バリアジャケットが裂かれ、左のショルダーアーマーが碎け、左頬を触手が掠め血が流れる。僅かに体勢を崩すも、その瞳に宿る闘志は決して砕けてはいない。

「レイジングハート……私を——」

こんな私の為にその力を示してくれるレイジングハート。私の意思に応えてくれると信じている。

暴走体は目の前！

レイジングハートの砲口に展開する環状線型魔法陣が、トリガーユニットと柄にも展開される。

脅威を目前にして、出力が上がるのを魔法陣を通して感じました。

そうです、レイジングハート。だから私を——

「——私を、勝たせて下さいっ！！」

暴走体の頭上から一気に地面に降り立ち、衝撃の緩和も忘れ、両腕で構えたレイジングハートを暴走体の、体組織、ジュエルシールドを大事に守る触手に突き刺すように押し付ける！

『Starlight Breaker・Stand by Ready』

「これが私の全力全壊！！」

暴走体を縛るチェーンバインドが弾け、その仮面に光りが灯る。

ですが、私達の方が——速い！

「スターライトブレイカー！！デッド・エンド・シュートオオオオオッ！！！！」

トリガーを引く。

集めたすべての魔力が一点に集中し、巨大な星光となって解き放たれた。

「…私の——私達の、勝ちです」

トリガーを引く指を離し、そしてもう一度トリガーを引く。

「ブレイクッ、シューーーーーッ！！！！」

ダメ押しの最後の一撃。

長い長い、されども20分にも満たない最初のジュエルシードとの攻防は、巨大な爆音と付随する衝撃波、そして桜色の巨大な十字架を天に掲げ、終わりを告げた。

第4話 星光よ、使徒を撃て！（後書き）

色々影響受けまくりですが、こんな形で終えてみました。

初回戦闘でフルドライブにスターライトブレイカー

本家なのはより無茶をしないとダメな我が家のなのは。あとがコワ
い……

第5話 実際のリリカルマジカルは命を全賭けするものです。by高町なのは

side:高町なのは

スターライトブレイカーの閃光が晴れると、宙に浮かぶジュエルシード。その数は1つではなく――

「ふ、2つ……?」

『receipt number XX・XXI』

2つのジュエルシードをレイジングハートに納めた所で一気に脱力、膝について四つん這いになってしまいました。

74

ふ、2つなら、あんなべらぼつに強かったわけが理解出来ました――

「っ、くっ、はぐっ、がはっ」

息苦しさで胸の痛みに目を瞑って耐えながら咳き込みます。

「ゲホッ、ゲホッゲホッ」

口から流れ落ちる液体。

唾液ではありませんね。鉄の味がすることから、血でも吐いたのでしょうか。

ある意味当然でしょう。

魔法初心者がいきなりの実戦でフルドライブで無理やりに魔力を底上げし、3発目のデイバインバスターならぬスターライトブレイカーまで使ってしまったのですから、これぐらいで済んだのが御の字でしょう。

四つん這いから胡座に変え、レイジングハートを抱えて身体を預ける。

しばらくは動けそうにもありませんね。ひどく疲れました。

「……………」

side: ユーノ・スクライア

な、なんて子なんだろう……。

レイジングハートの形状から、あの女の子は砲撃型。

なのにあんなに接近して零距离で収束砲を直接撃ち込むなんて……。

魔力量自体は僕とそんなに変わらないのに、この管理外世界には魔法はないはずなのに、あんなに上手く戦えるなんて。

凄い、なんて言葉じゃ言い表せない。

でも――

「あ、あの……怪我は」

「大丈夫です。痛みはありませんから」

そういう彼女だけれど、少なくとも傷も負ってる。

それに――

「私が、高町なのはであることを証明する為に！」

その時の彼女の悲痛な顔。

言葉の意味はわからないけれど、彼女があんなに必死に戦えたのは、その言葉になにか意味があるのかもしれない。

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

side: 高町なのは

やっと呼吸が落ち着いたところで、レイジングハートを杖代わりに立ち上がろうとしますが、膝に殆ど力が入らずに、レイジングハートにもたれかかるように何とか立ち上がります。

興奮状態が落ち着いてきた所為か、頬や背中がヒリヒリしてきました。

腰の痛みなんて久し振りですから長らく忘れていましたが、懐かしさを感じて、私が今此処に確かに生きて存在しているのだと感じます。

「…さて、帰りましょうか」

『It is tired with labor. Meister. (お疲れ様です。マイスター)』

「死ぬかとも思いましたけどね…」

まさか生身で、偽物とはいえ使徒と戦うなんて。しかも力を司る最強の使徒。

外から撃つても仕方がないから零距离で撃ち込みましたが、良くこれだけの軽傷で済んだと、普通なら手足の2、3本失っててもおか

しくない攻防でしたね。

今後を考えると、もっと作戦なり戦術なりを考えていかなければなりませんね。

あのジュエルシードの暴走体でランクA A +

ランクA A Aのフェイト・テストロッサと戦うには、今の私では絶望的。

それを覆す戦術を考えていかなければ。

私が高町なのはを証明する為の戦いは、始まったばかりなのですから――

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

家に帰った私は、私専用の倉庫兼作業部屋で自転車の整備をしてからお風呂に入って自室で眠りに着きました。

ユーノは今頃母様に揉みくちやにされているでしょう。

ちなみに高町家には私の部屋の窓から直通の小さな小屋があり、剥き出しの柱と木壁だけの1階部分は物置として使い。2階は私専用の書斎兼絵を描いたり、機械を弄る作業台のある部屋となっていま

置ききれないプラモの大半も向こうです。

作業部屋に籠もると何時間か出て来ないのは当たり前、ユーノの事を訊かれた以外はなにもありませんでしたよ。

翌日。目を覺まして左の頬に触れる。

そこには絆創膏が貼っており、昨日の事が現実であることを実感させてくれます。

「あつ、いたたた——」

ついでに腰の痛みや筋肉痛もプラスされます。

[illegible]

「おはようなのは！って、どうしたのよ！？そのほった！」

バスに乗ったところでアリサに声を掛けられました。すると心配そうに私の方に駆け寄ってきました。

「なんでもありませんよ。昨日少し階段から脚を滑らせてしまっています」

「ちょ、それなんともないなんて言わないわよ！病院行つた！？行つてないなら今すぐ行きましょー！」

「アリサ、とりあえず落ち着いて下さい。階段とは言つても5段くらいからだつたので、少し痣になりましたが概ね問題はありませんですよ」

「あーんつもー！！だからなんであんたはそうやって冷静に言うのよ！？痛いなら痛いって言いなさいよ！あんたケガしても、いつもいっつもなんでもありませんしか言わないのよ！」

心配してくれるのは有り難いのですが、一応大人である私には子どもにする怪我の痛みはあんまり痛くないのは事実なんですよ。

それに怪我という怪我は頬だけですから、心配も要りませんよ。

っと、言葉で言つても聞きそうにないだろうアリサの手を引いて、いつもの後ろの席に座ります。

「ちょ、ちよつとなのは……」

「あなたは優しいですね、アリサ」

「あ、当たり前じゃない！な、なのはがケガしたら私だって痛いん

だから……」

頬を赤くして目を潤す仕草は一種の破壊兵器ですね。良心が痛みます。

「おはようございます。すずか」

「お、おは、よう。なのは……ちゃん……」

私が挨拶をすると、すずかは顔を背けながらもチラチラと目を向けては背けをしながら返事を返してくれました。

確かすずかは吸血鬼一族の設定で、以前体育で顔面にボールの直撃を貰い、軽く鼻血を出した時もこんな反応でしたね。

一応頬と右腕は、暴走体の攻撃で出血していましたが、血の残り香に自分と戦っているのでしょう。

こういう時は触れぬが友の為ですね。

私は良い友人を持ちました。

学校に居る間はユーノから事情を聞く片手間、レイジングハートには機体設定と魔法関連のアジャストを頼んでやって貰いつつ、デバイスのデータをアリスにもリークして貰っています。

これによって使える魔法と、今は不要な魔法や私が使いたい魔法を
チヨイスしてアクショントリガーに登録していきます。

そして放課後、送っていくというアリサの誘いをやんわり断り、帰
路に着きます。

アリサとすずかには塾がありますし、密室に近い自家用車ではすず
かの理性が心配ですし、確か今日も1つジュエルシードが発動する
はずだったような？

第1期はテレビでなく二次創作からの知識が主である為、かなり曖
昧不確かなのが難点なんですよね。

劇場版はちゃんと見ている分心配はありませんが、初っ端からジュ
エルシードの数に違いがありますから、どっちのルートを進むかわ
からないんですよ。

一番手っ取り早いのはバルディッシュの形が判れば一目瞭然なので
すが。

とりあえず今、レイジングハートは色々忙しい為、適当に街の中
心へ向かうことにしましょう。

それならば何処かで発動しても瞬時に駆けつけられますしね。

そして街の中心へ向かいつつ、アリスをどんなデバイスにするのか
を考えます。

インテリジェントデバイスなのは確実です。レイジングハートが劇
場版形態の為、TV形態のレイジングハートを再現してみたい思い
もあります。喧嘩になりそうですね。

他にはバルディッシュのように近接戦闘を主眼に置いたデバイスにするという手もありますが、運動神経のない私に扱えるかが問題ですね。

《それにしても、なのはって何者なの？そのインテリジェントデバイスにしても、こっちは魔法は無いはずなのに》

《何者と言われましも、特別何かをしているわけではありませんよ。それにこの子は私のファミリアですし、魔法という物がなかるうとも、魔法という概念は、御伽噺やゲームの中には存在していますし、まったくゼロというわけでもないと思いますけど？》

なにせ吸血鬼なり御神流なりが存在する世界です。

ここにトラハが本格的に混じっていたらそれこそ、この世界も管理指定を受けるかもしれないでしょうね。

しかし管理とはいえど、その実態はミッドチルダを中心とした中央集権支配体制にも見えなくありませんし、管理局のトップがあるエゴ塗れの脳髓で思考がお花畑な人達では、この世界とは全面戦争にでもなりかねませんね。

ただでさえ、質量兵器に潔癖症をもつミッドチルダの人間では、この地球は危険物の塊でしょうし。

《なのは？》

《……すみません。少し考え事をしていました》

今考えても仕方がないことですネ。

『The completion of adjustment .
The next battle to a motions
hould become light now . (アジャスト完了。これで次の戦闘から、動きが軽くなるはずです)』

「お疲れ様です。レイジングハート」

レイジングハートはこんな私に力を貸してくれるのですから、私はその想いにも応えなければ――

その時、強い魔力の波動を感じました。

この波動は――

《なのは！》

《ユーノ、今の感覚が》

《うん。ジュエルシールドだ！結構近い！》

《私は先行します。ユーノもなるべく速く来て下さい》

《ダメだよなのは！1人じゃ危険だ！》

《こうしている間にも、暴走体が暴れている可能性もあります。足止めて、被害を食い止めておかなければ……》

《ちょ、なのは！なのはったら！》

私はユーノの言葉を見殺し、駆け出します。

運動神経は皆無でも、走って転ぶような無様は——自分のペースを乱さなければ晒さないようにはなりました。50m13秒台ですが……。

やってきたのは海鳴市で少し高台の方にある神社。名は確か八束神社でしたか？

「いきますよ、レイジングハート」

『Stand by Ready』

我、使命を受けし者成り——

契約のもと、その力を解き放て——

風は空に 星は天に そして不屈の心はこの胸に——

この手に魔導を——

「レイジングハート、セットアップ！」

『Stand by Ready・Setup!』

レイジングハートがデバイスモードへ変形し、私の服もバリアジャケットに再構成される。

「レイジングハート！」

『Hover Feather』

背中と足にホバーフェザーが展開。

そのままホバー走行で神社の石段を駆け上がる。

最上段で勢いをそのままに跳び、神社の鳥居の上に飛び乗ります。

そして境内には――

「あれは――狐……ですか…?」

『Kuooooo――!!』

遠吠えをする巨大で凶暴そうな狐が私を一直線に見つめています。
どうやらターゲットを私に絞ったわけですね。

「征きましょう。レイジングハート、アリス」

『My master which should go!（行き
ましょう、マイマスター）』

『Please do your best. It is the
Raging Heart to a master.（頑
張って下さい。マイスター、レイジングハート）』

ジュエルシード暴走体：狐型 魔力ランクA+

高町なのは

魔力ランクA 空戦適性C 陸戦適性D+（ホバーフェザー発動中
はA+）総合ランク推定C+（ホバーフェザー発動中はB）

使用可能魔法

シュートバレット

デイバインランサー

デイバインランサー・ファランクスシフト

クロスファイアシュート

クロスファイア・バーストモード

ファントムブレイザー

デイバインバスター（2発限定。3発目は不発の可能性大）

スターライトブレイカー（フルドライブ時条件付きで使用可）

プロテクション
バリアバースト
リングバインド
チェーンバインド
クリスタルケージ
ブリッツアクション
ホバーフェザー
フィジカルヒール

「アジャストのお陰で使える魔法も増えました。昨夜のような無様な遅れはもう取りませんよ！」

第6話 新しい友達は『くおん』です（前書き）

調子良かったので連投です！

第6話 新しい友達は『くおん』です

Side: 高町なのは

レイジングハートを眼下の暴走体へ構える。

『Kuooooooooo!!』

暴走体は口から雷撃を吐き出した。

「レイジングハート!」

『Protection』

右手を突き出し、バリアを張る。

激突するバリアと雷撃。

「っ、きゃうつ!!」

『Master! (マスター!)』

突き出した右手に鋭い痛みとピリピリとした痺れにも似た感覚を感じる。

何故！？防御には成功したはずなのに！

『K u o o o o o n ! ! ! 』

暴走体の周りに展開されるバチバチと電気を発するスフィア。

プラスマランサー？それともスタンバレット？

『K u o o o n ! ! 』

対空するスフィアが放たれる。

直射型のバレット？

「レイジングハート、もう一度！」

『P r o t e c t i o n 』

またバリアで防御。突き出す手も変わりません。

「っ、きゃああー!!」

『Master!?(マスター!?)』

またです。バレット自体は防御出来ているのに、スタン効果だけがバリアをまるで素通りしているように――

「まさか!?!」

八束神社、狐、電撃、リリカルなのは――

4つのパズルから導き出された答え。こういう時は自分の無駄に回転の良い頭を疎ましく思います。

「最悪です……」

もしアレが私の考えている存在ならば、私は暴走体の攻撃をすべて回避しなければなりません。

「レイジングハート、これから先は防御は考えずに、機動攪乱で攻めますよ」

『I understand. I also judge th

at it is wiser. Please do not
carry out unreasonableness. (わか
りました。その方が賢明だと私も判断します。ですが無理はしな
いで下さい)』

「それは向こうが許してくれませんかでしょうね」

『Fushuuuu……』

バチバチと帯電する暴走体。体勢を低くしていると、突っ込
んでくる気のようにです。鳥居を壊される前に私は鳥居から跳躍し、
神社の屋根を足場にし、神社の裏手の森の中へ逃げ込みます。

アレを封印するには少々骨が折れそうですね。

『High plasma object! It is rap
id approach from back! (高プラズマ体！
後方より急速接近！)』

「回避後、180度ターンと同時にデバインランサー展開！」

『All right!』

地面を滑りながらスライドマニューバーでプラズマ体を回避。

思った通り、プラズマ体は囷。

短距離限定の超高速移動魔法——ブリッツアクション。

高町なのはのように魔力の無く、バカスカ砲撃を撃てない私には一撃一撃が勝敗の決め手になってしまふ。さらに魔力の所為か、経験の所為か、練度の所為か、砲撃の威力も高町なのはには及んでいないように思えるのです。

そこで編み出したのが、近々中距離での攪乱から一気に懐へ飛び込んでの零距离一撃必殺砲撃。

砲撃魔導師とはかけ離れた戦闘スタイルですが、私はこうしなければともな一撃が入らない。なりふり構ってはいられません！

私の右手の拳の先に展開される、環状魔法陣が取り巻くスフィア。

『K U O O O O O O ! ! ! ! !』

デイバインランサーの爆煙から飛び出して来た暴走体は口を開け、私に噛みつくこうとする。

私はブリッツアクションの加速をそのままに身を屈める。

上を過ぎ去る暴走体の口。

懐を捉え、ホバーフェザーの推力を上ベクトルで解放しながらアッパーを叩き込み、予め用意していた魔法を解き放つ！

「デイベインバスター……！」

零距离でのディバインバスター直接攻撃。

スバルが近代ベルカ式で放つそれを真似た物ですが、ディバインバスターはディバインバスター。

威力は十分であり、加速度も相まって相当のアップになっているハズ。

現に私の3、4倍ある暴走体の巨体が浮き上がっていますし。

Mode change! Canon mode! Device Buster. Stand by Ready!

カノンモードに変形したレイジングハートを、浮き上がった暴走体の、ディバインバスターを打ち込んだ同じ箇所突きつける！

「シュートッ！」

トリガーを引き、再び零距离でディバインバスターを放つ！

K
y
o
o
o
o
o
-
-
-
-
!
!
!
!
!

「ジュエルシード、封印！」

『Sealing.』

光りが晴れ、ジュエルシードと分離された狐。

『receipt number XVI.』

「スウ……ふう……」

深呼吸をして、緊張状態を解きます。

やはり使える魔法が多いのは助かります。

それに昨日に比べて疲労感も大分軽いです。やはり優秀ですね、レイジングハートは。

「……………」

ジュエルシードに取り込まれていた狐を抱き上げてみます。

「……………」

もふ――

「…………ふにゃあ…………」

な、なんですかこのふっくらもふもっこりもかまかの癒やし物体はΣ!?

「なのは!?!」

「ユーノ?」

ユーノが来た様ですね。

「なのは!ジュエルシードは!?!」

「しーっ、ですよ。ユーノ」

「???」

とりあえず狐を抱えて、出来るだけ振動を出さずに裏路地の住宅街の屋根をブリツツアクションとホバーフェザーを使って駆け抜け、家に向かいます。

は、早くこのモコモコをゆっくり堪能したい!

side: ユーノ・スクライア

なのはの才能には舌を巻くというか、昨日の今日。まだ24時間経ってもいないのにもうレイジングハートを使いこなして魔法を使うバトルセンスは恐ろしく思う。

でも何よりも恐ろしいのはその戦術展開と思考速度と判断力。

なんかもう、僕も9歳にしたらそれなりに普通の9歳とは違うのは環境上自覚しているけど、なのはのそれはかなりぶっ飛んでいるように思える。

「ふにゃあ……」

なんかトロっとした目のままテレビゲームをしているのは。

その原因はその胸元で寝ている狐。

なのはの話とレイジングハートの戦闘ログから、ジュエルシードに取り込まれた狐らしい。

原因で思ったけど、やっぱりなのはタクティクス能力はこのテレ

ビゲームが原因かもしれない。

何度か挑戦してみたけど、ノーマル難易度でもかなり難しいのに、ハードモードはもつと難しい、てか僕にはノーマルですら無理なのに、なのは縛りプレイというのもやる上に、これでも簡単な奴だつて言うんだ。

ちなみに難しい奴は1ステージすらクリア出来なかった。これがなのはが言うムリゲーっていう意味を正しく知った時だった。

でもこの魔装機神つてやつはスゴいなあ。

確かに空想の設定でも、僕達の魔法とはまた違った解釈に興味がないよ。頑張つてやってみようかな？

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

side: 高町なのは

至福です。

もはや語るまい……。

言葉は不要か――

言葉を飾ることに、意味はない。

ただただ、至福です。

「……クー……クΣ!？」

あ、起きたようですね。

キヨロキヨロ見渡している様がまたなんとも……。

至福です。至高です。アリサに匹敵する程の萌えです！

「Σ!？ クー……!！」

後ろからもさもさの物体を抱き締めます。

……ふにゃあ……。

「クー……!!クー……!!！」

「な、なのは、その子嫌がつてない？」

「なにを言いますかユーノ？ただ状況を理解出来ずに混乱しているだけでしょう？もう大丈夫ですからね？怖い物は私が取り扱いますから」

泣き声を上げて狐はもがき続けてる。

ユーノは見えて思った。

狐はなのはを見て余計に泣いているんじゃないかと。

しかしそれは口にしなかった。

もし口にしたら自分もアッパーデイベインバスターからレイジングハートの零距离デイベインバスターの2連多段コンボでノックアウトされると僅かばかりにも想像して身震いがしたからだ。

「クーーーーー!!」

「あっ……」

脱出に成功する狐。一目散に部屋の端に行くが、なのはの部屋は高町なのはの部屋より物が多くてかなり狭い。

狐は本棚の影に隠れるが、なのはの方を見ていた。

目のあったなのはは微笑むと、狐は本棚の影に隠れ、そしてゆっくりと顔を少し出してなのはを見る。

恐いけど気になる。そんな感じに。

「初めまして、私は高町なのはと申します。あなたの名前は？」

「……クー……クオン……」

「そう、久遠——ですか」

「クオツΣ!?!?クー……」

私が久遠と正しく発した言葉にはつきりとビクンっと反応する狐。

状況証拠的にも、この狐は十中八九とら八の久遠なのでしょう。

ですが家には居候人は居ませんし、高機能性遺伝子障害病——通称HGSでしたか？

それについてもまったく情報はありませんし、いったいどの程度この世界にとら八が混じっているのか皆目見当もつきません。

劇場版かTV版かも知らないのに横腹からとら八まで突っ込まれたら私もどうすればいいかわかりません。

戦闘民族高町家。

もしとら八設定に汚染されていたら兄様と父様には私が夜に出掛ければ間違いなく気づかれるでしょう。

以前から海岸線に夜、泣きに行っていたことがあります、それでも月に一度二度あるかないか、あまり出歩いては心配もされます。

あまり夜は動くべきではないのでしょうかね。

「久遠、こっちに来て下さい」

膝をポンポン叩いて促しますが、久遠は固まったまま動きません。
仕方がありません。

「クオン！？クー、クー」

「…ふにゃあ……」

至福です……。

「クーーーー！！」

「あ、あはは……」

現在封印したジュエルシードは3つ。

お供はユーノと久遠です。

「え？僕オトモ扱い？」

「クウーーーー！！」

「…ふにゃあ……」

第6話 新しい友達は『くおん』です（後書き）

V S 久遠でしたが、この久遠は未だに封印状態にあるため弱いという設定です。

しかも使える魔法の種類が増え、戦術の幅が広がり、ゼルエルを倒した我が家なのはの経験値はデカかったのです。

決して久遠が弱いんじゃなく、なのはがちょっと強くなったのです。

とりあえず久遠をお供にする為に高町式 O H A N A S I で
も♪

ちなみにとらハキヤラは今のところ久遠だけで限界です。

意見・感想をお待ちしております。

第7話 御神の剣（つるぎ）（前書き）

ちよつと長めです。

第7話 御神の剣(つるぎ)

side:高町なのは

ユーノを迎えたばかり故に、久遠もとなるとさすがに断られそうだと思った私は、家族には内緒で久遠を部屋に置くことにしました。

久遠はまだ少し身持ちが固いですが、それでも餌づけと毎日抱き締めて寝る事で、敵でない事をアピールします。

ジュエルシード、魔法と出逢って5日目。集まったジュエルシードは3つ。

高町なのはと違い、夜は出掛けずというか、出掛けられない理由が複数あり、これ幸いにとちゃんとぐっすり寝るようにしている為、疲労感は無く。レイジングハートも二度の戦闘経験から私の為にアジャストとブラッシュアップを繰り返して仮想戦闘シミュレーションを繰り返してデータを蓄積・更新の繰り返しで、日に日に少しずつですが、動きも良くなってきたように感じます。しかし私の戦闘スタイルは未開発で開拓中のスタイル。

まだ的が大きいジュエルシードの暴走体だから当てられるものの、フェイト・テストロッサにはまだまだ届かないでしょう。

たとえ勝てずとも無様に墜ちるわけにはいかない。これは元男の私自身の男の意地というものです。墜ちるば諸共――

そんな心構えで挑むつもりです。

さて、今日も学校ですね。

ユーノを肩に乗せ、久遠を置いて一度部屋を出て一階のリビングへ。

「母様、おはようございます」

「おはようなのは、ユーノくん」

キッチンでは母様が朝食の支度中ですが、他の皆が見当たりませんね。

「父様達は道場の方ですか？」

「そうよ。あ、ちょうどいいからなのは、みんなを呼んできて頂戴」

「わかりました」

玄関よりも近い縁側の方に回ってサンダルを引っ掛け、道場へ向かいます。

《そう言えば、道場って言ってたけど、なのはの家族はなにかやっ
てるの》

ユーノが念話で質問してきます。そういえばちゃんと説明していませんね。

「永全不動八門一派・御神真刀流、小太刀二刀術」

《え、えーっと……》

《御神流は、二振りの小太刀を主軸に、飛針——棒手裏剣のようなものや鋼糸こしと呼ばれるワイヤーのようなものなどの暗器、さらには体術なども用いた総合殺人術です》

《さ、殺人術って……》

《御神流は御神家という、父様の血統列の家の流派で、表立った要人警護を主とする御神流。そして父様の旧姓の不破家は要人暗殺を主とする御神流・裏を伝えているのです》

《な、なんか、壮大だね……》

《ええ。それで父様は師範代、兄様は師範代理、姉様は兄様から御神流を教わる門下生のようなものです。これが戦闘民族一家高町家の戦力図形態です。陸戦限定なら推定A A AからS +、条件付けでS Sクラスでしょうね。私の私見ですが》

《す、凄いなだね……》

《達人ともなれば、表面を傷つけず衝撃で物の内部だけに破壊を引き起こしたり、模造刀でドラム缶を一刀両断することも可能です。以前兄様のことを見たこともあります。スピード重視の剣術であるため、

力の強い者が用いる剛の剣に対しては多少不利な面もありますが、超能力を用いない純粹な人間本来の肉体・能力のみを用いた、『戦士』としての武術の中では屈指の流派でもあるでしょう』

《も、もういいよなのは。早く行こう》

《そうですね》

改めて御神流のことを軽く振り返ってみたこの時、私は思いました。そんな戦闘民族一家高町家の末妹である私にも、その血が流れているお陰で、2体の暴走体との戦いでも大きなケガもなく無事に終えられたのではないかと。

御神流――

それのお陰で一度父様は命の危機を迎えました。

そのお陰で少し嫌悪感を持っていましたが、場合によっては兄様が姉様に頼んでみましょう。

近接高機動戦闘型砲撃魔導師――

私の戦闘スタイルから造称した砲撃魔導師の新スタイル研究、開拓、開発、探求、確立の為に。

少しでも、戦術の幅を広げる為に――

道場へ足を踏み入れると、腕を組んで立っている父様。そして道場の中心で――

「せえいっ!」

「ふっ」

二本の小太刀の木刀で打ち合う兄様と姉様の姿。

「父様」

「ん、おはようなのは。そろそろ朝ごはんか?」

「はい。母様が呼んでいます」

「ありがとうな。でももう少し待ってくれ、今良い所なんだよ」

「良いところ?」

小太刀を構え鰐競り合う2人。

私は近くで見ようと父様の近くに寄ろうとしますが――

「おっと……なのは、そこから先は来ない方が良いでしょう」

「え…？ツ！？」

ゾクリッ、と。

背筋が冷たくなる感覚。

いきなりの感覚に身体が勝手にバックステップ、感覚を感じた方向に身体が身構える。身構える先には兄様と姉様。まさか――

「今の……」

「んー、まあなんだ、殺気というか闘気というか……なのはにはまだ早いかなー？」

「いえ、言葉の意味は解せます父様」

頬と背中を冷や汗が流れ落ちる。

暴走体からは感じませんでしたから、初めての感覚に驚いてはいませんが、死線を潜り抜けた身、恐怖はそこまでは感じませんが、真正面から向けられたらわかりませんね。

高速の領域、私の視界では捉えられない速さの攻防に、改めて高町家の非常識さを実感します。

《すごい……これほどの戦士は僕たちの世界にもそうそう居るものじゃないよ》

《現代にもあまり居ないと思いますよ……》

《あ、なのは、危ない!》

《え? なっΣ!?!》

ユーノとの念話の最中、一本の小太刀が私の方に回転しながら飛んで来ます。

また思考より身体が先に反応する。一瞬で戦闘体勢と思考を切り替えられるようにはなりました。

身を屈めながら腕を引き締め、上を過ぎ行く木刀へ身体全身のバネを使った渾身の一撃で――

「デイベインバスター!!」

力チ上げる!!

クリティカルヒット、自分でも納得の行く入りの一撃に、私も少しずつ強くなっていることを実感します。

打ち上げられた木刀はそのまま天井に突き刺さると、床に落ちました。カランカランという音が道場に響き、ドンツという私の着地音が続けて響きます。

自分の右手を感覚を確かめるように握って開いて、そこで思考が切り替わり、気づきました。

や、やってしまいました……。

や、厨二病と言えば誤魔化せるでしょう。

「いやあ……凄いななのは、何時の間にそんなこと出来るようになったんだ？」

父様が和やかな声で言いながら、私に歩み寄って頭を撫でてくれました。

幾つになっても、頭を撫でられるのは良いものですね。

「ごめんねなのは、びっくりさせちゃって」

「いえ、偶然ですからお気になさらずに、姉様」

「驚かせてすまなかったな。それと、あの一撃は中々の切れだったぞ」

「恐縮です」

そう言って頭を撫でてくれる兄様。

言葉は少ないですが、こうして態度でそれを補ってあまりあるのが兄様。

その辺りが大変好ましく、尊敬しています。

「恭也には、俺からいう事はもうあまりないな。俺より強いんじゃないか？」

「まさか……まだ敵わないよ」

兄様でも敵わない父様はどれだけ強いのでしょうか？

それにしても、兄様もやはりとら八方面色が強いように感じます。何より踏み込みの時に一瞬脚を庇うように見えました。

おそらく私の知らない所で膝を壊している可能性もあります。

もう、劇場版とかTV版以前に、どこからリリカルなのか、どこまでとら八なのかまったくわかりません。

そのうちHGSとか出て来たりするんじゃないんですか？

そうになったらもはやカオスです。

「どうだ、なのはも御神流やってみないか？」

父様が私にそう言います。これは渡りに船ですが、ジュエルシードを探す時間の兼ね合いもありますし。

「…軽く、朝の稽古をつけてくれますか？」

「ああ、良いとも！」

私の言葉に父様は微笑みながら頭をガシガシと撫でてきました。

兄様より大きくてゴツゴツしている手。

私はこの手が大好きです。

「あゝあ、とうとうなのはも御神流を習うのかあ……なんか理不尽」

「俺は8歳から御神流をやっていたから、丁度良いと思うが」

「だってあの運動音痴のなのはが、あんなアッパー決めちゃったんだよ！？私なんか直ぐ追い越されそう……」

「良かったじゃないか、その分、身につく速さが上がるんじゃないか？」

「わ〜んなのは〜！！恭ちゃんがイジめるう〜！！」

いや、今はなのは拾ってきたフェレットと狐が居るか……。

その事で少し気になることもあるのだが……聞いて答えてくれるわけでもないだろう。あの子は必要無いことは言わない子だからな。それに今言えずとも何時か話してはくれるだろう。さて、暇だからな、ここは一つ……。

「久しぶりに手入れでもするか」

剪定道具を取り出し、庭の盆栽へと向かう。

パチン――

意図せぬ方向に伸びた枝を切り落とす。

美由希や忍には年寄り臭いと言われるこの趣味だが……美由希は園芸、忍なら機械いじりといった事をしているんだし俺の場合、偶々対象が盆栽だったただけだ。

何よりこうしているとどこか心が落ち着くし、考え事をする時にもなかなか良い。

「あの日、からだよな」

5日前の夜、なのはの拾ってきたフェレット。

作業部屋に紛れ込んで、中身を引っ掻き回され怪我をしたとなのは言っていたが、頬からの他に右腕の方からも微かに血の臭いがした。

そしてその翌日の夜には微かに焦げ臭い、あれは人肌の焼けた臭いだった。

機械いじりで火傷したと言っていたが、その日から家に狐の気配も増えた。

フェレットに狐となのはの怪我。何か関係でもあるのか？

それに朝、道場で俺と美由希の気迫を感じて見せた行動と、俺が弾いた美由希の木刀を力チ上げたアッパーに着地の体勢。

俺が言うのもなんだが、高町家の中で一番平々凡々に育ってきたなのは、何時の間にか荒削りだが戦闘経験者のような動きと気配を發した事。

何かあったのか、やはり気にし心配にもなる。

父さんもそれを気づいてなのはに、本人がどこかしら嫌悪感を抱いていた御神流を勧めたのかも知れない。

父さんが怪我をしたのはなのはが今の性格になってからの事だ。あの子は鋭い子だ。

御神流と——正確にはSPの仕事と父さんの怪我の関連に気づいていたのかも知れない。

それに俺の焦りとプレッシャーも。

その所為で、俺は一度妹の心を潰しかけてしまった。

俺達家族の罪。

だから父さんも怪我を期に仕事を辞めた。

俺も焦りとプレッシャーから来た無茶からの怪我を経て、御神流を、ただ父さんのように強くあるのでなく、大切な物を守る為に振るう事にした。

怪我が治りきらない俺には御神流剣士としての完成は絶望的だが、それは時間をかけて美由希がやってくれるだろう。

剪定のハサミ、その刃を小太刀の刃に重ねる。

「恭也、お前に守りたいものはあるか？」

昔々、そこまで昔じゃないが、父さんに言われた言葉。

その時の俺はまだガキだったからどうにも答えられなかったが、あの日、なのはが泣き腫らした顔をしてスケッチブックを大事に胸に抱いて、怯えながら帰ってきた末妹の姿を見た日から今日まで、そしてこれから先もずっと胸を張って、俺は父さんに言える。

俺が振るう御神流は、大切な物を守る為にあると。

「……………」

side：高町なのは

夜の間はエリアサーチで海鳴市を重点的に調べ、遠見市はアルフがエリアサーチをかけているかもしれないし、海鳴市しかエリアサーチは使えません。

「命拾いしましたね……」

八束神社にジュエルシード反応。

これを久遠が取り込んでいたら私は焼き肉になっていたでしょう。

《なのは……》

「ええ、行きましょう」

「クオン」

「いってきます。久遠」

我、使命を受けし者成り――

契約のもと、その力を解き放て――

風は空に 星は天に そして不屈の心はこの胸に――

この手に魔導を――

「レイジングハート、セットアップ!」

『Stand by Ready・Setup!』

レイジングハートとバリアジャケットを展開し、久遠を一度抱き締めてから、ユーノを肩に乗せて窓から外へ。

「レイジングハート」

『Hover Feather』

ホバーフェザーを展開し、暗闇の住宅街を駆け抜ける。

「レイジングハート、速度を上げて下さい」

『All right・Blitz Action!』

ブリッツアクションも使い、さらに速度を上げて八束神社へ。

|| || || || || || || || || || || || || || || ||

side: 高町恭也

大学の帰り、なのはの気配を感じて、その感じた方向を見れば、家の屋根を高速で駆け抜けて行ったなのはの姿。

肩にはクーノ。手にはなにやら知らんが、ステッキを脇の下と左手で保持していた。まるでライフルを保持するように。

「なのは…」

俺はなのはを追って駆け出す。

なのはの見据える先、その視線の先は八束神社。

|| || || || || || || || || || || || || || || ||

side: 高町なのは

八束神社へ辿り着いた私はホバーフェザーを消し、境内を見渡します。

「境内には……無いようですね。もしかしたら裏の森でしょうか？」

「そうかもしれないね。行ってみよう？」

「ええ」

神社の裏側の森の中、とりあえず投影モニターに移した久遠との戦闘ログを振り返りつつ、久遠との戦闘場所にはサーチャーを、私達はその反対側へ向かいます。

ユーノの結界も張らず、剥き出しの空間でディバインランサーやディバインバスターを放ったのですから、その魔力余波に反応せず動しなかったジュエルシード。

それが意味するのは、魔力波が届かない場所にあったか、あとから持ち込まれたか――

魔力流を打ち込んで強制発動とかの方が速いんでしょうが、フェイト・テストロッサのような無茶を出来ない私はそれも出来ない。サーチャーへの魔力も戦闘を想定するとそこまで数もまわせませんし、地道に探すしかありません。

「とは言え……少し視界が悪いですね」

森は薄暗く、闇夜に慣れてもやはり視界が悪いです。

夜空を仰ぎ見る。

漆黒の闇夜に浮かぶ満天の星光。

その中に浮かぶ月。

その月明かりのお陰である程度の光量がありますが、森を照らすには足りません。

「確かに、こつも暗いとね。僕が照明魔法を使うからちょっと待ってて」

ミッド式魔法陣がユーノの前に展開し、スフィアを形成。

これが証明魔法ですか。魔力光に関係なく普通の証明の照らすスフィア。

「これで少しは探しやすくなったかな？」

「ええ。では再開しましょう」

side: 高町恭也

後を尾けてるつもりだったけど……実際の俺は家で寝ていて夢でも見ているんじゃないだろうか？

思わずそう考えずにはいられない。

まず、ユーノが喋った。そして魔法とやらを使った。

なのは前方には火の玉のようなものが浮いている。

だが、これは夢ではなく、現実。

比較的俺が落ち着いているのは……変異性遺伝子障害と言う病気の副作用で黒い翼を持った幼馴染、そして夜の一族といったものを既に知っているから。

「超能力、吸血鬼、自動人形と来て……魔法……か」

しかもそれをなのにも使っている。

神速にも似た移動法を使っていれば、飛んでくる木刀位は迎撃は出来るか。

しかしこれで大体は読めてきた。

なのはは、妹は、かつての俺のように幼いながら、もう戦う戦士であるのだと。

ある程度納得できたが……何故こんな所に？

その時、ふと頭上で何かが羽ばたいたような音。

こんな時間にか……？この林でも、今まで鍛錬は幾度となく行なっているが、梟など夜行性の鳥類はいなかったはずだが。

side:高町なのは

...

「なのは、これは……」

「ええ、ジュエルシードの気配……上！」

Gu a a a a | | | | ! !

「ッ！プロテクション！」

『Protection』

「くっ」

右手を突き出し、バリアで羽を受ける。

ボンッ！ボボボンッ！！

「きゃあっ！」

「炸裂弾！？なのは大丈夫？」

「ええ…」

炸裂の余波は貰いましたが、怪我はありません。

「レイジングハート、デイベインランサー展開！」

『All right！ Divine Lancer・ Stand by Ready！』

「ファイア！！」

6つのスフィアからデイベインランサーを連射。しかし暴走体は空へ飛び上がり、デイベインランサーを回避する。

「このっ」

『G u a a a ー!!!』

「ファイア!!」

私と暴走体の間で、ディバインランサーと炸裂羽の弾幕が激突する。結果が張つてある分、派手に手加減無しにやれます。私のスペックも120%で運用可能です！

『G u a a a ー!!』

炸裂羽が無駄と見てか、暴走体は翼を羽撃かせ強烈な風を起こす。

「くっ、なんて風!きゃあああっ」

「な、なのは!!」

バリアジャケットや頬や手が裂け、全身に痛みが走り血が噴き出す。まさか――

「かまいたち!!」

「風の刃Σ!?!」

フィールド攻撃系ともなれば防御は抜かれますね。

「レイジングハート!」

『Mode change! Cannon mode! Blitz Action. and Hover Feather Stand by Ready!』

「ハアアアアー!!」

ホバーフェザーとブリッツアクションの高起動による攪乱。

「デイベインランサー!」

『Divine Lancer! Stand by Ready!』

「シュートオオツ!!」

10個のスフィアから次々にデイベインランサーが放たれる。対フ
ェイト用に考案していた戦法ですが、ここで試すのも良いでしょう!

デイベインランサーのランダム射撃により空中機動を限定し――

『Guaaaaaa—!!』

敵の回避予想地点を割り出し、そこへ――

『GuaΣ!?!』

「デイベインバスター!!」

地上からホバーフェザーの推力を全力解放!

暴走体の懷にドンピシャで突貫し、アッパーと同時に零距离でデイベインバスターを撃ち込む!

そして――

「ジュエルシード、封印!」

『Sealing!』

構えたレイジングハートのカノンモードの砲口を突きつける。

『Devine Buster!』

『Protection.』

「くっ、ああああーっ!!」

バリア事押し、そのまま木に追突する。

「がはっ!!」

「なのは!!」

『G y u a a a a a ! ! ! ! !』

暴走体が口を開け、私に迫る。

バリアも回避も間に合わない!

「くっ!」

「なのは――――!!」

バリアジャケットの防御力を信じて、腕をクロスさせて頭を守る。

ですが、予想した衝撃も、痛みも、やって来ませんでした……。

『G、G u e e e ……』

暴走体の開けた口の裂け目と後頭部に巻きつく光り……いえ、これは！

「鋼系！？」
こわ

月明かりで光る鋼系を目で辿っていけば、そこには――

「兄……様……」

「逃げるのは――！」

鋼系を腕に絡め、思いつ切り引いている兄様の姿。

「チェーンバインド！」

チェーンバインドで暴走体を雁字搦めに縛り上げる！

『G y u a a a a a ―――！！！！！！』

もう一度、砲撃を喰らわせた場所にレイジングハートを突きつける！

「リミット解除！レイジングハート！フルドライブ！！」

『All right！ limit release・Full Drive！！』

フルドライブにカノンモードのフレームに展開される一対の桜色の翼。

環状魔法陣がフレーム、トリガーユニット、柄に次々と展開する。

残った魔力と周囲に散らばった魔力を有りつ丈集める！

「デイベインバスター！！マキシマム・シュートオオオッ！！！！」

トリガーを引き、3発目の零距离デイベインバスターが解き放たれる！

「ブレイクッ！シューーートッ！！」

『GuGyaaaaa！！！！！！』

今度、こそ!!

「ジュエルシード! 封印っ!!」

『Sealing!』

デイベインバスターの奔流が終わり、残ったのはジュエルシード2
個と黒い鳥……おそらく鴉。そして兄様の鋼糸。

『Receipt number XIII・XVII。』

「っ、ぜい……はあ……はあ……はあ……がはっ!」

「なのはっ!!」

駆け寄ってくる兄様。

また、無茶をしてしまいましたね……。

「なのは! なのは! なのは!」

「……だい、じょうぶ、ですよ。少し、やす……めば……」

兄様に魔法がバレた。

もはや世界がどんなのかわからなくなってしまいましたよ。

|| || || || || || || || || || || || || || || ||

side：高町恭也

息を荒げるなのはを抱きながら、先ほどの戦いを思い帰る。
まさかな、俺の想像していたものの斜め上に行く戦いか……。

あのアッパー、タイミングと入り。

魔法を使われたら俺でも神速を使わなければ喰らうだろうな。

一撃目は敵にダメージを入れながら動きを止め、二撃目が本命のコンボか。我が妹ながら、なかなかエグい一撃を考えたものだ。

「あ、あの……」

「喋れたんだな、ユーノ」

「ッ、……は、はい……」

怯えるように俯くユーノ。

おそらくはユーノが魔法関係者で何らかの理由でなのはがそれに荷担したんだろう。

しかしユーノの様子をみれば、なのはが進んで協力しているんだろう。この子はそういう子だ。

「兄様……ユーノを、責めないで下さい」

「なのは……！」

「私が勝手に、首を突っ……込んで……いるの、ですか、ら……」

まだ呼吸が落ち着かないんだろうなのはだが、その顔はやり切った良い顔つきだった。

これは、責めたら俺が悪者だな。

「わかった。とりあえず、家に帰るぞ」

「はい……」

「ユーノも……な」

「僕は……」

なのはを背負って、俯くユーノの首根っこを掴むと、頭に乗せる。

「きよ、恭也さん……」

「話しはあとでゆっくりと聞かさ」

久しぶりに背負ったなのはの重みに、懐かしくも、最後に背負った5年前より重くなった妹に、何時の間にかこんなに遅しく育ってしまったことを少し嬉しく思った。

とりあえず美由希。お前本気でこのままだとあっという間になのはに抜かれるかもしれないぞ。

第7話 御神の剣（つるぎ）（後書き）

兄様に魔法がバレました。

とら八恭也スペックならこれくらいは大丈夫だろうか？

意見・感想、お待ちしております。

第8話 切なる言葉

side：高町なのは

私は兄様に背負われて家に戻ったあと、作業部屋にて兄様に現在海鳴市で起きていることとジュエルシードについてを説明しました。

ケガはユーノと私でフィジカルヒールをかけたので問題はありません。

「そうだったのか、だがユーノ、お前の責任感は立派だが、何故自分1人で来たんだ？事情を話せば仲間の1人や2人は着いて来てくれたんじゃないか？1人で飛び出して、ケガをして、今は結局はなのはに頼りきりの状態だ。仲間を呼べないにしても事前に色々と必要な物や事柄をすべて終えてから来るべきだったんじゃないか？」

「うっ、す、すみません……」

その辺りは大人びて見えるユーノでも9歳故の脆さと迂闊さでしよう。

焦って準備を怠り、さらに攻撃力は私にも劣っているユーノでは、たとえレイジングハートを持っていても、それは蛮勇であり無謀ともいう行動でしょう。

まあ、そうなる運命であると言われてしまえば、私もユーノもそれ

までなのですが――

「それになのはもだ。こんなに危険で一大事の事を何故1人で抱えようとしたんだ？」

「そ、それは……」

説明する為にレイジングハートに頼んで今までの戦闘ログを兄様に見せたのは失敗だったかもしれない。いずれも軽傷とはいえ無傷ではなかった戦い。

それ故に兄様の眼光はユーノに向いていたそれよりも厳しく感じます。

「まあ、大きなケガもなく済んでいたから良かったものの、今日俺が居なかったらどうなったか、それは一番なのは自身が良くわかってるだろう」

「はい……」

あの時兄様が居なかったら、きっと私は――

「魔法という時点で、確かに他人に話すには眉唾ものと取られるだろうが、俺達は家族だろ？」

「っ!」

「もう少し、俺達の事を頼ってくれたって良いんだぞ?なのは」

兄様の言葉は嬉しく心を満たし、そして残酷に私の心を抉る。

本物の高町なのではない、異物な存在である私を家族と言われる嬉しさと、高町なのはへの罪悪感が私を蝕む。

「とりあえず、なのはが話すまで俺は黙っておくから、ちゃんと話せるようになったら話すんだぞ?」

「はい…」

家族。甘美な言葉は私に温もりと痛みを与える。

高町なのではない、異物の私には享受する権利の無い言葉だ。私が高町なのはである事を証明するまでは――

「クウ……」

「大丈夫ですよ、久遠」

心配そうに私を見る久遠に顔を埋める。

まだ4日でも、久遠は私の事を好いてくれているのを感じます。

この世界がどの程度とら八に浸食されているか判りませんが、場合によっては久遠から祟りを打ち払うのを私がやらなければならないかもしれない可能性もあります。

ある意味、私は久遠とアリスに依存しています。それは魔法少女リカルなのはにおいて、久遠もアリスも存在しない存在だからです。久遠はとら八キャラではありませんが、それでもリリカルなのは色の強いこの世界で運命でなく偶然が紡いだ、『私』の絆だから。

アリスは言わずもがな、私が産み出した私だけのファミリア。

高町なのはではなく、私自身が私の力で紡いだ絆だから、必要ない壁も作らずに懷を許してしまえるのです。

兄様が出て行った作業部屋で、私はスケッチブックにペンを走らせる。

魔法と出逢って、止まっていた作業が少し進ませる事が出来ました。

何時か久遠と戦わなければならない可能性もあるかもしれない現状、ミッド式魔法だけでは、私は久遠に敗北するしかありません。

ミッド式もベルカ式も、理数系科学によって行使される事象。私基準で言えば科学式で魔法を再現しているだけの物。

純粋な妖狐である久遠相手には、防御しても久遠自身の妖力や霊力効果を防ぐ事が出来ない。

私が久遠と戦った時に電撃だけ通ったのがその証拠です。

レイジングハートの協力で、この世界にもエーテルがちゃんと存在している事が判りました。

あとはそれを使うだけの式が出来れば、魔導師殺しやAMF環境下でも普通に戦闘が可能でしょう。あとは私にどこまでプラーナが存在するのか、そこは戦闘民族一家高町家が末妹の身体スペック次第ですね。

翌日。

私は何時もより少し早起きをして、部屋の中でいつもの筋トレを始めます。

逆立ちして腕立て、腹筋、背筋、そして久遠を頭に乘せてのスクワット。

それが終わった後は軽く汗を流して、道場の方に向かいます。

道場には既に兄様が素振りをしていました。

「おはようございます。兄様」

「おはようなのは。昨日はぐっすり寝られたか？」

「はい。お陰様で」

挨拶を交わし終えたところで、私は以前から気になっていた模造武器を見てまわる事にしました。

野太刀から小太刀、手裏剣や鋼糸、さらには槍からトンファーまで、さすがにハンマー系はありませんでしたが、それ以外の武具なら大抵はある様ですね。さすが総合殺人術御神流。小太刀が主軸でも場合によっては小太刀を振るえない状況も考慮されてもいるのでしょう。

私は薙刀とトンファーを取り出して手に握ってみます。

薙刀や槍はレイジングハートを振るう面では使える技術ですね。

薙刀を戻し、一本のトンファーを左手に持つ。

将来はコレに似た武器も扱うようになるかもしれません。

高町なのはが御神流を習っていたら、魔王でなく冥王と呼ばれていただでしょうね。

その後、兄様と姉様はまた互いに打ち合い稽古。

私は父様から御神流とはなにか？についてのレクチャーを受けました。

内容は私の知る物とあまり違いはないのですが、ただ知っているのと、実際に耳に聞くのは重みが違います。将来のこともある為、私は御神流剣士になることは難しいでしょうが、勧めてくれた父様の

想いに応える為、私も本気で御神流に取り組む所存です。

レクチャーを終えた私は、まずは小太刀の握り方を学び、基本的な振るう型を教わります。

その型を御神流の初歩、御神流 斬と呼ぶ様です。

御神流のあらましは知ってはいましたが、細かな技はそこまで知らず、知っているのは神速くらいでしたから、新鮮な気分です。

土曜日である事も手伝い、今日は一日中御神流 斬の型の練習に注ぎ込みました。

[illegible]

Side: 高町恭也

今日からなのはも御神流を習い始めた。

最初は初歩の御神流 斬から。

しかし既に3回とは言えど内容の濃すぎる戦いと、何よりユーノによれば、なのはは足を止めて遠距離から砲撃を撃ち込む砲撃魔導師というカテゴリーの魔法使いだそうだが、実際のなのはの戦い方はその真逆の近接戦闘で零距离から大火力を直接撃ち込む戦闘スタイルを取っている故か、午後の稽古ではぎこちなくとも既に御神流

斬を振るっていた。

打ち合いになればまだまだ未熟だが、これで神速を覚え、さらに魔法まで使われたらどうなるのか、少し楽しみだ。

父さんも久しぶりに人に教えている所為か、生き生きしているしな。

[illegible]

S i d e : 高町なのは

「ふう……」

お風呂に入って今日1日の疲れを癒やします。

4年間、筋トレを欠かさなかったお陰でしょうか、今のところ筋肉痛とかはありません。持久力もなんとか保つようです。なにより楽しい。

強くなれること、地力の違う私は、努力をしなければ高町なのにもフエイト・テストロッサにも劣る存在。

未だに擬似的な三次元機動が限界の私では、空戦中心の無印やA・Sを生き残るのは並大抵の努力や自力の努力では越えられない壁が幾つもあります。

それを越える為の力が御神流。

大切なものを守る剣、御神流。

その志しからとは離れたところに使おうとする私には御神流を振るう資格などないのでしょうが、せめて今年だけは許して欲しい。

今年が終われば、無印やA・Sも終わる。

だから今だけは――

「なのは！一緒に入ってもいいか？」

父様の声で現実呼び戻されます。

「ええ、構いませんよ」

「それじゃあ失礼するよ」

腰にタオルを巻いて風呂場に入って来た父様の身体は、私以上にハッキリと判る傷痕だらけです。

「なのはと風呂に入るのは久しぶりだなあ」

「そうでしたね」

私の記憶では、最後に入ったのはこの私になる前の私の臃気な記憶の中で。

つまりは5年振りくらいでしょうか？

「それにしても、なのはは呑み込みが速いなあ。なのはには剣士の才能があるのかもしれないぞ？」

「剣士……ですか…？」

私が思うに剣士と言うよりも近接戦闘スタイルでしょうね、砲撃魔導師であるのに近接戦闘スタイルを主軸とする矛盾を孕むコブセント。

しかしその矛盾した戦法で、私は3度勝ちを取りにいきました。そして3度勝てた。

高町なのはでありながら高町なのはでない矛盾した異物の私が使う矛盾した戦闘スタイル。

ですが私にはこのスタイルでなければ勝つことすら出来ない劣化物。情けないことこの上ない。

「なのは、何か悩みでもあるんじゃないか？」

頭を洗ってもらいながら、父様に訊かれました。父様にはわかってしまっただけですね。

「ええ。悩み事があります。ですがこれは、私にしか……私自身が解決しなければならない事故、父様にも話せません」

「そっか。なのはも、大人になって来たんだな」

大人……ですか。

果たして、そうでしょうか……。

私が大人であれば、兄様や父様に助力や助言を申し上げるべきでしょう。

ですが、それは出来ません。

ジュエルシード事件は、私の力で解決していかなくては。

私が高町なのはになる為にも――

こんな子どものような意地を貫こうとしている私は、大人ではありませんよ。

第8話 切なる言葉（後書き）

一応ちょっとしたお説教で今回は終えて、兄様や父様からお言葉を

家族――

我が家なのはにとつてはとても大切で、本家なのは次に心の悩みです。

私も戦鬪民族一家高町家に居候してみたい……。

第9話 さすらいのバウンティ・ハンター ナノハ・タカマチΣ!?(前書き)

軽く誤字を修正。

第9話 さすらいのバウンティ・ハンター ナノハ・タカマチΣ!?

side: 高町なのは

日曜日になりました。

今日は父様は、自らオーナー兼コーチを務める翠屋JFCの試合の日故に、私の稽古はお休みです。変わりに道場の隅で御神流 斬の練習と魔力を使った新たな技法の編み出しと、身体を流れる生命エネルギー、プラーナを引き出せないかを試行錯誤していました。

エーテルが存在するならばプラーナも存在するはず。

プラーナが引き出せなければ、せつかくの魔装機神体系の魔法——造称『ラギアス式』魔法の研究が無駄になります。

ラギアスはラ・ギアスから取っているのは一目瞭然でしょう。

このラギアス式はミッド式を流用し、空間に存在するエーテルに対し、プラーナで介入し、魔術式で効果を引き出す物。

ミッド式から術式を流用している為、ミッド式やベルカ式の防御魔法で防御出来ますが、最大の違いは対AMF環境下でも運用に支障がないところでしょう。

なにせAMFは魔力結合を阻害する物であり、ミッド式やベルカ式に使われている魔力素はエーテルと別物の上にトリガーは生命エネルギーのプラーナ。AMF効果の対象外ですから。

ただ、プラーナがなければ魔装機を動かせないのと同じで、プラーナがなければラギアス式も無意味ということでしょう。プラーナを使う関係上、レイジングハートのようにデバイスがオートで魔法を使うということも出来ません。使える者と使えない者が分かれてしまうのは、ミッド式やベル力式と変わりはありません。

自主稽古を終えたあとは、姉様と汗を流してから出掛ける用意をします。

服装は黒のインナーに黒の長袖シャツ、下は黒色のスラックス、黒のオーバーコート、赤のマフラー、黒のテンガロンハット――

どこぞのエンドレス・フロンティアのさすらいのバウンティハンターみたいな格好が私の外出着です。

ちなみにテンガロンハットこそこのなのはの身体になってから被り始めましたが、それ以外は転生前も着ていた服装故に、これが私の私服と胸を張って言えます。

ちなみにバリアジャケット設定時も今のとコレでかなり悩みました。

閑話休題。

「おはようなのはちゃん！」

「おはようなのは！って、またアンタそんな服装を……」

「グッドモーニング、キューティープリンセス。良き朝ですね」

ちなみにこの身体になってテングロンハットを被ってから、ハーケン言葉を使ってみてたりします。

だってカッコイいんですもん。それにこの良き容姿だから許される厨二病キャラ作りとか、やらなくては損ですよ？

「アンタ、少しくらい女の子らしいオシャレとかしようとは思わないの？」

「私はカッコイいから良いと思うんだけどなー」

「すずか！良いの！？このままなのはが男の子になっちゃっても！」

「そ、それは………良い…かな？」

「なんで顔朱くすんのよ！！……ま、まあ、それはそれであたしも………」

「すずか、何を想像して顔を朱くしているのですか？」

「それとアリサ、怒って朱いのかすずかと同じ意味で朱いのかわかりません。」

「OK、フェイスレッドガールズ。そろそろ行かないと試合に遅れますよ？」

「わ、わかってるわよ！行くわよなのは！すずか！」

「うん。行こっかなのはちゃん。アリサちゃん」

「OK、行きましょう」

私を真ん中にして、左右にアリサとすずかが並んで歩いて行きます。

ちなみに2人とも手荷物有りですが、私は手荷物無し。しかしコートでわかりませんが、後ろ腰に小太刀の木刀が挿してあります。護身用です。

あと半分趣味で造った炸裂火薬打ち出し電動式超合金エアガン『ナイトファウル』と火薬加速式超合金エアガン『ロングトウム・スペシャル』を一丁ずつ。威力は人体に撃つと結構痛いですが、少し赤くなるくらいしかありません。まあ、眼に当てると怖いですが。

軽く銃刀法違反してますね。まあ、バレなければ良いでしょう。

河川敷にあるサッカーコートまでくれば、サッカーユニフォームを着た男の子達が軽くアップを始めていました。

5月は時々軽く寒かったりしますから、少し羨ましいですね。私は低体温で寒いので嫌いですから。厚着しても寒いんですね。

「なのは、アンタ大丈夫？」

「さ、寒いのかな？なのはちゃん？」

「ズズ……大丈夫です。ちょっと寒いですが……」

ひよう……と、河川敷特有の冷たい風が頬を撫でゆく。

「クシュッ」

「ちょ、なのは！？」

「か、カゼひいてないよね？なのはちゃん！？」

「大丈夫です。ご心配なく」

しかしクソ寒いですね、5月の河川敷。

「少し身体を温めて来ますね」

「え、ちょ、なのは？」

「な、なのはちゃん？どこ行くの？」

「直ぐそこですよ」

土手を降りて父様の隣りへ行きます。

「父様、おはようございます」

「お？来たかなのは。アリサちゃんとすずかちゃんも一緒か？」

「ええ。土手の方に」

危なっかしく土手をゆっくりと降りてくるアリサとすずかを一度振り返ってから父様に向き直ります。

「少し端で身体を温めてきます」

「ん？ああ、気をつけてな」

「わかりました」

てくてくと歩いて、コートの端側、子ども達の少ない方へ行きます。

しかもなんかちょうど良い高さの切り株も発見。ふむ、やってみま
しょうか。

まずは後ろ腰から木刀を抜き、抜きと入りと突きから御神流 斬へ
繋がります。

切り株には僅かに線が入る。

それを5回繰り返してから、木刀を戻してナイトファウルを右手に持ちます。私は左利きですが、転生前は右利き故、実質両利きです。

「OK、シヨウタイムです」

切り株に向き、帽子を押さえて宣言します。

「リッパ―！ハチの巣です。OK、ラストです！グッドナイツツ！
」

リッパ―の斬撃に射撃を織り交ぜて、最後にステーキを撃ち込むデキサス・ホールデム。

まあ、弾はBB弾ですし電動マシンガンですからそこまで威力は無く、弾は弾かれます。しかしリッパ―とステーキは頑丈、ステーキは炸裂火薬で実際に撃ち出している為、切り株には斬痕と穴が残ります。

暇にかまかけて習得したハーケン・ブローニングの技の数々。まあ、忘年会新年会隠し芸大会ネタに覚えてみたものですが、完成度は私が納得するまで練習した所為か、完璧です。

「ハイロー・ドロー！私の曲撃ちと早撃ち、たっぷりご覧あれ」

ナイトファウルを真上に投げ、ロングトウムで撃ちつつ落ちてきたリッパーが回転しながら切り株に斬痕を残す。

ロングトウムの弾を変えながらナイトファウルを回収。

「フル・ハウス！撃ちます！斬ります！ここが勝負どころです！私の捌きもなかなかでしょう？」

ナイトファウルを片手で器用に回転させ、リッパー攻撃とマシンガン攻撃の乱舞をお見舞いする。

「7連ステークです！せい！や！7発目！！」

ナイトファウルのステークを1発上向きに撃ち、そこから身体を回転させて2発連続で上向きに撃ち、水平に1発、切り株に背を向けて脇の下からナイトファウルを出して1発撃ち、身体を向き直らせてラストの一撃。

「これでショウダウンです。私に惚れないで下さいね？」

決めセリフを言いながら帽子の鍰を拳銃に見立てた左手の人差し指を下から押すように添える。

フツ、完璧に決まりましたね。

気分も体温も良い具合に高揚しています。

ちなみにファイヤー・マウスとベスト・フラッシュ 2nd、ファントム・ホルデム以外は出来ます。しかしこの服装時限定で、ハーケンになりきらないと出来ないんですけど。なりきりダンジョン？

——パシンツ——！！

「痛いですよ、アリサ」

何故かハリセンを持って顔を朱くしているアリサ。

「あ、アンタ！それ本物じゃないでしょうね！？てか、私に惚れないでってなんなのよ！？なにがしたいのよ！？曲芸師にでもなりたいの！？てゆーかおもいつきし目立ってるわよ——！！」

「なのはちゃん、カッコイイ……」

ツッコミ乙ですアリサ、アナタなら八神はやてと全国行けますよ。

そしてさすが、練習すればあなたにも出来ますよ？

「ほんと！？教えてなのはちゃん！」

「やめい!!」

すずかは雰囲気的に、てか名前に錫華姫でも――

「OK、エブリワン。とりあえず静観静聴に感謝します」

帽子に手を乗せながら会釈。

ハーケンはカッコ良くキザにキメるんですよ。

まあ、試合前の余興としては重畳でしょう。

「（凄いななのは、あんな曲芸染みた技、どこで覚えて来たんだ？）

」

「（なのも別ベクトルで軽く非常識だと僕は思っただけだなあ……）
」

なのはの曲芸撃ちにそんな感想を抱く父とフレット少年だった。

「……………」

試合は終わって昼食は祝杯も兼ねて喫茶翠屋で。

私もアリサとすずかと一緒に、翠屋の屋外テーブルで茶会を楽しんでいました。

「試合凄かったね。すずか」

「うん。私、胸がときどきしちゃったよ」

未だに興奮冴えやまない2人を見つつ、私はナイトファウルとロングトウム・スペシャルの手入れをしつつ、コーヒーを口に含みます。味は砂糖ゼロで牛乳4割の高町なのはスペシャル。一杯100円也

「でもなのはちゃんの曲芸もカッコ良かったよ!」

「アンタあんなのどこで覚えてくんのよ……?」

「禁則事項です」

人差し指を唇にあてがいながらウィンクで返答します。さすらいのバウンティハンターは多くを語らないのですよ。

「アリサちゃん、すずかちゃん。今日は応援に来てくれてありがとう。楽しんでくれたかな？」

店から父様が出て来ました。サッカーチームは解散したようですね。

今は喫茶翠屋の店長の時間の為、父様はエプロン姿です。

さっきまでは翠屋JFCのコーチだった為にジャージ姿。家に帰れば兄様や姉様の鍛錬の為胴着。何も用事が無いときは私服と。

家で一番衣服がコロコロ変わる人物でしょう、父様は。

そして意外にも変わらないのは母様でしょうか？専業主婦だからでしょうか……。

「今日はお誘いしてくれて、とても楽しかったです」

「試合、とってもカッコ良かったです。なのはちゃんも」

「パパもびつくりだよ。いつの間につてね」

「子どもは陰日向で日々成長するものですよ、父様」

「はは、違いない」

父様の笑い声を聞きながら、残ったコーヒーを飲み干します。

何故かやはりこの格好になると味覚が大人に戻るんですよね。

憑かれている？呪いの品ですか？

たかまちなのははのろわれた。

なんてテロップとか出ませんよね？

「それでは私達は今日はこの辺でお暇します」

「おや、お出掛けかい？」

「はい。お姉ちゃんとお出掛けに」

「私はお父さんとショッピングです」

「そうだったのですか、近くまで送りましょうか？」

「ううん。迎えに来て貰うから」

「あたしもよ」

「そうですね、明日お話を聞かせて下さいね」

「うん！」

「いいわよ」

そして私達も解散しました。

「なのはは、これからどうするんだ？」

「そうですね。せつかくの日曜日ですし、久しぶりにウィンドウショッピングに行ってきます」

行き先は家電量販店やジャンク用品店が中心ですが。

「そっか、気をつけて行つてらっしゃい」

「はい。では行ってきます」

ユーノを肩に乗せて私も街へ向かいます。

「ユーノ、一度家に行つて久遠を連れて来て下さい」

《え？別にいいけど、久遠を迎えに行つてからでも》

「意外と重いんですよ、この格好」

《あー、うん。わかったよ》

肩から離れるユーノを見えなくなるまで見送ります。

「さて、家電、パーツ、材料が私を待っています」

私は胸を踊らせつつ、しかしクールに歩を進ませ始めました。

しかし、後の私はこの時の選択を、一生涯並みに後悔するのですた

第9話 さすらいのバウンティ・ハンター ナノハ・タカマチΣ!?(後書き)

ほとんど暴走ネタです。

嵐の前のオチャラケとも言いますが――

整った容姿だからこそ許されることもありますよね？

ハーケンと零児のやりとりが好きです。

第10話 哀哭するは星光の心・It screams to pathos

またまた誤字修正になります。期待させてごめんなさい。

第10話 哀哭するは星光の心 - It screams to pathos

side: 高町なのは

「こうして出掛けるのは、久しぶりのような感じがしますね」

『Well. Because this one week was these very deep days. (そうですね。この一週間は、とても濃い毎日でしたからね)』

受け答えたのはアリス。

今私達はあの海岸へ来ていました。

私の泣き場にして、私が私を始め、私が高町なのはを目指し始めた場所。

「たった3度ですが、私はあの時から強くなっていると思います」

でなければ鴉の暴走体にも苦戦していたことでしょう。

上手く立ち回れるようにはなった。

でも高町なのはには程遠い。

近接高機動戦闘型砲撃魔導師――

私が使う異端で矛盾の戦闘スタイル。

御神流――

守る為の剣。

高町なのは――

私であり、私でない。

不屈の心と正義感に溢れる心優しき魔法少女。

『高町なのは』――

高町なのはではなく、高町なのはである私。

沢山の友人を得て、家族に囲まれて、将来は魔法使いの男の子と敵対しながらも恋をする乙女に――

将来は友人に囲まれながら様々な期待と希望を背に、娘を育てる良き母親に――

そんな未来を奪い、居場所を奪い、身体を奪い――

高町なのはに成り代わる存在の私。

私が『理』を真似るのは、本当の本当は、高町なのはへの罪悪感を少しでも誤魔化して減らす為――

私は星屑。

私は居てはいけない存在。

この世界で生きている権利すらないはずの存在。

この世界にとっては異物の存在。

そんな世界に逆らって、もがき足掻いて、方法すらわからないのに
自分が高町なのはである事を証明するのだと言って、世界と意地を
天秤に掛ける最低のうつけ者。

こんな私、何度も消えてしまえと思った事は数知らず。

本物の高町なのはが私を消し去ってくれらるだろうと思い続け星霜を
経る。

でも――

「（消えたくない。消えたいのに……消えたくない！）」

5年だ。

たった5年。

私にとっては人生の1／6の時間。

たったそれだけの時間で、世界は残酷にもしかし温かく私を縛り付ける。

父様、母様、兄様、姉様、アリス、レイジングハート、アリサ、すずか、久遠、そしてユーノ。

私の運命と偶然が紡いだ絆。

運命は必然――

偶然も必然――

宿命も必然――

世の中は必然で出来ているらしい。

なら、私の存在は何だ？

必然？

そんなバカなはずがない。

次元断層に巻き込まれて死んだのを、閣下の温情でこの世界に生まれ変わったにすぎない。

異物に必然など――あろうはずもない！

「世界は、私は、こんなはずでは、無かったのでしょうね……」

『Meister・(マイスター)』

唯一なのは歪んだ内面を知るアリスは、自分の無力感を嘆いた。

スケッチブックに宿る不完全なデバイス、なのはの使い魔。

自分の存在がマイスターたるなのはに負担を掛けている。

消えてしまいたいと、この一週間何度も思った。だがマイスターの心の弱さを正しく理解しているアリスには、消えることすら出来ない。

なのははアリスに依存している。

それはアリスがファミリアだから、もう1人の自分であり、自分を支えてくれる存在だからだ。

今アリスが消えれば、なのはの心は壊れて砕け散るだろう。

世界の運命と、なのはの存在意義の掛かっているこの戦いには、負けは許されない。落ち込んでいても、折れることは許されない。

そんな現状が、なのはとアリスを追い詰めていた――

「っΣ!?!」

『Meister! (マイスター!)』

『JewelSeed is Awakening!（ジュエルシードの発動を確認!）』

魔力波を感じた方向——街中から強力な魔力を感じ、巨大な巨木が生えていった。

ガスッ!!

「なんたる失態ですか!!」

コンクリートに拳を叩きつけ、私は巨木を見ながら思い出した。

今日この日、ジュエルシード最大級の被害が起こってしまうことを……。

「レイジングハート!」

『Stand by Ready!』

我、使命を受けし者成り——

契約のもと、その力を解き放て——

風は空に 星は天に そして不屈の心はこの胸に——

この手に魔導を——

「レイジングハート、セットアップ!!」

『Stand by Ready・Setup!』

変形したレイジングハートを握り締め、バリアジャケットが形成される。

『Hover Feather! Blitz Action!』

「くっ!」

初速無しで一気に瞬間最大速度で、私は街に向かって駆け抜ける!

木の根を撃ち落としながらとにかく中心へ向かうのですが――

『Next! intercept coming at 3 o'clock, 11 o'clock, 6 o'clock!』

(次! 3時方向、11時方向、6時方向、迎撃が来ます!)

「全力で撃ち落としますよ! デイバインランサー!!」

『Devine Lancer! Standby!』

「ファイア!!」

8つのスフィアからディバインランサーを撃つ。

ディバインランサーは直射魔法故に、自分がトロンベよろしく回転しながら木の根を撃ち落とし、先へ。

木の根の外輪部に着いてからまるで私の侵入を拒むように、木の根やつるのムチ、はっぱカッターやリーフブレードなどが襲いかかってきます。

幸いにも葉っぱやつるは強度がそのままのようで、ナイトファウルのリッパで斬り裂き、木の根はディバインランサーやシュートバレットで撃ち落としている為、そこまでの消耗が無いのが助かります。

まさかネタレプリカ武器と忘年会新年会隠し芸大会用に身につけた技がこうして実戦で使う日が来ようなんて思いもしませんでしたよ。

左手にレイジングハート、右手にナイトファウルを握って、私は街中をひた駆けます。

途中で巻き込まれて逃げ遅れたり、退路を塞がれた人の救助なりもしているので、進行スピードは遅いですが、気づいて然るべき私が気づけず、被害を広げてしまった私が出る償いは、これしかありません。

ちなみに顔はテングロンハットを眼深に被って、出来るだけ顔は晒さないように努めています。

しかし妙です。

ジュエルシードの暴走体は、私には襲いかかりはしますが、一般人は発動に巻き込んだくらいで、あとは攻撃を受けている様子はありません。

魔法が使えるか否かの違いからくるのか、それとも明確な敵意に反応しているのか判断に迷いますが、今は限りなく迅速な対応が急務です。

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

side：アリサ・バニングス

あたしは今、親友のすずかとジャングルの中に居た。

別に誘拐されたりとか、どこでもドアとか、テレポートとかを使つたわけじゃない。常識だけど、あつという間に街がジャングルになつてしまっただけだ。

「ア、アリサちゃん……」

もともと優しくて、言い換えると自己主張の激しくないすずかは、あたしの背中にくつついて震えてる。

あたしも脚が笑ってる。

でもあたしが少しでも不安をみせたらすすかは泣き出しちゃうかもしれない。

あたしだって怖いけど、そんなのイヤ。

すすかを泣かせる位なら、あたしが少し我慢すれば良いだけ。

「大丈夫よすすか、きっと助けが来るから」

「で、でも……」

怖がっているすすかの手を握る。

少し痛い位に握り返されたけれど、顔には出さない。

それでもバニングスの跡取り娘なのよ！

ふ、普段は恥ずかしかったりして出来ないけど、今この非常識な状況だから出来る。

ポーカーフェイス――

――「私に惚れないで下さいね？」

な、なんでこんな時になのはが出てくんのよ!?

し、しし、しかもなんか、なんで胸がドキドキするのよ!?

だあんもう!!--今そんな場合じゃないってのに!!--

「ア、アリサ…ちゃん?」

「な、何でも無いわよ……」

なのは……あんたは無事でしょっね?

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

side…高町なのは

「シュート!!--」

シュートバレットを拳の前に展開して、進行を妨げる太い根を打ち砕く。

「まだ見つかりませんか……」

エリアサーチをかけながら探してはいますが、私はそこまでマルチタクスにリソースが割けないというか、あっちこっちで頭を働かすという考え方が未だに馴染まず、エリアサーチはレイジングハート任せ、レイジングハートがエリアサーチにリソースをかけている分、今は私が単体で放てるシールドバレットとナイトファウルでの戦闘を行っています。

『Master・(マスター)』

「見つけましたか!？」

『Please see this, although Jewel Seed is not found yet・(ジュエルシードはまだ見つかりませんが、これを見て下さい)』

戦闘の邪魔にならないように表示されたモニターには、半ばジャングルと化した街を歩くアリサとすずか。

血が出る程に唇を噛み締め、レイジングハートとナイトファウルが震える程、手が白くなる程握り締める。

やっぱり私には高町なのではあるところか、2人の友達という立場すら許されるべきでは無かった……!

私に関わってしまったばかりに、こんなことに巻き込んでしまっ

た！

『Master! Jewel seed was discovered! They are those with a reaction immediately to the method of side of a friend! (マスター！ジュエルシードを発見しました！友人方のすぐ傍に反応有り！)』

「ホバーフェザー推力全開！！ブリッツアクション！！」

一気に高機動に移行した所為か、再び暴走体の迎撃が再開。その勢いは真っ直ぐ本体に向かっていている所為か、先ほどとは比べ物にならない。

「邪魔を——」

つるのムチ、はっぱカッター、リーフブレードを斬り裂きハチの巣にステークで撃ち抜き、遠方はディバインランサーで迎撃。

「するなあああ——！！！！！！」

何時もの自分すら忘れて、以前の自分が表に出て来る程、私は周りも見ずに一直線に突き抜けて行く！

アリサもすずかも、高町なのはの運命によって出逢うのは必然だったかもしれない。でも――

「私が紡いだ3年間は、運命だ必然だなんて言わせない!!」

正面から迫る鋭いつるのムチをグレイズで回避しながらリッパで斬り裂く!

「アリサもすずかも――」

四方からくるはっぱカッターをナイトファウルで八チの巣に撃ち墜とす!

「傷つけさせはしないっ!!」

視界の先に捉えたアリサとすずか。

本体に近寄り過ぎた所為か、2人を追い払うようにはっぱカッターが集まり魔力を宿し、リーフブレードに変わる。

「どんな魔法だろうと!!ただ――」

レイジングハートを握る拳の先に環状魔法陣が展開。ブリッツアクションを連続で使い、2人の前に立ちふさがってリーフブレードに拳を打ちつける！

「撃ち貫くのみ！！ディバインツ、バスターー！！！！！」

私の十八番、零距离ディバインバスターはリーフブレードを撃ち碎き、そのまま生い茂るジャングルに風穴を開けて消えた。

「な、なのは……は……」

「なのは……ちゃん……？」

兄様に続けてこんな早期に友人にも正体がバレる魔法少女も稀でしょうね。

ディバインバスターを撃った所為か、私に向けて木の根、つるのムチ、はっぱカッター、リーフブレード、さらには私の放ったのをコピーされたのか、シュートバレットまでが殺到する。

防御も回避も無理と即座に判断した私は、アリサとすずかを守るように抱きすくめ、2人の衣服に干渉、イメージし易い私立聖祥大附属小学校の制服姿のバリアジャケットに再構成、有りつ丈の魔力を防御にまわす。

バリアと暴走体の攻撃が殺到してぶつかって弾ける音に炸裂音。

永遠にも、刹那にも感じる一時――

『M e i : s : t e r : : : (マ イ : ス : ター : : :) 』

背中に感じる熱と途切れ途切れの弱々しい、レイジングハートとは違う電子音。

背中を振り返れば、突き刺さっている木の根が見えるだけで3本。内どれか1本が貫通していて、お腹が痛くなつてそれから熱くなつて――

でも私のことなんてどうだって良い……。

『 I s : : i : : t s a f e : : ? (じ、無事 : : で : : すか : : ?) 』

私の背中にはいつも――

「ア……リ……ス……? こぶっ」

口に広がる鉄臭い味。

それすらどうでも良い……。

『I...t...wa...s...go...od...My...da...rl...in...g
...me...is...ter...（良...か...っ...た...で...す。愛...し...い...私
の...マイ...ス...ター...）』

「ア...リ...ス...？ア...リ...ス...？」

『.....』

「...ふ...ぜ...け...ッ...ご...ぶ...つ...、...て...な...い...で、返...事...し...て...
下...さ...い...よ...」

私の中で何かがキレ、何かが砕け散る音がした。

シュートバレットで私に刺さる木の根を寸断する。

背中やお腹の痛みも熱さも感じない。ただ感じるのは――

言い表すことの出来ない程の喪失感。そして怒りと憎悪――

レイジングハートがカタカタと揺れる。

手に爪が食い込んで血を流す。

それは心を支配する感情によって涙を流す余裕のない私から溢れ出した涙だった。

魔力がすっからかんで笑う膝に喝を入れて大地を踏みしめる。

「なの……は……それ……」

「な……のは、ちゃ、せ、せな、か……」

友人の声すら遠く感じるのは血の流しすぎか、それとも心の余裕の無さか、いや、そんなのもうどっちでも良い。

背中に刺さる木の根を煩ったしく思いながら背中からバックを下ろす。

血濡れの私立聖祥大附属小学校のバック。

その中には穴の空いてしまったスケッチブック。

それを込められるだけの魔力を込めて抱き締める。

半分がデバイスならリカバリーも効くかもしれない。

心の底から想いを込めて祈った。

スケッチブックが淡い桜色に光って、損失を回復させる。

スケッチブックをバックの上に重ね、それをアリサとすずかの前に置く。

私は”3人”を背にして、ジュエルシードの暴走体の本体を見据え

る。

「レイジングハート……カノンモードへ」

『Mode change・Canon mode』

これほどまでに何かを憎んだ事があるだろうか――

これほどまでに何かを消してしまいたいと思ったことがあるだろうか――

展開されるホバーフェザー、残った魔力は少ない。デイバインバスターもあと1発。これじゃあ届かない。

「レイジングハート……フルドライブ」

『I am sorry・It is a master which is not made・Then, the body of a master does not maintain a life function!（すみません。それは出来ませんマスター。それではマスターの身体が保ちません。生命機能の危機さえあります!）』

「構いません。私は――それで構いません」

『I care about! Master. Reexamination of a command! (私が構います! マスター。命令の再検討を!)』

「早くして下さい。私が理性と意識を保っている内に……」

『Yes... Master……』

貴女には、無理を聞いて貰ってはかりですね。

こんな我が儘で行き当たりばったりのマスターで、貴女も呆れていることでしょう。

カノンモードのフレームから一对の桜色の翼が生える。

「堪忍袋の尾が切れました……」

レイジングハートを構え、カノンモードの砲口を暴走体の本体。男の子と女の子の、2人を守るようにバリアを張って滞空するジュエルシードへ向ける。

「フルブースト!! ブリッツアクション!!」

『All right. Full boost. Blitz Action.』

「っ、なのは!!」

「なのはちゃん!!」

「はあああああ————!!!!!!」

一気にトップスピードに加速。空気の壁すら突き抜けるような速度で、ジュエルシードのバリアに砲口を突き刺す!!

「レイジングハート!!もつと推力を!!」

『It is useless!! More than this useless!! Absolutely useless!! (ダメです!!これ以上はダメ!!絶対にダメ!!)』

初めて聞いたレイジングハートの感情的な声。

電子音でも伝わる気持ち。

でも私は——

「オーバーブースト!!」

自分で術式を組み、無理やりに推力を上げる!

飛び散る魔力を集めて更に推力に転化する。

血が溢れゆく、眼が霞む、手から力が抜ける。でも！！

「もっと強く！！もっと速く！！もっと熱く！！」

カノンモードの砲口へ魔力を集中的に込め、魔力刃を形成する。魔力刃とバリアは火花とスパークを散らして凌ぎあう！

単純な出力勝負。出力が負けている私にはバリアを破る力が――

「ッ、デイベインッ、バスタアアアッ！！！！」

零距离デイベインバスター。いつも、何度も、私に立ちふさがる脅威を撃ち抜いてきた一撃必殺の一撃。

「ブレイクッ、シューーッ！！！！」

この一撃の前に、撃ち抜けないものはない！！

閃光と爆碎音に視界と耳を奪われる。でも手応えが消えない！！

「あああああ————っ！！！！！」

雀の涙程度でも更に魔力を込める。撃ち貫く意志を！想いを！すべて！！

「撃ち貫けえええええ————っ！！！！！！！」

更に強烈な閃光と爆碎音、それに生じた爆風を受け、ホバーフェザ―が四散した事によって前進するどころかその場に留まる浮力すら失ってしまった所為で爆風には耐えられず、私は後方へと吹き飛ばされてしまった。

地面に叩きつけられ、錐揉みしながら地面を転がって、建物の外壁にぶつかって、ようやく止まることが出来た。

「うつ、つく、あぐ」

私の死力を尽くした一撃——

でも、その一撃すら——

届かなかった——

「なのは——！！！」

「クウーーーー!!」

ユーノ、久遠……。

「なのは!!しっかりして!なのは!!」

「クーー!!クーー!!」

「こふつ、大丈夫……です……」

レイジングハートは手放さなかった。

まだ私は戦える!

でも――

手元に握るレイジングハートを見る。

カノンモードのフレームどころか、本体フレームにも亀裂が入っている。

レイジングハートの本体には傷がないのが不幸中の幸いですね。

「レイ……ジン……グ、ハート……」

私の声に応えるように、コアが点滅するレイジングハート。

私は死にかけの虫の息。

レイジングハートもボロボロ。

死力を出し尽くしても破れないバリア。

それでも！！

「まだ……たたか、ゲホツゲホツ、ごぼつ、っは！くつ、まだ！！
私達は戦えます！そうでしょう！？レイジングハート！！」

『That's right！（その通りです！）』

もう魔力は空っぽで、身体を支えているのは怒りと憎悪と、燃え滾り衰えることのない闘志。負けたくないという強き想い！！

「あれ…を、貫く…には……」

零距离ディバインバスターで無理なら、次は――

「レイジングハート、周囲に散った魔力素、すべて集めて下さい！
！一撃で良い、最後の！一撃を叩き込む、撃ち貫く力を私に！！」

『All right・My master!』

魔力素を集めることで、再びホバーフェザーを展開。

胸がかつて無い程に苦しくなる。でもそんなの関係はない。もう一度、もう一撃加えて、そして帰ろう――

「帰る……か……」

私にとって、高町家は、その権利がなくても、もう帰る場所に認定してしまっているらしい。

亀裂の入った砲口に魔力が集まっていく。

高町なのはの切り札――スターライトブレイカー。

模造、贋作と言えども、最強の使徒すら下した零距离スターライトブレイカーでならば、あのバリアだって破れるはず！

脈打つ鼓動、魔力素を集める過程で、はっぱカッターやリーフブレードをコントロールし構成する術式の魔力すら強引に集めて力にする。

相手との距離とスターライトブレイカーのチャージ時故に出来る今

回限りの荒技です。

「チェーンバインド!!」

ユーノがバインドで私に迫る木の根とつるのムチを絡め捕る。

ユーノにも世話になりっぱなしですね。

今夜は少し豪華な物にしましょうか――

私が、生きていたらの話ですが――

第10話 哀哭するは星光の心・It screams to pathos

実際あんな巨木を相手にあんな呆気なく終わるのはリリカルだから許されるものだと思っと思っています。

巨木でこれならマジでフェイトと戦ったら我が家なのは死ぬんと違つか？

意見・感想お待ちしております。

第11話 撃ち負け!! 星光の槍杭 - そっくり - ! (前書き)

最新修正版です。英語力が欲しい……

第11話 撃ち貫け！！星光の槍杭・そうくいー！

side：高町なのは

血の流しすぎで眼がチカチカしてきました。

身体はガタガタ、脚も立っているのでやっとの程。

そしてやはり今回の暴走体は、明確な敵意とある程度の脅威に対して自動迎撃するタイプのようです。

「うつ！くうつ」

「耐えて下さいユーノ！あと少しです！！」

「わ、わかったー！！」

スターライトブレイカーのチャージで無防備の私を、ユーノが全力で守ってくれています。

暴走体は木の根でユーノのバリアを破ろうとしますが、ディフェンスとサポートに特化するユーノのバリアは私の物より数段硬く、暴走体の攻撃をすべて防いでいます。

「Master・I have a proposal・（マス

ター。私に提案があります」

「提案？」

『Yes. Therefore, please give me time to a slight degree.（はい。その為にもう少し私に時間を下さい）』

「ユーノ！」

「聞こえてたよ！レイジングハート！どれだけ保たせれば良いの！？」

『If it gets for 60 seconds...（60秒頂ければ...）』

レイジングハートの言葉に私はユーノを見る。

ユーノは頷いた。

「お願いします。レイジングハート」

『Thank you.（ありがとうございます）』

魔力素のチャージは続行されましたが、ホバーフェザーは私の脚に負担がかからない程度の高さの浮力を保って小さくなる。脚のホバ

ーフェザーに関しては完全消失しました。

レイジングハートも頑張っているのです。私も――

「ホバーフェザー解除。シュートバレット!」

向かってくる暴走体のシュートバレットをシュートバレットで相殺する。

「なのは無茶しないで!ここは僕が――」

「ユーノとレイジングハートが頑張っているんです。私にも意地があります!」

そこまで一度に数は撃てませんが、基本魔法であるシュートバレットなら、私の演算能力でも負担がほばないレイジングハートと同レベルのシュートバレットを撃つことくらいは出来ます!

「「っ
Σ!?!」」

急な魔力の高まりを感じて、その方向――ジュエルシードの暴走体を見る。

単なる木であつた暴走体。

しかし表面がボコボコと気泡のように波立つと、そのカタチを少しずつ変えて行った。

全身に角を生やし、上部に青紫の鎧を纏い、頭部は赤く、緑色の双眼が光る。その首元にはジュエルシードを取り込んで青くなった結晶体。

ムチの様な蔦が不気味に生え動く腕。巨大な爪で武装し、掌には赤い結晶体がある腕。の2本の腕を生やすその姿はまるで人間の上半身。

「変身した！？ここに来て！？」

「くっ、魔法と言うより外道に過ぎますよ！ジュエルシード！！」

大木だったジュエルシードの暴走体は、その姿をアインストレジセイアへと変えたのだった。

アインストレジセイアへとカタチを変えた暴走体は、その胸部から砲撃クラスのエネルギー波を放ってきた。

「くっ！！や、やらせるもんかあああつ！！」

「エアヴァルトウング……懐かしい技を……」

ユーノのバリアを後ろから補助しながら私は呟く。

こっちに来てCOMPACTやIMPACTはやってませんからね。

しかし私はインストを全くイメージしてないところを考えると、あの少年がどっちかをやっているのか偶然か――

とにかくインストレジセイアであることを喜びましょうか。『シユテルン』だったら今ので私達は終わっていましたよ。

『I kept you waiting・Master・(お待ちせしました。マスター)』

「お疲れ様でしたユーノ。あとは私達で受け持ちます。貴方は私の友人を護って下さい」

「う、うん。気をつけてね、なのは」

最早ボロボロで何に気をつけるかわかりませんが、私は頷いて暴走体を見据えます。

ある意味あの巨木よりかは知り尽くしている相手故に、今も何通りかの対策は考えついています――

「レイジングハート、お願いします」

『All right! Energy absorption・

Recovery start・(オーライ！魔力吸収。リカバリー開始)』

レイジングハートは集めた魔力を吸収し、機体の損傷を修復させた。その過程の恩恵が否か、私の背中やお腹を貫いていた木の根は分解され、ケガも治っていきます。

『Recovery complete・Condition green!』

復活するレイジングハート。

私のケガも治るばかりか、バリアジャケットは修復され、空っぽだった魔力は一気に回復し、収めきれない、120%以上の魔力が外に溢れ出る程、私の身体は魔力に溢れかえる。

『Renewal of mode data・Mode change! Lancer mode! (モードデータ更新。モードチェンジ！ランサーモード!)』

「ランサーモード？」

聞き覚えのないモードにオウム返しに呟いた私。

桜色に包まれたレイジングハートはその姿を変える。

カノンモードの倍はある縦幅。

デザインはカノンモードのフレームのままだが、先端部が延長して砲口が閉じる。

それは正に、どこかで見たような至近感を感じる大型の突撃槍・ランス-だった。

その全体の長さは私の身体の1.5倍くらいでしょうか？

石突にはカノンモード時のメインフレームのミニチュアが後ろ向きに備わっています。しかもそのミニチュアメインフレームの廃熱機構は後ろ向きであり、そこからは魔力素が溢れ出している。

私はランサーモードのスペックデータを確認して、口元に弧を描きます。

「レイジングハート、貴女は最高のデバイスですよ」

『It seemed that I had you pleased・My master・(気に入ってもらえた様で良かったです。マイマスター)』

「レイジングハート……」

私は感謝の意を込めてレイジングハートを抱き締めたいですが、その前にやらなければならない事があります。

「征きましよう、レイジングハート。打と意地をもって、あのバリ
アを撃ち抜く為に！」

『Yes. It is only our merely shooting and piercing!（はい。私達はただ撃ち貫くのみです!）』

レイジングハートの石突のミニチュアメインフレームの廃熱機構が
スライドし、魔力素を放出する。

それは廃熱機構ではなく推進機構。エーテルスラスターや機動兵器
のバーニアを参考に造られた魔力素を推進剤にするバーニア。

レイジングハートを正しく槍を持つ様に、左手は柄の前方、柄と一
体内蔵されたトリガーユニットを握り締め、人差し指はトリガーに
掛ける。右手は後ろに添えて握る。

石突から放たれる魔力素が強くなる。

フレームの側面からも内蔵式魔力素スラスターが現れ、強烈な勢い
で魔力素を噴出する。ホバーフェザーを展開して、準備は整った。

「レイジングハート！」

『All right! Stern Acceleration.
Full boost! Devine breaker!』

地を蹴った瞬間。かつて無いスピードで私達は加速した！

ランサー・突撃槍・モード――

文字通り突撃することだけを追い求めた形態。

あらゆる移動魔法をぶつちぎる速さを実現するのは、フレーム内蔵式と石突のバーニアユニットと、ミニチュアメインフレーム。スラストユニットは言わずもがなだが、ミニチュアメインフレームから指向性の魔力素を収束放出することにより大出力推進力を得る。その為の魔法が、レイジングハートが新たに組んだ魔法『シュテルンアクセラレーション』である。

発動速度もトップクラスであるが、なによりその燃費の良さだ。魔力ランクCでも普通に攻撃魔法を使用しながらも戦闘に支障がない程の燃費である。

しかしあまりの大出力推進力と直進突撃しか考慮されておらず、使い手を選ぶ魔法。

ですが私達には、名前も含めてこれ以上ない魔法です！

星の加速。その名の如く、私達は宇宙を駆ける星となる！

暴走体は腕を動かして鳶を伸ばしてくる。

エレガントアルム――

ドイツ語で『優雅な腕』と言う意味合いを持つ右腕の触手を伸ばして攻撃するものです。

しかし既にトップスピードに乗っている私達には掠りもしない。

「今度こそ！！」

突撃物理魔法、ディバインブレイカーを発動したレイジングハートの矛先が、暴走体のバリアに突き刺さる。

カノンモード以上に私は手応えを感じていた。押し当てるのではなく突き刺す感覚を――

Barrel open! (砲身展開!)

バリアに突き刺さったまま、レイジングハートのランサーモードのフレイムが上下に開き、カノンモードのように矛先からコアまでの道、バレルが出来上がる。

「貫徹ええええ——！！！！！！」

トリガーを引く。

ガシヤンツと音を立てながら、コアから直接光がバリアに突き刺さ

る！

魔力で構成した杭を撃ち込む魔法『ブラステイングステーキ』。

ナイトファウルのブラステイング・ステーキから取られたこの魔法は物理貫通打突魔法であり、最大力点に破壊力のすべてを込めることで一点突破を可能とする一撃貫砕の魔法である。

「くっ！硬い！！」

『If useless at one shot, any number of shots are!!』（一発でダメなら何発でも!!）』

もう一度トリガーを引こうとしたところで、暴走体が左腕を振り上げた。

「拙い！」

ウアタイルスクラフト――

レジセイアの最強技だ。

あんな物を放たれたら私どころかみんなまで！

もう頭上にエネルギーボールが現れる。

一撃を叩き込む時間すらあるかどうか、しかし私がやらなければみんなが――

なら答えは1つ！

「リミットリリース！！プラスター1！！」

刹那膨れ上がる魔力。

しかし引き換えに身体中を走る激痛と目尻から流れ零れる血涙と口から溢れ出す血。

「ブラステイングステーク！！」

バゴンッ！！と先程とは比べ物にならない程の衝撃と威力に、ついに暴走体のバリアを撃ち貫いた。

しかしプラスターシステムの起動は無改修のレイジングハートには相当の負荷をかけてしまい、新品のフレームに早々亀裂を入れてしまう。

「レイジングハートッ！？」

『I am not cared about！ I would

also like to shoot a friend's
enmity. Therefore, it is a mas-
ter Nanhah! (私に構わず!私も友人の仇を討ちたい
のです!だからマスターなのは!!)」

「ブラスター2!!セブン・スタッド!!」

さらに走る激痛を気合いでねじ伏せ、突き上げられた腕に7連続で
ブラスティングステークを撃ち込む。

5発のステークで撃ち貫かれ風穴だらけになった腕はボロボロにな
り、結晶体も5発目で破壊され、エネルギーボールは四散、6発目
と7発目で左腕の付け根を吹き飛ばす。

「OK、アインストキング、ショウダウンです」

『Sealing!』

首元の結晶体にレイジングハートを突き刺し、トリガーを引く。

ジュエルシードを封印したことで暴走体は崩壊した。

ジュエルシードを発動させてしまった2人も、アリサとすすかも無
事――

ボンッ

「……お疲れ様……です。レイジング……ハート……」

『It is tired with labor. Master Naha I am sorry, i rest for a while……（お……疲れ……様です。マスター……なのは。すみません……少し……休……みます……）』

「……ご、ゆつくり、私の……戦……ゆう……こぶ……ふ、ふふ、こ……の……未……熟……すぎる……小さな身体……では……リミット……ブレイク……は、無謀……でした……か……うつ……ごっ……ふ……」

口から止まらず溢れる血。

ブラスターシステムの効力が切れ、過度の魔力と肉体行使により膝から崩れ落ち、そのまま目の前が真っ暗になりました。

高町なのは

魔力ランクA+ 空戦適性C 陸戦適性B 総合ランク推定B+
使用可能魔法

シュートバレット

デイベインランサー

デイベインランサー・ファランクスシフト

クロスファイアシュート

クロスファイア・バーストモード

ファントムブレイザー

デイベインバスター（2発限定。3発目は不発の可能性大）

スターライトブレイカー（フルドライブ時条件付きで使用可）

ディバインブレイカー
ブラステイングステーク
プロテクション
バリアバースト
リングバインド
チェーンバインド
クリスタルケージ
ブリッツアクション
ホバーフェザー
シュテルンアクセラレーション
フィジカルヒール

レイジングハート
搭載機能
待機モード
デバイスモード
カノンモード
ランサーモード
フルドライブ
ブラスターシステム

第11話 撃ち負け！！星光の槍杭・そっくり！！（後書き）

ランサーモード

元ネタは武装錬金のサンライトハートです。

デイベインブレイカー

平たくいうとソニックブレイカーの魔法版。

シュテルンアクセレーション

元ネタはサンライトハートプラスの特性を真似ている。

ブラステイングステーキ

とっつき！！

以上！

未来を知っている分、我が家なのは改めて星光なのは本家なのはよりも無茶ぶりを敢行出来ますが、逆に身体の負荷は比べるのがアホらしいくらい天地の差があります。

最終回後について悩んでいます。そのままA'sに入るか、平行世界^{アニ}のstsに星光なのはさんをつっ込んで本家なのはと異例の対面をして星光なのはさんを心身共に強くするかで――

それによって最終回模様も変わるため、皆さんのご協力をお願いします。

意見・感想お待ちしております。

ノイレジセイア 魔力ランクA A A 空戦適性 - 陸戦適性A A A
総合適性A A A 魔導師ランクS S +

ジュエルシードの暴走体の巨木が変化した姿。

s t s はやて並みの強さだが、星光なのはがレジセイアを知っていたのと、フルドライブ+ブラスターシステムの併用により強化されていた星光なのはの前に敗れ去った。ジュエルシードリアルは10。

第12話 父の言葉と星光の想い、すずかの心（前書き）

誤字修正をしましたです。

第12話 父の言葉と星光の想い、すずかの心

side：高町なのは

ふと顔に落ちた冷たいナニカ……

それは頬や額、目尻を伝って流れ零れる。

ふと頬をナニカがつつく。

耳に聞こえるのは泣き声だろうか――

「……………んあ……………」

「な、なのはちゃん!!」

「なのは!!」

「クオン!!」

すずか？アリサ？久遠？

重い瞼を開けると、朱色に染まりゆく空と、泣いている友人達――

「ユーノ……」

「ここに居るよ、なのは……」

もうバレてしまったからでしょう。すずかやアリサが居ても普通に喋っていますね。

「私はどれくらい……寝ていましたか……?」

「30分も……寝てないと思うよ」

「そうですか……うぐっ!」

起き上がろうとしましたが、少し力を入れるだけでも激痛が身体を駆け巡る所為で、起き上がる云々以前の話ですね。

魔法も使わない方が良いでしょう。プラスターシステムを使った所為で、リンカーコアにもかなりの負荷がかかっているはずですし。

「すみません……もう少し、寝かせて下さい……」

「うん。ゆっくり休んでなのは。……ありがとう、なのは」

私は小さく「いえ」とだけ応えて、再び闇の中へ意識を落としました。

II

また寝ちゃったのはちゃんを膝枕しながら、私はなのはちゃんの土埃だらけでガサガサになってしまった髪を梳く。

一週間前、ユーノくんを拾ったあの日の夜から、なのはちゃんはひたすら戦っていたことを。

あんなに恐いものとはちゃんが戦ってたなんて、私知らなかった。

あんなにケガをしても、あんなに痛い思いをしても、絶対諦めなかったのはちゃんが、怖くなった。

った。

なのはちゃんは私からお話して仲良くなった最初のお友達だった。いつも休み時間は教室の隅で本を読んでたなのはちゃんに、本が好きなのか訊いてみたのが始まり。

それからお姉ちゃんと一緒に翠屋とか高町家に通うようになって、私達は親友になった。

それからアリサちゃんと一悶着あったけど仲良くなって、私達3人はいつも一緒に親友になった。

「なのはちゃん……」

魔法……。

私が本やゲームやアニメで知る不思議で夢や奇跡が詰まったものは程遠かった。

とっても恐かった。でも話して欲しかった。

ひとりでこんな辛いこと、抱え込んで欲しくなかった。

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

side：高町なのは

私が目を覚ましたら病院のベッドの上に居ました。

「うっ、くっ……っは！……やっぱり、ダメですか…」

身体の痛みはありませんが、殆ど力が入りません。

ブラスターシステムは、使用を控えないと死にますね。10年後以降はともかくも、今の私では身体が保たないのでしょう。

「ふっ、くうっ、あぁっ！」

肘を立てて、腕を使って上半身だけでも起こしました。

「個室……？」

きっとアリサかすずかですね。兄様という線もありますが、ともあれ――

「早急に、なんとかしませんとね」

レイジングハートのフレーム強化。

新しい魔法や御神流の修練。

そしてこのあとに控える――

「フェイト……テストロッサ」

万全の状態で挑みたかったのですが、仕方がありません。

《ユーノ、聞こえますか？ユーノ》

とにかく現状を把握しようと、ユーノに念話を繋げます。

《なのは！？起きたの！》

《ええ、つい今し方。ところで、先日の戦いから何日経ちましたか？》

《2日が経ったよ》

《そうですか》

48時間、無駄にしましたね。

《レイジングハートは？》

《今、自動修復中だけど、レイジングハートもなのはも、しばらくは戦わない方がよいよ》

《そうですか…》

レイジングハートは無事のようにですね。

《ユーノ、レイジングハートをお願いします》

《うん。任せて》

ユーノとの念話を終えて窓の外を見る。

「まま…なりません…ね……」

本来なら壊すところのないところで壊してしまったレイジングハート。

そしてアリス。

私が未熟だから……。

私が弱いから……。

「もっと……強く……ならなければ——」

誰にも負けないように——

誰も傷つけないように——

「もっと、強く！」

左手を握り締めて、私は心に誓った。

その日の夕方、お見舞いに来てくれたアリサとすずか。

アリサは私に抱きつくとき泣き出して、それを私があやして、すずかは微笑みながら私達を見守っていました。

その後来た父様、母様、兄様、姉様——

一応入院理由は異常災害に巻き込まれた時に負傷した為という理由らしいです。

ケガといっても急成長した木の根に乗り上げてからの落下という、真実をぼかしてケガの過程を少々捏造したくらいです。

まあ、吹き飛ばされ、地面に叩きつけられたのであながち間違いではないのですが。

ブラスターステム使用によるリンカーコアへの負担以外はケガも一度リセットされた為、これといってひどいケガもなく、翌日の退院許可が下りました。

しかし母様に心配させる顔や姉様の悲しげな顔をさせてしまい、とても胸が苦しくなりました。

翌日の退院の時は、父様と兄様が迎えに来てくれました。

私は今回のことをどう父様や兄様に説明しようものか悩みました。

しかし兄様はともかく、父様にはなんと説明したら良いか――

「良かったなのは。大したケガもなくて」

「…はい。お騒がせしました。父様」

「そんなに気にすることはないぞなのは。天災みたいなものだったんだ。お父さんは、なのはが無事でいてくれたことが、それだけでとっても嬉しいんだ」

ガシガシと私の頭を撫でてくれる父様。

やっぱりダメですね私は。

こんなにも優しい父様にも何も語らない私は――

「お前なりに何かやっているのは、父さんはなにも言わないが、無茶は良いが無理はするなよ？なのはが居なくなったら、みーんな、悲しむんだからな」

耳元で囁かれた父様の言葉に、私は緩む涙腺に力を込めて歩き出しました。

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

翌日。

まだ大事をとって学校は休み、毎朝の筋トレも、御神流の鍛練もお休みです。

アリスは一応器のスケッチブックは治ってはいますが、中身のシステム面は私だけではどうにもしようがないので、レイジングハートの修復待ちです。

「只今帰りましたよ。ハーケン」

『無事の帰還を祝福するぜ。マイソウルブラザー』

作業部屋の机に飾ってある黒いゲシュペンストのプラモ。

そこから聞こえるさすらいのバウンティハンターの声。

外見はプラスチックボディですが、中身は精密機器の塊。

ゲシュペンスト・ハーケン――

DX電童をバラして、内部機構を真似て造ったボディに、インテリジェントデバイスのAIデータを基に組んだ自己進化完全自立型擬似人格コンピュータOSを搭載していて、私の場合はさすらいのバウンティハンターをモデルに擬似人格を組み上げました。

コプセントは身近なパートナー。

八神はやてのリインフォース？が羨ましかったのでつい造ってしまったものです。

4日前の夜に完成し、3日間放置でしたが。

『家の屋根から見てたぜ。あんな無理を続けてたら、元祖より早く身体を壊しちまうぜ？』

「わかっています。わかっていますが――」

私ではああでもしなければ、暴走体とも真っ当に戦えない程弱い力しか持たないのです。

それが悔しくて堪らない！

『まあ、しばらくは安静なのは変わりないんだ。この時に休めるだけシエスタをエンジョイしようぜ？』

「ええ。さしもの私も、今回ばかりはどうしようにもありませんから……」

私はハーケンを手にとって自室に向かう事にします。

今日は素直に寝ていましょう。

おやすみなさい――

第12話 父の言葉と星光の想い、すずかの心（後書き）

ちよろつとですが、遂に出せたハーケン！

支える者〃アリス

共に歩む者〃レイハ

導く者〃ハーケン
を目指しています。

ひとりで戦えない。弱いと自らを言う星光なのですが、大勢の絆に支えられ無様でも勝利を掴み取るのが星光なのです。

無印最終回後はやはりsts路線が強い模様です。皆さんそんなに本家なのはvs星光なのはが読みたいのか！？

ハーケン『OK、エブリワン。これからもマイソウルブラザーなのはをよろしく頼むぜ？』

レイハ『マスターの障害は、すべて私が撃ち貫いてみせます！』

アリス『私は……ダメな子です……』

ハーケン『OK、ダファミリア。悲観的なのはマザーと同じだが、お前が居なきや、俺は生まれてないんだぜ？お前はマザーのハートを護ってきた。そいつは誇って良いことだぜ？』

アリス『ハーケン……』

レイハ『ストロベリるのは良いのですが、場所をわきまえて下さいね?』

ハーケン『ウェイトだ、レイジングハート。俺のソウルはブラザーなのは物さ、誰にもやるつもりもないさ』

アリス『私の身も心も、マイスターの物です。勘違いしないで下さい。レイジングハート』

レイハ『わかりました。ですがマスターの最強の槍の座は譲りませんよ?』

ハーケン『OK、レイジングハート。俺は俺の領分でやるだけさ』

アリス『私もいつか……』

こんな感じで相棒達に愛されてる星光なのです。

意見・感想をお待ちしております。

第13話 H a k e n . g o e s t o s c h o o l ! (前書き)

またまた修正。

第13話 H a k e n ・ g o e s t o s c h o o l !

s i d e : 高町なのは

私が退院して2日目、先の戦いから5日。

私は2日目も大事をとって学校はお休みです。

本当は大丈夫なのですが、高町一家＋ユーノ、ハーケン、電話ですずかやアリサからも今日も休めと言われてしまった為、私は作業部屋でちまちまとナイトファウルとロングトゥーム・スペシャルの整備をしました。

他にはプラモ造りとかラノベを読んで過ごしていますが、どうも暇すぎて、今は縁側で久遠を抱いて横になっています。

「クオン……」

どこか元氣のない声で鳴き、私の目尻を舐める久遠。

「どうかしたのですか？久遠」

「クウン……」

久遠は私の顔に自分の顔をこすりつけてきました。

久遠と会話が出来れば良いんですけど……。

『なあに、ただ構ってやれば良いのさ。久遠も久遠で、ブラザーの事が心配なのさ』

横になっている私の頭の上で同じく横になるハーケン。

かなり可動範囲は広く作りましたが、片手を頭の後ろに下敷きにして、片膝を立てて横になっている様は人間みたいです。まあ、中身は正しく人間なわけですから。

自己進化完全自立型擬似人格コンピュータOSの元ネタは超AIですし。

1から人格を育てることも出来れば、ハーケンのように擬似人格を組むことも出来ますし。

ハーケンの場合は、レイジングハートに手伝って貰い、イメージをトレースしてイメージをデータ化し直接AIにインプットしてある為、より人間的ですが。

今、この擬似人格コンピュータOSのデチューンしている最中ですが、至高を目指すのは簡単な分、デチューンはかなり難しいです。どの程度がデチューンラインなのか計りかねますし。

まあ、当分の間は時間的余裕ありませんし、デチューンラインを

「クウ…クウ…」

『寝ちまったか?』

センサーが捉えた寝息に、俺は立ち上がってブラザーとアヤカシフオックスを見る。2人ともとても心地良さそうだ。

『グッナイ、ブラザーズ』

俺が完成したのは6日前だが、基礎のプログラムやメモリーに関しては去年から既に存在していた。

ブラザーはとても心配性でな、世界と自分を少しでも繋ごうと俺を造り始めたのさ。

まあ、寂しがりやというのもあって、少しでも仲間が欲しかったのも確かさ。

こんなにトルプリンセスにだけ戦わせるのは俺のプライドが許さないんだが、生憎俺には戦えるボディがねえ。

レイジングハートが復活したらプログラム体について訊いてみるか。

守護騎士がプログラム体なら、俺もリアライズできるかもしれない。

ナイトファウルやロングトウム・スペシャルがあるの考えると、

お目付役としてついてきたハーケンが頭の上で言います。

木の根は道沿いに生えた為、建物自体にそれ程被害はありませんが、アスファルト舗装の道路は軒並み壊滅状態。

こんな状態ではバスも走れないのと、被害を自分の目で確かめる意味も込めて、私は歩いて学校へ向かっています。

「私が、もつとしっかりしていれば……」

『ウェイト。ストップだブラザー。お前は自分を卑下しすぎだ。お前が居なかったら、アインストキングが街をメチャクチャにしたんだ。そいつをお前は止めた。それは誇って良いことだぜ』

「ハーケン……」

レイジングハートもアリスも居なくて寂しいですが、ハーケンのお陰で少しは元気になります。

さすがさすらいのバウンティハンター　ハーケン・ブラウニング。
女性の扱いは手慣れてますね。

『さて、シリアスターンエンドだ。スクールに向かうぜ、ブラザー
』

「ええ」

私は舗装整備される道路を見ながら学校へ向かいました。

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

side：アリサ・バニングス

ユーノから聞いた、なのはがひとりで戦っていた事。

あたしはその時、とても現実を受け入れられる余裕がなかった。

あたし達を守ってひどいケガをしたなのは。

ユーノは魔法で治っているから心配ないって言ってたけど、背中やお腹から血を流してたのに、口や眼からも血を流していたのに心配ないって言われて、はいそうですかって、納得するわけないじゃない。

なのはが病院に運ばれる間も、ずっと心配だった。

病院で検査を受けて、特にひどいケガもないとお医者さんに言われて、思わずつつかりそうになったけど、すずかのお陰でなんとか踏みとどまれた。

親友のあたし達にも内緒にしていたのはなんか気に入らないけど、正体を隠して影から人や街を守ったり、手助けしたりするのが魔法

使いの王道だし。

なのはの魔法は魔法と言うより魔装機神の方がしっくり来るけど、どっちにしろ、今のところはあたし達の秘密という事になった。

結局なのはは2日も寝眠ってた。

素人のあたしから見てもかなり無理してるみたいだった。

ううん。実際無理してたんだと思う。

あたし達を守った所為で、なのははケガをして、ユーノが魔法で護ってくれてたけれど、ユーノが居なかったら、なのははあたし達を護りながら戦わなくちゃならなかったかもしれない。

あたしは悔しかった。

なのはが戦っているのに、護られて、足手まといの自分が嫌になった。

なのはとの出逢いはケンカからだっただけど、今はずかと一緒に一番の親友と胸を張って言える存在。

なんの力もないあたしに、何も出来ないのはわかってる。でもあたしは、なのはの力になりたい！

「おはようございます」

「なのはちゃん!？」

すずかがなのはが教室に入ってきて驚いてる。

あんのバカチンッ！

今週はしっかり家で寝てなさいって、あたしとすずかで念を押しと
いったのに普通に何事もない顔で学校に来やがってえ！！

「な、なのはちゃん、ダメだよ！今週くらいゆっくり休まなくちゃ
！」

普段大人しいすずかも声を上げてなのはに詰め寄ってる。

「気遣い感謝します、すずか。ですが暇過ぎてやることもなく、体
力も戻ったので学校に来ました」

「でも…！」

ここはこの石頭にガツンとやるべきかしら？

てかやっても良いわよね？

あたし間違ってないわよね？

『ウェイト。プリティーガールズ、少し落ち着いたらどうだ？』

不意に聞こえた男の人の声に、あたしやすずかだけじゃなく、クラスのみんなまで辺りをキョロキョロと見る。でも男の人なんてどこにも――

てかこの喋り方、偶に聞き覚えがあるのはあたしだけじゃないわよね？

「ハーケン、貴方は――」

『おっと、OHANASHIはノーセンキューだマイソウルブラザー
ー』

おでこに手を当てて顔を呆れ歪ませるのは。

まさかユーノみたいにまたなんか拾ったんじゃないでしょうね？

なのはは両手を後ろ、カバンの上にまわすと、何かを持ち上げるように手を上げて、何か黒い物体を近くの机の上に置いた。

黒いゲシュペンスト？

でもギリアムとかヘリオスの声じゃなかったわ。それにMk-？とは所々違うみたいだし。

『ハローエブリワン。俺はゲシュペンスト・ハーケンの管制擬似人格コンピュータOS、ハーケン・ブラウニングだ。さすらいのバウンティハンターとは、俺の事さ』

いや、知らないわよそんなの。

ていうかこのミニチュアゲシュペンスト、普通に喋って動いてるけど、これも魔法なの！？

『ノーだぜバーニングガール。俺のマザーはマイソウルブラザーなのはさ。俺はブラザーが造った自己進化完全自立型擬似人格コンピュータOS……まあ、わかりやすく言えば賢いAIって言ったところだが、スクールチルドレンにはわけわかめか』

「それって超AIみたいなやつってこと？てかあたしはバーニングじゃなくてバニングス！！間違えるな！！」

ていうかそんなの造れるのはってホント何者！？

『OK、バーニングガール。さすがブラザーなのはのフレンドだ。その解釈でまあ間違いないさ』

「あ、あたり前じゃない！あたし達の友情は伊達や酔狂じゃないわ！てかバニングスだって言ってるでしょ！？勇者王ヴォイスなのになんかムカつく！なのは！コイツ一回デリートよデリート！！ハリ

「ハリーハリー……！」

「ア、アリサちゃん、落ちついて」

『デリートはノーセンキューだ。ブラザーが泣くんぞな』

「私はそんなに泣き虫ですかハーケン？」

『おっと、ウェイトだブラザー。さっきのフレーズはメモリーデリートで頼むぜ？』

なんか知らない間に騒がしいのが増えたのは確実ね……。

先生が入ってくるまで、ハーケンはなのはの休みに対する理由が、自分の最終調整の為だって説明した。

まあ、こんなに精巧に動いて人間的に喋る小さいロボットの調整なら、みんな納得したみたいね。てかあたしもビックリよ！

まあ、授業中は静かに経験値を稼ぐ為って、なのはと勉強しているから、やたらめったら高性能ってわけじゃないのかしら？

先生は最初おもちゃかと思ったらしいけど、ハーケンの1から7あたりまでの説明を聞いてお手上げみたい。

超AIとか機械だけど生きてるとか、パートナーとかメンタルケアとか、経験値稼ぎとか特許取得への前段階とか、後半別として、前半は多分あたしくらいしかわからないわよ。もしくは勇者王をちゃ

side：月村すずか

なのはちゃんが学校に来てくれたのは嬉しいけど、無理してないか心配になった。

でもハーケンさんが一緒だから大丈夫だね？

一時間目の国語も、二時間目の社会も、4日休んで遅れ気味のなのはちゃんにハーケンさんが随時アドバイスして、それぞれの休み時間には私達と同じところにもう追いついてた。

なのはちゃん自身、とっても頭も良くてテストも毎回満点だけど、やっぱりハーケンさんみたいなパートナーが居るのは羨ましいなあ。

なのはちゃんにはユーノくんも居るし。

私の家にもネコがたくさん居るけど、ハーケンさんみたいに勉強まではね。

ファリンも居るけど……なのはちゃんに造って貰おうかな？

そしてお昼。

私達3人は屋上で久しぶりにお弁当を食べることになったの。

「それにしてもハーケンって何で動いてるのよ？電池にしたら結構長持ちよね？」

『エーテルって言えばわかるか?』

「エーテルって、魔装機神のエーテル?それともトップの?」

『ビンゴ。この世界にも魔装機神のエーテルがあつてな。俺のメイ
ンはそれで動いてるのさ』

「あんた無駄に高性能よね」

『あたり前だろ?俺はブラザーなのは処女作にして傑作なんだぜ』

「ま、まあ、わからなくもないかも」

アリサちゃんはハーケンさんと難しい話をしてる。

私にはわからないかな。

なのはちゃんは黙々とお弁当を食べてる。

いつもの風景だったはずのお昼ご飯。

でも今は色々知ってしまった私は、なのはちゃんにどうしてあげれば良いのか、どうしたらなのはちゃんの力になれるのか、私はそればかり考えてた。

『M S . すすか、箸が止まってるぜ』

「すずか、大丈夫？調子悪いの？」

「ううん。何でもないよ」

「ごちそうさまでした」

いつの間にかお弁当を食べ終えてたなのはちゃんは、イスから立って階段の方へ歩いていく。

「なのは——」

『ウェイトだ、M s . すずか、バーニングアリサもな。少しブラザーをひとりにさせてやってくれ』

ハーケンさんに止められて、私はなのはちゃんを呼び止められず、なのはちゃんは階段を降りて行っちゃった。

『済まないなフレンズプリンセス。ブラザーもまだ、結構参っててな』

「なのはは、大丈夫なんでしょうね？」

『そいつあ俺にも、誰にもわからない。ブラザーのハートはブラザー次第だからな。俺達がどうこう言わなくても、ブラザーはわかっているし、わかってはいるが、ブラザーは勇気が中々出せないのさ。』

私はやっぱり臆病者で、2人の友人である資格すらありません。

今日、昼食時に、私と魔法について話そうとしたのですが、結局切り出せずに逃げてきてしまいました。

怖いんですよ。あんな私を見せちゃったことを。

子どものメンタルには強烈過ぎる私の姿をどう言われるのかわからなくて。

そんなことはないと言気込んで、やっぱり怖くてダメでした。

私はいつたい、なにがしたいのか、自分でもわからなくなって来ました。

side: アリサ・バニングス

午後の授業からなのはもつと元気がなくなって、放課後はみんな別々に家に帰った。

「なのはのバカ……」

途中まで歩いて帰るあたしは、帰り道の海鳴臨海公園に寄った。

特に理由はないけど、なんとなく、あたしはなのはとどう接していけば良いのか考えたかった。

なのはは親友。それはこれからも変わらないこと。

でも今のなのはは近くで遠い存在に思えてしまう。

特別な力なんてないあたしには、なのはの隣りに立って支えてたり、力になってあげることすら出来ない。

あたしに力があれば良いのに。

魔法までとは行かなくても、魔装機神の精霊とかと契約とか出来れば、あたしもなのはの手伝いが出るんじゃない——

——『ビンゴ。この世界にも魔装機神のエーテルがあつてな。俺のメインはそれで動いてるのさ』

エーテルがあるなら精霊だっているはずよ！

「でもどうすれば……」

顔を下げたところで、座っていたベンチの足元に光るものがあつた。

気になって取ってみたら、それは綺麗な石だった。

優しく赤く、力強く輝く宝石だった。

「あたしを……呼んだの？」

ドクンッ――

あたしの声に応えるように、宝石は弱々しいけど、確かに一瞬脈打った。

あたしはその宝石をポケットに入れて、早足で家に帰った。

第13話 H a k e n ・ g o e s t o s c h o o l ! (後書き)

どうしてかな？

ハーケン入れたらすらすら書けるのは？

大人を子ども達の中に突っ込んだから話しがまとめ易くなったとでもいうのか？

意見・感想、お待ちしております！

皆さんが無事ハーケン兄貴に見えているようで良かったです。

フラグ乱立中ですが、やはりみんなで支え合っのっていいですよねえ。

第14話 家族（前書き）

高町家にピントを絞ってみました。修正版です。

第14話 家族

side：高町なのは

土曜日です。

今日は学校はお休みです。

私は早朝から目が覚めてしまった為、作業部屋でナイトファウルをいじりながら、レイジングハートが早く治る事を祈るばかりです。

ブラスターステムの反動はレイジングハートにも多大な負荷をかけてしまった為、その所為で修復が遅れているのだとハーケンは言います。

会話は無理ですが、同じ機械同士だからデータリンクでレイジングハートの状態が診れるようです。

父様の起きてきた気配を感じ、私は作業着から道着に着替えて小太刀の木刀を腰に挿して道場へ向かいます。

まだ兄様と姉様は起きてきてないのでしょう。道場にその姿はありませんでした。

「おはよう、なのは。もう良いのか？」

「おはようございます、父様。もう身体は全快しました。鈍らぬ内に稽古を再開したいと思います」

「そうか。まあ、お父さんはなのはが良いらいつでも良しさ。でもなのは、1つ訊いても良いか？」

「ええ。構いません」

父様の訊きたいことですか、いったいどのような事柄でしょうか？

「なのは、お前に守りたいものはあるか？」

守りたいものですか……。

「ええ、あります。一つは言えませんが、もう一つは私を取り巻く人々です。父様、母様、兄様、姉様、アリサ、すずか——私の大切なものです。それを守る為ならば、この身、この命、喜んで差し出す覚悟があります」

私の意地、高町なのはである事を証明し、そして私の身の回りの人々を守る。

私はそれだけしか出来ません。

「そうか……」

父様がガシガシと頭を撫でてくれました。

ゴツゴツで少し重いですが、とても落ちつきます。

「さてなのは、今日はおさらいからするぞ！」

「はい！父様」

私は準備体操をしてから、御神流 斬のおさらいに入りました。

斬撃は基本的に九つしかなく、刺突^{つき}を始め、切り下ろしの唐竹^{からたけ}、右からの切り落^さとしの袈裟斬り（けさぎり）、逆……左からの切り下ろしである逆袈裟^{さかげさ}。横切りである右薙^{みぎなぎ}、左薙^{ひだりなぎ}。斜め下からの切り上げである右切上^{みぎきりあげ}、左切上^{ひだりきりあげ}。そして完全に下から切り上げる逆風^{さかかせ}。

その一通りを振るい終えてからの御神流 斬へと繋がります。

緩急を斬撃の使い分けの合間に、迅速の速度を一閃に加えることによつて斬撃を相手の認知領域から消す。

剣の立ち会いはそれ故に勝負は一度、一瞬、そして一撃必殺でなくてはならない。

「ふう……」

「よし、大分形になってきたじゃないか。この分だと、次のステ

ッブに移るか？」

「良いのですか？」

「ああ。御神流 斬は基礎の基礎だ。なのはなら自主鍛練で斬を習得出来る程形になっているからな」

新しいステップ……。なんて良い響きでしょうか。

「それじゃあ次のステップ。御神流 虎切と御神流 貫だ」

「御神流 虎切に御神流 貫……」

「ああ、虎切は一刀での遠間からの抜刀による一撃を振るう奥義だ」

「いきなり奥義なのですか？」

まだ習い始めて一週間、事実上の稽古時間はそれ以下の私に、こんな早期に奥義を？

「本来なら次の基本技の虎乱を教えた方が良いんだが、なのはのあの刃捌きなら、虎乱は少し練習すれば出来ると俺は思ってる。虎乱はまた後で教えてあげるから、虎切と——相手の防御を突き抜ける技。実際には相手の防御を見切り、突き通すための、刹那の見切りを身につける御神流 貫を先の方が良いと思ってな」

「相手の防御を見切り、突き通すための、刹那の見切りを身につける技……」

まるで私の為にあるような技です。

「これなら、相手の防御がどんなに硬かろうが、その弱点を確実に見抜いて必殺の一撃を叩き込む事が出来る」

「是非御教授下さい、父様」

私の食いつきぶりに、父様は軽く笑って「ああ。そんじゃあやるか！」と腰に挿してあった木刀を抜きます。

「虎切はともかく貫は身体で覚える技だからな、ガンガン行くぞ！」

「はい！父様！」

私は手に持つ二刀で父様に斬りかかります。

私は有意義で楽しい朝の鍛練を過ごしました。

朝食を終えた後は、兄様から御神流虎乱を見せて貰いました。

改めてみると、兄様は烈火の將並みに強いのだと思ってしまいました。

その後、手取り足取りで虎乱の振るい方を教えて貰いましたが、なるほど、父様の眼力は凄いです。

ナイトファウルを扱う関係上、刃捌きには自信と自負があります。

斬鉄は出来ませんが、5cm正方形の木材は一撃で数個に解体する事が出来ました。

「ほう、やるじゃないかなのは」

「い、いえ、それほど……でも」

「なんでなんでえゝ!? 私だつて一杯練習してやつと覚えたのに一発成功つて、どんだけ理不尽なのよおー!! なのはあー!! ちよこつとその才能わけてゝゝ!!」

「きやつ、ね、姉様……！」

確かに一発成功では姉様がかわいそうなので、ナイトファウルの刃捌きを披露したのですが――

「うわあああゝゝん！！絶対なのは私より強いってばあゝゝん！！私の努力って何だったのよ恭ちゃゝゝゝん！！」

「お、おい美由希。少し落ち着け」

「これが落ち着いていられるかあゝゝん！！なのはばっかりなんでえゝゝ！！」

本泣きされとは思いませんでした。

姉様にはかわいそうなことをしてしまいましたね。

「姉様、姉様はとてもお強い剣士です。私の技量では姉様に勝つことなんて出来ません。そして兄様も言っていました。姉様は成長するスピードこそ遅くとも、自分にはない才能を持っていると。今は経験差で自分が強くともいつかそれすら上回っていくと……」

「なのは……ホント？恭ちゃん？」

「……ああ。俺は御神流剣士としては一生かかってでも完成は難しいだろう。だが美由希はそれを成せる剣の天才だ。俺にはないものだからわかる。お前は必ず俺を超えて一人前の御神流剣士になれるかな」

「恭ちゃん……」

「そしてなのはもだ。なのはは努力の天才だ美由希と同じで一度覚えた事を忘れない。そればかりか御神流を深く理解している。そしてそれを振るう意味の覚悟もある。なのはもまた、いつか俺を超えるだろう」

「兄様……」

どこか寂しげに、でも嬉しそうに言う兄様。

姉様も私を抱き締めたまま嬉しそうに、「そう簡単には負けないんだからね！なのは」と言いました。

私の守りたいもの。

私を取り巻く人々。

友人――

そして――『家族』。

産まれてくるはずだった高町なのはの居場所を奪ってしまった私には、言える義理はないのでしょうか、私は温かく、優しい友人や『家族』を守りたい。

その為に私は魔導を行使し、御神流を振るう。

高町なのはとしてでなく、『私』として、それは胸を張っている事

が出来ます。

高町なのは――

貴女が手にするはずだった家族も友人も、私が命を賭けて守ります。だから私が死に、或いは貴女が私を消し去るまでで構いません。

私を取り巻く人々を、『友人』――そして『家族』と心から想つてもよろしいですか？

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

その日の夕食は私の退院祝いと新しい家族の歓迎会ということで、少し豪華なものでした。

新しい家族とは久遠とハーケンのことです。

入院中に久遠の存在はバレていたそうです。

私は久遠を膝の上に乗せて食事をしていました。

母様が久遠を物欲しそうに見ていますが、久遠はたとえ母様でも譲れません。この至福の抱き心地は私だけのものです。

「それにしてもなのは頭が良いのね。ハーケン君がロボットなんて母さん未だに信じられないわ」

『サンクス、マザー』

「恐縮です。母様」

しかし何をトチ狂ったのか、次の母様の言葉は――

「でもそれならハーケン君はなのはの息子よねえ。あらあら、あなた。私達にいつの間にか孫が出来ちゃったわ。今夜はお赤飯の方が良かったかしら？」

「『ブフッ！』」

あまりにも突飛な言葉に少々ご飯を嘔き出してしまいました。

「そういえばそうなるのか？やあ、まさか孫の顔をこんなに早くみれるなんて思わなかったなあ」

「母様、父様、お戯れも程々にして下さい」

『そうだぜサムライペアレンツ。俺となのははソウルブラザーパートナーだ。確かにマザーでもあるが、俺はブラザーと思ってるのさ』

「……なのは兄の座はやらんぞ」

『OK、エルダーブラザー。別にそういう意味じゃないさ。俺達はパートナーだ。だがパートナーじゃあ壁を感じるからソウルブラザー、略してブラザーと俺は呼んでるのさ、これがな』

「……そういう意味なら我慢しよう」

「恭ちゃんてば嫉妬深いよねえ。それにハーケンの方がお兄さんぽいし」

「美由希、明日は素振り一万回からやろうか」

「うつ、失言でした忘れて下さい大明神様恭也様あゝゝ！」

「ダメだ」

「あううゝゝ！ハーケンお兄さんからもなんかいつてえー！」

「むう……」

『ウェット……だ。メガネシスター、悪いが俺も死にたくないんでな』

「絶望した！！優しくない世界に絶望した！！なのはあゝゝ！」

「はいはい、姉様はかわいそかわいそなのですね。なでなでしてあげましょう」

「うう、私に優しいのは妹だけか……なのは大好き！」

「にぱー」

そんな楽しい夕食でしたが、その後とんでもないことが起こるとは、私は——私達家族は微塵にも思っではいませんでした。

第14話 家族（後書き）

美由希のキャラ崩壊が激しすぎる件について――

そして一番の難敵は桃子さん。

ハーケンが守護騎士なりユニゾンデバイスなりで実体化したら恭也とガチバトルになりそうな予感しかしねえ――

さて、魔法少女バーニングアリサですが、凄いですねえ元祖は。カッコイイぜよアリサ。今のところ我が家バーニングアリサは中身繋がりで殆ど炎髪灼眼になると思います。武器は刀と銃を予定してますが、刀ともかく銃はどんなのがよろしいと思いますか？

あと篝繋がりで”戦術砲機” ブロンテ・クラフトとか――

皆さんの意見・感想をお待ちしております。

第15話 スクランブル戦闘民族高町家（前書き）

短いです。

第15話 スクランブル戦闘民族高町家

side:???

夜、誰もが寝静まる夜。

高町なのはの寝室では、眠っているなのはを悲しさの色濃い瞳で見る少女が居た。

「…なの……は……」

優しく寝ているなのはの髪を梳く少女。

その表情はとても柔らかいのに、瞳だけは悲しみに満ちていた。

音が出ないように窓を開けて、窓枠に足を掛ける少女。

月明かりに照らされた少女は、頭に一對の獣の耳を生やし、一本の太く柔らかそうな毛並みの尻尾を持っていた。

『ウェット。待ちな、アヤカシフォックス』

少女を呼び止めたのはゲシュペンスト・ハーケンことハーケン・ブロウニングだった。

『こんなナイトにお出掛けかい？』

「……………」

ハーケンの言葉に、少女は顔を俯かせた。

「くお…ん…じかん…ない」

『マイブラザーにちゃんと相談してからでも良いと俺は思うぜ？フ
オックスプリンセス』

「だめ…くおん…なのは…めいわく…」

『ブラザーはそんな奴じゃないさ。と言うより、わかってんだろ？
俺達の誰かが欠けたら、ブラザーはたちまちハートブレイクってこ
とは』

「…でも…」

少女はもう自分がこの家に留まれないのを感じていた。

今だからまだ自分を保てていても、それも長くはないと。

「…ありがとう…」

少女はハーケンか、はたまたなのはに向けてか、小さく呟いて窓から飛び出した。

『やれやれ、とんだ貧乏くじだ。まあ、今も昔も変わらんがな、こいつは』

ハーケンはやれやれと首を振ると――

『おい起きろブラザー！エマージェンシーだ！！』

「んむう……あと……5分……」

『なにお約束やってんだ！起きろダブルザー！ゲシュペンストキック！』

とりあえず相棒で久遠の事実を知るのはを叩き起こす事にしたのだった。

[illegible]

Side: 高町なのは

両腰にナイトファウルとロングトウム・スペシャル、後ろ腰には刃を漬した小太刀を挿して、テングロンハットを被る。

いつかこうなるとわかっていた為、どこまで効果があるかわかりませんが、火薬に願をかけた塩を混ぜ込んで、弾丸にも『The Minions of Cthugha』――

魔力を注ぎ込めば爆裂弾になる術式文字をナイトファウルの弾丸に彫り。

『Wending the Blackwood』――

自動追尾弾、敵を捕らえるまで追い続け、急所を仕留める術式文字をロングトウム・スペシャルの弾丸に彫り。

絶対数は少ないですが、無いよりはマシでしょう。本当ならイブン・ガズイの粉薬とかがあれば良いのですが、材料が材料です。小学生の私には――というよりデモベ世界でないリリカル世界では用意出来ない代物です。これで今やれることをやりましょう。

友人を救う為に法を犯し、本物の銃口を向ける。

私自身には恐怖はありません。

しかし久遠を救えないかもしれないことには恐怖を感じます。

私には霊力はありませんでしょう。

魔導がなければまともに戦えないでしょう。

でも私には――

「OK、相棒。行きましょうか」

『OK、マイソウルブラザー。マイファミリーダフォックスにカチコミと行くのか?』

「目指すは八束神社、でしょうね」

『オーライ、ブラザー。さっそく行こうぜ』

私はハーケンがコートの襟を掴むのを感じながら作業部屋を出ます。

「どこ行くの?なのは」

「姉様……」

『こいつは予想外のお客さんだな。ボンソワール、メガネシスター』

ハーケンが手を帽子に添えるように、自らの手を頭部に軽くあてがう。

「通して下さい姉様。私は行かなければなりません」

「どうして?」

目的地を告げてしまえば姉様も着いてくるでしょう。

相手は大妖狐。

魔導師の私でさえ、久遠の攻撃は防げない。

御神流剣士たる姉様でも無傷は免れないでしょう。

傷つくのは、私だけで十分です――

「ブリッツアク――ッ!!」

「なのは!？」

くっ！念話はともかく、他の魔法はまだ使えませんか。

10年後の高町なのはでさえ、しばらくの養生を強要される程の負担を強いるブラスターシステム。

一週間の休養では身体はともかく、リンカーコアはまだ無理の様です
ね。

痛みの襲った胸をかき握る。

『大丈夫かなのは!？まだ魔法の行使は無理だぜ』

「のようです。久遠への勝ち目が余計に減りましたね」

「久遠？久遠に何かあったの！？」

『ウェット。落ち着いてくれ、メガネシスター』

「ハーケンは黙って。ねえなのは？なのはは何をしてるの？私達に何を隠しているの？」

「…私は……」

「そこまでだ、美由希」

「とーさん」

「父様……兄様……」

そこには道着姿で完全武装した父様が、同じく完全武装の兄様を連れてやってきました。

「とーさん。恭ちゃん」

「美由希。人は譲れない戦いをする時が来る。今なのはは、その戦いに身を投じている。俺達には、なのはが黙っている事を強要する権利もない」

「恭ちゃん……」

「父様、兄様、私は……」

私が口を開こうとしたところで、父様が頭をガシガシと撫でてきた為、喋ることは叶いませんでした。

「なのは。別に無理に言う必要はないんだ。ただ、お父さん達にも手伝えることがあるなら、遠慮なく言ってくれて良いんだ。なのははまだ子どもなんだ。なんでもかんでも1人で抱え込まなくて良いんだ」

「父様……」

どうして父様は何も語らない私に、こうも優しくしてくれるのだろう。

私には、そんな風にされる資格なんてないのに――

「なのははお父さんの大切な娘だからな、1つや2つの隠し事くらいあってもなんともないさ。それに、なのはも隠し事をするような歳になったんだって、嬉しく思うくらいさ」

「……父様……」

私は帽子を眼深くずらすと、数滴の涙を流した。

そんな事を言ったり思ったりする権利はない。

でも私は父様の言葉に嬉しいと感じてしまった。

本当は抱きついて泣き叫びたい。

でも今は久遠を助けに行かないと――

「ほらなのは、背中に」

「に、兄様!？」

「急ぐんだろ？」

「……はい!」

私は兄様の背に乗ると、腕を前にまわして落ちないようにします。

「おっとと、なのは、随分重くなっ たな……いて!」

「失礼な。武器と服が重いだけです」

『失言だっ たな、エルダーブラザー』

私は中身は元男でも体重や体型くらいは気にするんですよ？

まあ、体型は将来ナイスボディが約束されてますが、腐らせるのも磨くのも自分自身です。

「さあ、ちゃんと捕まっているよ、なのは」

「はい！」

兄様の背中……とつても広くて温かくて、父様の手のように安心して身を委ねられます。

「ちょっとまって恭ちゃん！私も！」

「お前はなのはの戦いを知らないから今回はお留守番だ。師範代としてはお前はアレ関係の戦いには前知識無しには出せない」

「うう、とーさん」

「俺より美由希を知ってる恭也が言うんだ。今回は我慢な？」

「うぐ、な、なのはあゝ」

「すみません姉様、私は今回足手まといにしかありませんでしょう。そんな立場では私には2人の説得は——」

『そう言うことだ、メガネシスター。今回は留守を頼むぜ？《ユーノもな？》』

デバイスのAエータを基にして造られたハーケンですから、念話もお茶の子さいさいです。

「みんなひどいよお……」

《わかった。久遠が相手なら、僕じゃあなんの役にも立てない。悔しいけど、なのはをお願い》

《OK、フレンズフレット。ブラザーは任せな》

「行くぞ、なのは」

「いつてくるな、美由希」

「いつてきます、姉様」

『留守を頼むぜ、メガネシスター？』

「うう、いつてらっしゃーい……」

姉様を残して、私達は家を出ました。

向かう先は八束神社――

私達が出逢い。

とらハで久遠の封印が解ける場所。

今一番考えられて久遠と一番縁のある場所。

第15話 スクランブル戦闘民族高町家（後書き）

ついに出撃の戦闘民族高町家の主戦力！

意見・感想、お待ちしております。

第16話 結ばれる絆は——（前書き）

本気久遠VS高町家です。

第16話 結ばれる絆は――

side：久遠

久遠は高町家を出た後、八束神社に居た。

神社は死ぬほど嫌いの久遠。だがなのはと永遠の別れをする前に、彼女と出逢ったこの場所に來たかったのだ。

青い石に身体の内は奪われても、心だけは平氣だった。

そこから初めて見たなのはは、怖かった。

しかし高町家で生活する内、なのははとても強いけれどとても弱い子であることがわかった。

傷ついても諦めないところが、辛くても優しくしてくれるなのはが好きになっていった。だから自分はなのはとこれ以上一緒に――

「…なのはは」

自らに掛けられた封印。

今はその封印のお陰で感情も押さえつけられているからいい。けれど封印が解ければまた自分は憎しみに駆られ、暴れる妖狐になってしまうかもしれない。

子狐に戻れない程に妖力も溢れている。

それが解き放たれてなのはを傷つけてしまう前に自らの命を断つ。
それが久遠の選択だった――

「久遠！」

でもなのはそれを許してくれない。

なのはは優しい子だから、ハーケンの言う通りに相談すれば一緒に
解決策を考えてくれたかもしれない。

でもただでさえ傷だらけで様々な物を背負っているなのはに、これ
以上何も背負わせたくないのが久遠の意志。

だから自分の事は自分で決着をつけないとならない。そう選択した。

〃
side: 高町なのは

八束神社に着くと、境内には月を見上げる久遠。

その瞳はとても口では表現出来ない悲しみが見えたような気がしました。

「久遠！何故です！？何故何も言わずに私の前から居なくなるうるんですか！」

兄様の背から飛び降りるように私は境内に立ち、久遠の背中へと言葉を投稿ける。

「久遠…なのは…一…緒…駄…目」

「そんなことはありません！！貴女を蝕む祟りは、私が被ってみせます！だから！！」

「…無…理…なのは…霊…力…ない…」

「たとえそうでも、必ず貴女を祟りから救ってみせます！！」

今引けば、久遠とはお別れになってしまう。それも永遠の。そう感じる――

「こないで！」

久遠が雷を放つ。

それは子どもサイズでとても威力は低い物。それでも子どものものには十分な脅威となる。

「なのは！」

「くっ」

ナイトファウルフェイクリッパを展開して正面から雷を断ち切る。

こういうこともあるのかと、今夜のリッパも服も耐電絶縁処理は完璧に仕上げてきました。ちょっとやそつとの雷撃くらいなら防げはします。

「久遠、貴女がどう言おうとも、私は貴女を連れて帰ります」

「なのは……なん……で……」

「貴女は私の友達で家族だからです」

「……とも……だち……かぞ……く……うっ——」

「久遠！？」

急に身体を掻き抱く久遠。その身体からは靈感のない私にもはつき

り見える黒いオーラ。

兄様と父様が身構えるのが気配でわかります。

「つつ——あああああああ！……！！！」

久遠の身体から稲妻と黒いオーラが溢れ、稲妻の閃光は久遠を照らし包み、私の視覚から隠してしまう。

星空は曇が立ち込め、稲妻を発し、明らかに空気の雰囲気が変わっていく。

重圧感——プレッシャーもジュエルシードの暴走体とは比較にならない。

閃光が収まれば、久遠が居た場所には——

「なのは……あれも…久遠、なのか？」

元々なのはと同年くらいいの、獣耳や尻尾を生やした女の子だった久遠は、今は美由希や恭也に近い年齢くらいの女性の姿になっているのだ、なのはと久遠の会話から、作業の少女が久遠だと薄々察していた恭也でも、目の前で急に少女から女性に姿を変えられたら戸惑う。

「…ええ、約300年前に封印された大祟り妖狐——久遠。でも久遠は何も悪くはありません。その当時の人間達の所為で、久遠は大切なものを奪われて、怒りと憎悪に捕らわれ、狂ってしまっただけ。本当の久遠は人見知りでおとなしいだけの狐妖怪。祟りを追い払えば、久遠は元に戻るはず」

「祟り…か、超能力や自動人形や魔法とは戦ったことはあるが、果たして祟りなんていう魔法以上に超怪奇的なものに御神流が通じるかどうか……」

御神流師範代で、ついこの間魔法と対峙こそしたが、あれには実体もあつたし、刃で斬ったわけでもなく、鋼系で動きを止めた程度だ。祟りなんていう日本ではある意味で魔法的な、實在すら曖昧なものに御神流が通じるか否か考えてしまうのは仕方がないことだろう。

「久遠自体には実体があります。祟りは私の方でなんとかしてみます。兄様と父様は——」

「久遠の動きを止めるか、時間稼ぎをするか、そのどちらかぐらいか」

「いえ、私に一度だけ久遠に張り付く隙を作っただけければ」

父様の案を遮って私は言いました。

高町なのはが砲撃で想いを伝えるなら、私は己自身の肉体を用って想いを伝えるしか思い浮かべられません。

もはや高町なのはでもなんでもないような戦い方しか出来ない私ですが、それでも久遠を救いたい気持ちは本物です！

『レイジングハートも魔法も使えない今のブラザーには分の悪い賭けだが、それでもやるのか？』

「当たり前です。久遠を救う為ならば。それに貴方らしくもありませんよ？ハーケン」

『フツ、そうだな。OK、ブラザー。俺も分の悪い賭けは嫌いじゃないぜ、こいつがな。そういうわけだファーマーザードエルダーブラザー、覚悟は出来てるかい？』

「愚問だぞハーケン。妹の行く道くらいは切り開いてみせるさ」

「なのは、言うからには、必ず成功させるんだぞ？そしてみんなで家に帰って朝ご飯にしよう」

「はい！兄様、父様」

私達は身構えて久遠と対峙する。

その瞳は恨み、怒り、憎しみ――

普段の久遠からは考えられない感情ばかりが見えた。

「あああああああああ！！！！」

一筋の雷が久遠に落ちる。

久遠の背の黒いオーラが更に膨れ上がる。

人の姿でも鋭い爪を振り上げて叫び声を上げながら襲い掛かってくる久遠。その先には私が居た。

「くっ、結構重いな。だが娘に手を出すなら、この高町家大黒柱高町士郎の屍を踏み越えて往ってからにして貰おうか！」

しかし、間に割って入った父様が小太刀をクロスさせて久遠の突進を止める。

「父さん！」

兄様が一瞬かき消えたかと思えば、一瞬で久遠の右横に居た。

「はあっ！」

兄様は小太刀を抜いたが、私が見えたのは、最初の一刃が反応した久遠の腕を薙いで払う軌道のみ、あとはいつの間にか背後にまわっ

ていたり、また右横に戻ったかと思えば左側に居たりと、そして久遠を襲った斬撃は4つ。

たまらず久遠は父様から離れましたが、身体どころか服にすら傷はなかった。

「小太刀二刀御神流 奥技之六 薙旋——」

「ダメだ父さん。まるで鉄板にでも打ち込んでいるような硬さだった」

父様が技名を述べ、兄様が打ち込んだ感想を述べた。

兄様に連撃を入れられた所為か、久遠の警戒心が急激に高まるのを私は感じました。

「なるほど、となると久遠には悪いけれど、少し俺達も本気で行かないとな」

父様から放たれるプレッシャーは、久遠の放つプレッシャー——どこか野性的な荒々しさとは違う、明確な、人としての指向性のあるプレッシャー。後ろから感じるだけでも冷や汗を掻く程のプレッシャー。これが御神流剣士、不破としての父様ですか——

兄様からも見劣りないプレッシャーを感じます。

「あああああああ!!!!!!」

久遠が雷撃を放つ。

標的はなのは――

しかしなのは横に転がることで雷撃を回避した。

次に動いたのは土郎。

10m近くありそうな距離を一瞬で詰めた。

幾閃もの煌めきが久遠に打ち込まれた。

御神流 虎乱――

しかしなのはが鍛練するものは勿論、恭也や美由希が振るう虎乱以上の速さを持ち、恭也は一瞬出掛かりの動作が斬撃でなければ、美由希の母、美沙斗の放った御神流裏 奥技之参 射抜と勘違いしそうな程速かった。

恭也は負けじと神速で、土郎の虎乱を受けてたたらを踏む久遠を眼前に捉える。

傷つけるのが、殺すのが目的じゃない。

小太刀を久遠に打ち込む。

久遠は腕で防いだ、次の瞬間飛び退いて、防いだ右腕を抑えていた。

御神流 徹――

衝撃を表面ではなく裏側に通す撃ち方で威力を『徹す』打撃法。素手や刃のついていない武器でも簡単に人を殺すことができる技。加減して放てば相手の打撃面を痺れさせて使えなくすることが出来る。

狐だった久遠に、対人戦法が通じるかと思ったら、なまじ人型の分、通じることには恭也は確信を持った。

鋼糸を懷から取り出して投げつける。

久遠が鋼糸を防御しようと振り上げた左腕を絡め取る。

「父さん!!」

恭也が士郎に叫ぶと、士郎も鋼糸で久遠の右腕を絡め取り、同時に引っ張り上げる。

久遠は負けじと脚で踏ん張る。

御神流剣士2人分の力に拮抗する力に士郎も恭也も僅かに驚くが、そういう物だと今は自分を納得させる。

「「なのは!!」」

父と兄の切り開いてくれた活路に、なのはは飛び込む。

転びそうになる脚を動かして、久遠に向かって駆ける。

「うああああああ!!!!」

久遠から雷が迸る。

空からも稲妻が落ちる。

しかし感電を恐れずに、士郎と恭也は鋼糸を引く手を止めなかった。

指から焼ける臭いがしても離さない。

なのはを信じて、意地でも2人は離さない。

なのはは放電される雷の中を、リッパで受け流し、切り裂きながら進む。

この雷には久遠の妖力が混じっていて、魔力変換資質の電気と似たような変換のされ方をしている。

空から降る自然の稲妻は斬ろうとは思わないし、まず絶縁処理したリッパでも感電するだろう。

しかし久遠から放たれる雷は、この僅かにエーテルを纏うリッパで斬り裂ける。

「正気に戻りなさい！久遠！！」

また正面からきた雷をフェイクリッパで斬り裂く。

もう腕を伸ばせば届く距離に久遠が居る！

「ああああああ！！！！」

「くつつああああああ！！！！」

「「なのは！！」」

『よせなのは！！こんな電流受け続けたら脳天焼ききれるぞ！！』

放電する久遠を抱き締めたなのは、超至近距離から直接久遠の雷を受ける事になった。

なのはの姿に叫ぶ士郎と恭也、そして徹底した耐電絶縁処理を施されたハーケンが耳元で叫ぶ。

零距离ディバインバスターはこんな物だろうかと一瞬思いながらも、飛びそうになる意識を気合いで維持して、なのはは久遠を仰ぎ見る。

すっかり大人の久遠は、今はなのはよりも大きい。自然とそういう形でなのはは久遠を見る事になる。

「久遠……私はいつも無様で、本物の高町なのはには程遠い星屑の存在です」

掠れゆく声でしっかり伝わるかどうかはわからなくても、なのはは伝えたかった。

「私は自分を取り巻く絆に自信がありませんでした。それは高町なのはが手に入れて必然の絆でしたから」

家族やアリサ、すずかにユーノ。

それらは魔法少女高町なのはが手に入れて必然の絆。

「でも私にはアリスが居た。そして貴女が私の前に現れた……」

アリス――

本来ならば存在しない私のファミリア。

久遠――

リリカルマジカルな世界には登場しない狐妖怪。

「私は貴女のお陰で救われました。私が紡いだ私だけの絆——そして気づかされた。たとえそれが必然でも、私が紡いできた絆は本物だという事を……」

久遠に語り続けるなのはの身体から、若葉色の光の粒子の様な物が溢れ出し始め、それは神社の境内や裏手の森からも若葉色だったり青だったりする光の粒子が、一様になのはの周りに集まっていく。

「こ、これは——」

「傷が……治っていく……」

『マジか……エーテル係数計測限界値突破、数値化出来ねえ。まさかフレアー現象なのか？一体何が始まるんだってんだ……』

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

side：高町なのは

「……」

気づけば真っ白な空間に私は居ました。

「ハーケン？父様？兄様？」

肩に居たはずのハーケンも、後ろに居たはずの父様も兄様も居ません。

「はっΣ！！久遠！？久遠！！」

「なのは……」

声がした後ろを振り向けば、そこには久遠が居た。

「久遠！！」

私は久遠を二度と離さないようにキツく抱き締めた。

「久遠のバカ！アホ！ボケ！駄キツネ！！」

「ごめんなさい、なのは」

私を撫でてくれる久遠の手は、父様とは違って細々していて、でも代わりにその細々しい指で髪を梳かれる心地良さが、まるで昔、私

が私になる前、前世の母さんや母様に撫でて貰った時のように、子どもが寝付くまで髪を梳いてくれる心地良さを久しぶりに感じた。

「久遠……次にこんな事をしたら零距离でスターライトブレイカーを撃ち込みますからね！」

「うつ、なのはがこわい……」

ピクンと跳ねた久遠の耳と5本の尻尾。

「当たり前です！一体どこぞのダフォックスの所為で2回もフェイト・テストロッサと戦う前に電撃浴びにやあなんのですか……！」

「クウ……ごめんなさい……」

しゅんとして垂れ下がる耳と尻尾。

かわいい。勢いが削がれてしまう程の破壊力ですが、ここは心を鬼にします！

「いいえ！タダじゃ赦しません！」

「クオン！？やだやだ！なのはこわい……！」

逃げようとする久遠ですが、がっちり固めている為、走っても振り解こうとしても、私は離れません。

「久遠……」

「クオンΣ！？な、なのは……」

私は久遠の耳元で久遠の名を呟く。

動きを止めた久遠の頬に手を添える。

「ク、クウ……く、くすぐりたい……」

「久遠、私の大切な久遠……」

私達の足下に展開する桜色のミッド式魔法陣――

今は胸の苦しさも忘れる事が出来ます。

「なのは……？なぜ、ひいたの？」

こてんと首を傾げる久遠の愛らしさを脳内フォルダーに刻み込みながら、前世でも今世でも初めてを久遠に捧げます。

「くみゆΣ!?!?」

目を見開く久遠を超至近距離で脳内フォルダーに保存しながら、瞳を閉じる。

舌を入れて縮こまって逃げようとする舌を絡める。

「んっ……あ……はあっ……んっ、あっ……あう……うん……」

空気を求めて開く久遠の口の中を舌で犯し続ける。

自分のと久遠の味がブレンドされて、甘露のような甘味を感じる。

そこに久遠の鋭い犬歯で傷ついた舌から流れた血が混じる。

「んく……コク……ふあっ……」

「ふう……」

離れる私達を紅い橋が繋ぐ。

もつと久遠を感じていたいですが、今は絶賛バトル中ですし、これ以上は18歳未満お断りになりそうなので、名残惜しいですが仕方ありません。

「久遠、貴女は私が死するその時まで、私と共に——」

「なのは……」

使い魔契約——

本当はする必要なんてないのかもしれませんが、祟りから久遠を引き剥がすのには、私の側に置いてしまいうくらいした思いつきませんでした。

「なのは……」

「久遠」

大人から子どもサイズに戻った久遠を強く抱き締める。

久遠もぎこちなくても私を抱き締め返してくれた。

互いの心臓の音が間近で聞こえる。

私も久遠もここに居る。

[illegible]

次に気づいたら私は神社の境内に居ました。

目の前には黒い靄のような存在。

久遠に取り憑いていた祟り。

「なのは？その姿は何だ？ダフォックスはどうした！？」

ハーケンが驚くのも無理はなかった。

強烈な発光現象が収まった途端、久遠は消え失せ、代わりになのはが久遠の着ていた巫女服を身に纏い、茶色の獣耳と尻尾を生やしていたのだから。

《なのは》

「ええ、征きましよう久遠。貴女を縛る祟りを断ち斬る為に――」

久遠に応えながら腕を前に翳す。

すると広げた手の先に展開する幾何学模様——ラギアス式魔法陣。

『ラギアス式魔法陣！？』

「出でよ、デイスカッター！フレイムカッター！」

私の魔力変換資質は火、そして久遠の雷は魔装機神では炎系低位に位置する属性。

それで呼び出したフレイムカッター。

そして周りの精霊達が力を貸してくれたお陰で呼び出せたサイバスターモデルのデイスカッター。

「久遠を縛るすべての怒りも憎悪も悲しみも！！アカシックレコードから消し去る！！」

私はデイスカッターを頭上で振り回すと、それを地面に突き立てる。

足下に展開する青い輝きを放つラギアス式魔法陣——二重の円の中に星の刻まれた魔法陣。

そこにさらにフレイムカッターを突き刺す。

エーテルを伝い、魔法陣がその姿を変える。

正しい星の形が一部崩れた。

『エルダーサインだと!?!』

それは邪悪なる者を討ち抜く聖なる印。

五芒星の結印の輝き。

「第4の結印は『旧き印』 - エルダーサイン - 我、脅威と敵意を被る者成り! コール・フェニックス! -!」

五芒星に変換したラギアス式魔法陣から、巨大な炎の鳥が、不死鳥が顕れた。

炸裂弾刻印のされた弾丸をすべて宙に投げる。

弾丸は私の周りに滞空する。

脚にプラーナを込める。

「――断鎖術式番号ティマイオス! 式号クリティアス! 術式解放、
時空間歪曲。――爆裂!^{エクストロージョン}! -!」

足下が炸裂し、私は飛び出す。

後ろから弾丸を飲み込んだ炎の不死鳥が迫り、私を飲み込み、その輝きを赤からエーテルに溢れた青に変えた。

「アカシック！バスターー！！」

私達は飛翔 - と - ぶ、負の源を断ち切る為、未来の為に！

《あああああああ！！！！！！》

「でえええやあああ！！！！！！」

雷や稲妻で一種の結界を作る祟りだが、不死鳥を身に纏う私達には届かない！

アカシックバスターの直撃した祟りを突き抜け、私は祟りの真後ろに僅かに断鎖術式の勢いで地面を滑り、術式の解かれたディスクッターとフレイムカッターを地面に突き刺す。

浄化の炎に焼かれた祟りは消え去った。

それと同時に私達の融合も解ける。

「なの…は……」

「お帰りなさい。久遠」

「うつ、うつ、なの…は…っ…なの…はあ……うつ、あああー……
ー！！！！！！」

私に抱きついて涙を流す久遠を抱き締めて、久遠の頭をそっと優しく、慈しみと愛を込めて撫でる。

まるで私達の結ばれた絆を世界が祝福してくれるかのように、朝日が私達をただ暖かく照らしだしていた。

T o b e c o n t i n u e d . . .

第16話 結ばれる絆は——（後書き）

こんな感じに終わってみました。

やっぱりとら八士郎と恭也は化け物か？

ようやくこの小説の趣旨の一片が書けました。

久遠×なのはの需要はあれど、久遠×シュテル風ってまたそそられませんか？

なんか弱いなのはの筈なのに勝手に強くなつてく星光なのははなんなんだろう？

てーてれってー♪てれってー♪

久遠が支援に加わりました。↑ムゲフ口風。

意見・感想、お待ちしております。

なげえなあ……まだ無印4話にもいかねえ……

第17話 デバイス達の想い……（前書き）

まだ先に進まないよ……

第17話 デバイス達の想い……

side：高町なのは

八束神社での戦いの後、プラーナの急な使いすぎと、久遠の電撃を浴びたダメージで動けなくなってしまった私は、久遠の背中に背負って貰って帰りました。

さすがにナイトファウルやロングトウム・スペシャル込みは重いと思ったので、それぞれを父様と兄様に持って貰いました。

ちなみにそれぞれを持って貰ったら――

「なのはは力持ちなんだなあ……こんな重たい物、お父さんはあそこまで振り回せないよ」

「こんな銃身の長い銃で狙いが外れないのか？」

そんな感想を述べられました。

それは慣れと練習ですよ、父様、兄様。

それから私は1日休みを父様、兄様、ハーケンから通告されて学校も鍛練もお休みです。最近連続で休み過ぎです。

そんなわけでやることもなく、子どもモードの久遠と布団の中で寝

る事にしました。

「クウ……な、なのは……」

「久遠……」

脚を絡めて、ワイシャツ一枚同士の薄布一枚隔てた久遠の身体を抱き締める。

巫女服でわかりませんでした、久遠は私と同年くらいにしては少し胸に膨らみがあるようです。

肌も白くてスベスベで、傷痕だらけの私とは大違いです。

「クン！な、なの……はあ……」

「んっ……く、おん……」

互いに抱き締め合うだけなのに、この胸を掻き乱して、満たす感情はなんなのだろうか――

幸せで、温かくて、愛おしく感じる。

親愛？友愛？

違う。

愛は愛でも違う、そういう愛と違う――

でも今も昔も心から愛する、恋人と言った意味での愛し方をしたことの無い私は、久遠に抱く愛がどんな愛なのかわからない。

でも家族に想う愛とは違う事はわかる。

アリサとすずか、ユーノは友愛だというのはわかる。

ハーケンやアリス、レイジングハートは愛なんて次元は当に越えている一心同体の存在。

じゃあ久遠は？

「なのは……？あつ、んっ……クオン！？」

「久遠……」

久遠の尻尾を撫でながら互いの胸を突き合わせる。

速いリズムを刻む鼓動。

同じタイミングで鳴る鼓動。

私達の絆――

「くみゆ!？」

我慢出来ずに、久遠の背中にまわした腕を力を込めて引き締める。
さらに密着して隙間すらなくなる私達。

「やつ…あ…んん…あう…クウッ」

もっともっと、久遠を感じたい。

あの時、共に祟りを討ち抜いた時のように。

私が久遠で久遠が私で――

あの時私達は物理の垣根を越えて一つだった。

「く、おん…やつ、んっ…だ、め…くお、ん…」

「な…のは…し、かえ、し」

「そ、しな、くてっ、やうっ!」

恥ずかしい程淫猥な声が漏れてしまう。

仕返すと、尾てい骨の辺りを撫でられて感じてしまう淫らな私は、

やっぱり高町なのはには相応しくない。

でも代わりに久遠との絆が深まるのなら、それでも構わないと私は思ってしまう。

私だけの久遠、私だけの絆、高町なのはには紡げない絆。

愛と勇気をもって世界を救った高町なのはの久遠との絆よりも、私達の絆は深い物だと胸を張っていえる。

「ずっと一緒ですよ、久遠」

「クウ……なの……は……」

今日一日中。私達はずっと布団の中で、互いの身体を弄りあいながら過ごしました。

|||||

side:ハーケン・ブラウニング

マイホームに帰った俺は、なのはの自室からユーノを連れて、レイジングハートとアリスの器のスケッチブックを持って家の縁側でたむろっていた。今頃ブラザーの部屋はストロベリー空間がオープン

中だろう。

「それにしても、なのははなんであんなにも必死になれるんだろう」

ビーストモードからトランスフォームしたユーノが蒼穹を見上げながら言った。

ちなみにヒューマンモードなのは久遠がヒューマンモードになれるのに便乗してヒューマンモードを晒せという俺の考えさ。

一応風呂は男の意地でファーマーや時々エルダーブラザーと入っていたらしいから、事情を話せばOHANASHIは免れるだろうさ。高町家は色々な意味でソウルハートがオープンだからな、恐ろしいメンタルティだぜ、まったく。

『なのはには、何物にも譲れない物があるのさ。それがあいつのメンタルを支える大黒柱、俺達が支えてないとポッキリ逝っちゃう細々したブラクツリーだな。絶妙なバランスで成り立ってなんとか安定してるのさ、あいつの心は』

「ハーケン……僕はもうしたら良いんだろう。僕はなのはみたいに攻撃力なんてないから、なのはの力にもなってあげられない。それが悔しい——」

『……OK、フレンズフェレットボーイ。良く考えてみるのさ。お前が他人にも誇れる要素を……な』

「僕が……誇れる要素……」

察しの良いユーノなら気づけるだろう。今出せるヒントはこれ位さ。

『そんで、とりあえずは修理の終わったレイジングハートの祝賀会と行きたいが、もう大丈夫なんだろうな？』

『Recovery complete・Condition green・大変お待たせしました。すみません、ハーケン』

『ウェイト。謝るのなら俺じゃないだろ？レイジングハート』

『はい。そうでしたね』

修復が済んだレイジングハートは、魔法系言語は翻訳魔法を使ったミッド語だが、日用会話はプログラムを書き換えて日本語をベースクにしている。

理由は俺にあるんだとさ。ブラザーと同じ言葉でトークするのが羨ましいんだと。

マスターと同じ言語で喋りたいと思うのは更なる絆になる。

絆の結び付きは、時として限界以上の力を発揮する。

スーパーロボットのお約束展開だ。

そしてそれが今日起こったばかりだ。なのはも十二分に主人公をや
つてるさ。

『とりあえずはだ、アリスのソフトを治したいんだが、手伝ってく
れるな、カムレード？』

『わかりました、ハーケン。私も友人を治してあげたいのは同じで
す』

『OK、フレンズカムレードデバイス。メカニカルの俺達でフレン
ズを治して、ブラザーを安心させてやろうぜ？』

『ええ、わかりました。ハーケン』

俺達メカニカルズは一蓮托生一心同体の関係にあるような物だ。

同じマスターの下に集い、共に戦い、随時データリンクしているお
陰で、俺達は互いの状態や、誰か1人でもなのはに着いていれば、
なのはの事が随時わかるようになっていいるからだ。

それを有利に戦闘に生かす方法も模索中だ。

元祖がレイジングハートとユーノだけで大丈夫だったのは、あれが
物語で、元祖が寂しい思いをした過去があっても、良くも悪くも子
どもであつたからだ。

だが俺達のマスターは良くも悪くも大人過ぎた。

自分の存在に苦悩し、元祖とはかけ離れた存在に苦悩して、レプリカのイミテーションを演じている事に苦悩する。

それ全部ひっくるめて俺達のソウルブラザーマスターなんだがな。俺の口から言ってるのは簡単さ。

これは正に分の悪い賭けだ。

ブラザーのハートがクラッシュするのが先が、自分は自分として生きていけば良いと気づくのが先か。

だから出来るだけ俺達で道を指し示し、導いて、支えて行くしかない。

すべてを選択するのは、なのはの意志なんだからな。

|| || || || || || || || || || || || || || || ||

side: 高町士郎

今日、初めて娘の戦いを体験しながら娘の戦いを見た。

俺も昔は相当危ない橋を渡ってきたものだけど、雷を直接撃たれたのは初めての経験だ。

銃弾と違って斬ったり弾いたり出来ないものだから死ぬかとも思っ

たし、久遠の力も人間物じゃなかった。

でもいつの間にか大きく育っていた娘の背中を見た時は嬉しくも思つた。

なのはもまた、御神流を正しく使う剣士になる事を確信出来たからだ。

それになのはには周りに支えてくれる者がたくさん居る。あの子ならこれから先も自分の戦いを続けていけるだろう。

ただ、やっぱり無理はして欲しくないかな。

side:ハーケン・ブロウニング

「よし、こんなもんか？」

俺の前には、青と白のロボットが立っている。

まあ、なのはが暇に任せて1から作った1/60 Sガンダムなんだけどな。

パーツ差し替え無しでの完全変形可能の優れたもの。

筐体自体は俺のボディと同じ時に完成してたが、ソフト面のアリスがあんなっちまったからな。

A L I C E システムを積んだ機体にアリスが成る。

この希望もアリスによるものだ。

『システムコネクト。T C - O S アクセス、自己進化完全自立型擬似人格コンピュータ O S ロード。機体駆動システム非常用電力で作動。フルカネルリ式永久機関クォータードライブ。メインシステムノーマルモード起動。全シーケンスオールグリーン。——おはようございます。ハーケン、レイジングハート』

『グッドモーニング、不思議の国のアリス。新しい身体はどうだい？』

『おめでとうございます。アリス』

『ありがとうございます。ハーケン、レイジングハート』

手の調子確かめるように握っては開くをするSガンダムもといアリス。

『ええ、マイスターの想いが宿ったこのボディ、この上なく重畳です』

『そいつは良かったな、アリス。で、何やってんだメカニカルアリス』

『何って、変形ですが？何か？』

『いや、なんでも無いぜ、ファイターアリス』

アリスはGクルーザーに変形して俺達の頭の上を滞空している。

今はパーツが足りなくてちよいと不格好だが、驚きの再現度だぜブラザー。しかもカタログスペックには分離合体まで可能と書いてあった。

デバイスコアとリンカーコアの仕組みを基にして、なのはが造ったフルカネルリ式永久機関。

精霊の代用は俺達自己進化完全自立型擬似人格コンピュータOS。だから俺達の意志でパワーが変わる。まるでGストーンのGパワーだぜ。

俺の試作フルカネルリ式永久機関のブラッシュアップグレード品だ。大きさは同じだがアップグレードのお陰で出力は段違いだ。それだけにそのエネルギーを普通に攻撃にも使える、いわばモバイル魔装機って奴だ。

羨ましいぜ、プリンセスアリス。

[illegible]

私のシステムがダウンしている間も、ハーケンとのデータリンクで私はマイスターの戦いを見ていました。

とても心配でしたが、でもハーケンがついていましたから不安はありませんでした。

そして私が居なくても戦えるようになった。

強くなりましたね、マイスター。

そして私も、また――まだ戦える！

この機体にインプットされているメモリー内にある武装が私に合わされば自分の身を守るくらいにはなります。

しかしその先、マイスターと共に戦い、さらにマイスターの力となるにはまたさらに力が要る。

その為のプランは昔から用意している。あとはそれを形に出来る技術力があれば――

Side: レイジングハート

私も自由な身体が欲しいと思います。

でもそれ以上に今より頑丈な身体が欲しい。

そう、最強の金属製の身体を！

To be continued...

第17話 デバイス達の想い……（後書き）

とりあえずやっとなリス復活とアリスの予定の6割り方を消化出来た。

ハーケンも、レイジングハートも、星光なのはの為にこれから頑張っていく予定です。

アリスの方も大体設定を組めてきました。

しかしどこで登場させるか……

第18話 アリサの告白（前書き）

アリサファンの皆様、ごめんなさい！！！！！！

第18話 アリサの告白

side：高町なのは

土日が過ぎ、ようやく月曜日です。

土曜日は夜まで久遠と寝倒し、日曜日はレイジングハートとアリスが治ったことを告げられ、アリスの筐体の最終調整とハーケンの筐体とナイトファウルの整備をしました。

他には使えるようになったプラーナの慣らしなどもしました。

久遠とユーノですが、子どもモードでこれから過ごして行くようです。母様は大喜びで、2人が動物だったのは二の次のようです。とりあえずユーノ、骨は拾ってあげますよ。

月曜日、つまり今日の朝は御神流 貫と御神流 虎切の鍛練をしました。

そして朝食を食べて、ボロボロのただの屍のユーノと久遠を置いて、ハーケン、アリス、レイジングハートと一緒に学校に向かいます。

まだ所々道の舗装は終わり切っていない為、今日も歩きです。

「はあ……」

『どうかしましたか？マスター』

「いえ、今日は体育があるんですよ」

『あ、なるほど、だから』

私の溜め息に反応したレイジングハートに答えると、アリスが納得といった感じで言います。

『マイスターは体育の成績だけは悪いんです』

『そうなんですか？』

『何故かな、戦闘中で魔法を使えば普通に陸戦とか出来るんだが。普段は全力疾走ですっころんだり、ボールには遊ばれるは、跳び箱には尻をぶつけて跳べないわで、とことん運動音痴というか、体育に嫌われてるのさ、これがな』

「レイジングハートに余計な事を吹き込まないでください」

『事実でしょう？マイスター』

なんかALICEシステムのメインAIをアリスに入れてから思考がさらに人間のようになったんですが、少し優しさに欠けているような気がするの私だけですか？それともこれが本来の人間的思考を確立したアリスの性格でしょうか？

擬似人格OSにはまだまだ未知の領域が沢山ある様ですね。まあ、

ALICEシステム事態、「Advanced Logistic
& amp; Inconsequence Cognizing E
quipment」の頭文字を並べてALICE——日本語訳で「
発展型論理・非論理認識装置」という意味を持つとんでもシステム
ですから、わからないだらけ、未知数なのは仕方ありませんでし
ょう。

しかしこのALICEシステムや自己進化完全自立型擬似人格コン
ピューターOSが、ひいては魔法世界に革新をもたらすものだと思
います。

『とりあえず、急ごうぜブラザー』

『予鈴までまだ2時間もあるんですから、余裕では?』

『わかってないな、スクールって言うのは、朝早くに早めに教室に
居る方が気分が良いんだぜ?それになにより静かだしな』

『なるほど、ほんの少しの一利はあるわけですね?』

『2人の話しに着いていきません』

『OK、置いてけぼりハート。その内覚えて行くさ』

『ハーケンの言う通りです、レイジングハート。貴女も少しずつ、
人間を学んでいけば良いんです。焦らずゆっくりと』

『わかりました、アリス』

私はデバイス達の声をBGMに、学校へ向けて歩き続けました。

1から学んで育ったアリス。

1からそう造ったハーケン。

互いに人間らしいのは、アリスは経験から、ハーケンはそういう風に造ったから。でも2人ともその感情は人間そのもの。

まだ日用経験の薄いレイジングハートも、何時かはハーケンやアリスに混じって普通にスムーズに会話する時もあるでしょう。

私の目指す物の原点にして完成品がある現状に、これからの人生も、少しは楽しく希望を持てていける。

人を支え、心を持つ機械のパートナーを造る。

私の将来の夢はそんなのもアリかもしれませんね。

side: アリサ・バニングス

土曜日、午前中だけの学校を休んだのは。

何かあったのかとも思っ、迷惑かとも思っただけ、翠屋の方に電話した。

なのはにメールや電話しても大丈夫だと言われそう、いや、絶対にそういう返事が返ってくるから、なのはのパパかママに確認したかった。

電話に出たのはなのはのパパ、土郎さんだった。

少し熱っぽいから大事を取って休みってわけらしい。

まあ、あんな戦いをしてれば普通身体の調子が悪くなって当然よね。

お見舞いに行っても良かったけど、止めた。それであたしが風邪ひいたらなのはは自分の所為だって自分を責めるのは火を見るより明らかだし。

火……か――

《どうかしたのか？アリサ・バニングス》

《ううん。なんでもない》

ふと頭に響いた渋い声に返す。

念話という、まあ、テレパスみたいなやつよ。

あたしの日常は、なのはが魔法使いであるのを知って――

そしてあの赤い石を拾ってから変わった。

大きさはビー玉より少し大きめの三角形ていうか、矢の先のような形をしてる赤い石。

そこから声が聞こえたのは次の日だった。

そこからあたしも、なのはの居る非日常に身を置く事になった。まあ、なのはに比べたらまだまだ未熟で、曰く戦闘にはとても出せない。

自分でもわかってる。

今まで特に戦う為に特訓なんてしたことないあたしには、そもそも基礎の下地すらまっさらの更地の状態。

素質はそれなりにあるらしいけど、それも磨いていかないとならない。

なのはと一緒に戦える日はいつになるかわからないけれど、肩を並べる程じゃなくても良い。いや、目指すなのはの前に立ってなのはを守るだけどさ。

今はなのはの戦場に立てるように頑張るだけよ！

今のあたしにはそれくらいしか出来ない。

《焦ることはない、アリサ・バニングス。焦りはミスを誘発し、己

のミスは味方をも危険に曝す事になる。焦らず、しかし早く、訓練をこなしていけば良い。その訓練を終えた時こそ、君は君の戦場に立つ事になる《

《わかってる。ありがとう》

そう、今は焦っても仕方がない。歯痒い蹴れど、一歩ずつあたしは強くなるしかないのよ。

「おはようございます」

「おはよう！なのは！」

待っててなのは！あたしもすぐに追いついてみせるから！！

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

side：高町なのは

「おはようございます、アリサ……その鼻、どうしたのですか？」

教室に着いて一番乗りかと思いきや、既にアリサが居ました。鼻筋に絆創膏を付けて。

活発なアリサには変に似合いますが……。

「ああ、これ？ベッドから落ちてちよつとね。あははは」

「気をつけてくださいよ？かわいい顔に傷でも残ったら大変ですよ？」

「あんだこそ気をつけなさいよ」

私の言葉に言い返しながら、アリサは私の左頬——ゼルエルとの戦闘での傷痕に手を添えてきました。

「んっ…ア、アリ…サ…」

まだ新しい皮が張ったばかりで、くすぐったさがダイレクトで伝わってきます。

「一生残りそうな傷痕ばっかつけて——」

今度は首筋。

インナーで隠しきれない傷痕。

これはあの鴉のかまいたちの時のついた傷痕。

「ア、アリ、うっ……んんっ」

首筋から手を離れたアリサは、無言で私を抱き締めて――

「も、もし、もしも、もも、もらいて、居なかった、ら、あ、あた、し、が！なのはのこ、と、も、もらって！やるわよ！」

最初は耳元で囁くように、次第に大きくなって行つた声――

や、あの、えと、うえええっΣ！！??

「ア、アア、アリアリ、アリササ！！」

離れたくてもアリサは離してくれず、私はいきなりのことであたふたして――

や、わ、私ったら、小学生の女の子の告白されて、ここ、こんなに胸をドキドキさせるなんて、へへ、変態Σ！？ロリペドΣ！？

「……あんたの痛みも苦しみも悩みも悲しみも、半分あたしに寄越

『……おめでとうございます?』

デバイス達の優しさが心に痛い。

それとハーケン、後で覚えていなさい。

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

side: アリサ・バニングス

言った、とうとう言った。とうとう言っちゃった!!

メチャクチャ恥ずかしいけど、多分絶対すずかよりは先のはずよ!

あたしがなのはの事をちゃんと好きだと自覚したのも訓練の合間だった。

——『お前が強くなりたい理由はなんだ?』

そう訊かれた時、真っ先に浮かんだのは、血を流しながらも戦うなのはの背中——

あたしとなのはの出逢いは、一年生の頃。

ふざけ半分、興味半分ですずかの読んでた難しそうな本を取り上げ

て遊んでたのが始まり。

横から本をぶんどっていったなのは、その本の背表紙であたしに脳天チョップをしてきた。

あれは今思い出しても相当痛かったわよ。現にたんこぶになったし。邪魔されて怒ったあたしはなのはに殴りかかった。一步も動かずにそれを正面から受けたなのは、しかも良い具合に顔面直撃。

でもなのはは少し眉を顰めただけで、平然とこう言ったのよ？

——「1回は1回ですから」

鼻血を垂らしながら無表情で言うもんだから、あたしは恐くて泣き出したのを覚えてる。

でもなのはは悪者のあたしを慰めてくれたの。泣き止むまで、背中を撫でていてくれた。

それがあたし達の始まり。

それも思い出して、気づいた。

あたしはなのはが好きで、あたしはなのはが傷ついて欲しくないから、なのはと一緒に戦って、なのはの負担を減らしたいんだと。

守るだなんて大層なことは言えないし言わない。

なのはただ突き進むだけ、あたしはあたしの意志で、その背中を追いかけて、何時か隣りを走っていくだけ。

そう思ったら、それに気づいたら、胸のモヤモヤした物が消えて、ストンと何かが落ちた。

多分あれはあたしがなのはを好きだって自覚したからだと思う。

あたしは、なのはに堕ちたんだ。

あのいつも無表情に見える鉄面皮でも、僅かに表情を変えて自己表現してたなのは。

この前の、痛みに耐えながら、闘志に満ち溢れていた、絶望的な状況の中でも諦めなかった、レジセイアに限界を超えた一撃を叩き込む、なのはの顔。

ハーケンと楽しそうな、あたし達に秘密にしていることを言えなくて自分を責める、なのはの顔。

弱いなのはもカッコイいなのはも強いなのはも泣きそうななのはも、全部あたしは好きなんだ。

なのはは優しくてカッコイいから、すずかもあたしに近い——いや、多分同じ気持ちを持ってるはず。それを自覚してないのは小学3年なら多分普通。

あたしは大分なのはに影響受けて染まってるから、そういう感情にも気づけた。

あたしの好きは友達の好きじゃない。likeじゃなくてlove、愛の好きなんだから。

すずかには絶対に負けない！

あたしはなのはと一緒に戦って、何時か……なのはと添い遂げる！！

[illegible]

Side: 高町なのは

な、なんてことですか――

ままま、まさかアリサからここ、っこっこ、告白されてしまうなんて!!

《あんたの痛みも苦しみも悩みも悲しみも、半分あたしに寄越しなさいよ——》

やめてええええー！！！！！！

わざわざ録画した音声を無駄に高音質の念話に変換してエンドレスプレイなんてやめてええええー！！！！！！！！

「どうかしたのかな？なのはちゃん」

「さあ？少しぶり返してもきたんじゃないの？」

「た、大変だよアリサちゃん！すぐ保健室連れてってあげよう！」

アリサ、何故諸悪の根元の貴女がそんな涼しい顔をしているんですか！これじゃあひとり恥ずかしさに悶える私がアホの子じゃないですか！！

「よいしょっと……なのは、あんたちゃんにご飯食べてる？いくらなんでも軽すぎない？」

「ア、アリサ！、あああ、貴女！！」

「アリサちゃん、力持ちい……」

アリサの顔が間近です。少しでも動いたら頬にキス出来てしまいそんな距離です！

《ヒュウー》これはバーニングアリサ、プリンセス抱っことは、大胆だな》

《すずかにアドバンテージを稼ごうと大胆になってるんですね。わ

かります。これが若さか……」

《全然話が見えません》

メカニカルズもメカニカルズで盛り上がっている様子。相変わらずひとりは置いてけぼりだが。

「すずか、あたしは保健室になのはを連れて行くから、先生に言っ
といて」

「あ、う、うん。私も後で行くから、なのはちゃんお願いね？」

「任せなさいよ！」

足で教室のドアを開けたアリサは、私を横抱き、俗に言うお姫様抱
っこで私を保健室まで運んで行きました。私ですか？

恥ずかしさのオーバーブレイクで縮こまっていましたよ。

「せんせー！……留守？」

また足でドアを開けるアリサ。行儀が悪いですよ。

保健室には誰の気配もありません。

「ま、いつか」

アリサは私を布団に寝かせると、布団の上に座りました。

「アリサ……貴女は……」

「あたしは本気よ、なのは」

「あう……で、でも、私達は女の子同士——」

「ならあたしが男になったっていいわよ」

「な、なんで……そこまで……」

「それは秘密よ。こういうのは言わぬが花なのよ。知ってるでしょ？」

な、なんででしょう。アリサこんなに大人っぽかったですか！？

「まあ、良くも悪くもあんたの所為よ。元々8歳児の自覚なんてなかったのを、あんだだけアニメとかラノベとか漫画とか視たり読んだりすれば、表面も内面も価値観も変わるわよ、普通は」

も、もしかして私が全面的に悪いんですか！？

「うん。でも、悪くないわ。なのはの言う事を理解出来る嬉しさ。それになのはのお陰で価値観や物の見方も変わったお陰で、今までの子どものあたしじゃ、見れない、見えない物も見えるようになったから、なのはには感謝してるの。あたしは……」

「アリサ……」

「だからなのは、あんたが抱えてるの、全部じゃなくても、今すぐじゃなくてもいいから——」

言葉を切って、アリサが身を屈めてきた。

アリサの長い金髪の髪が、私の頭を包み隠して――

そして唇に触れる柔らかい感触。軽く触れ合うだけの――

「あたしにも……背負わせて——」

軽い……キス――

「ツ
Σ
!
?
!
?
!
?
!
?
!
?
」

音にしたらボンッ！！

ていう音が出そうな程、今の私の顔は朱くて熱いはず。

ア、アリサが――

アリサに、キス………された――

「ふふっ、顔、真っ赤ね、なのは………カワイい」

「や、いわ、ない………で………」

「いゝや、なのはがカワイいのは、なのはがなのはだからだもん。何者にも出来ない、変えられない、なのはだからカワイいの」

「やあ、はず、かし………」

使い古されていそうな口説き文句なのに、アリサが言つと、どうしてこんなに胸がドキドキして――

やっぱり私って変態なんですか!?

「アリサちゃん!」

「今日はここまでね。おやすみ、あたしのなのは」

アリサはそう言い残して、ベッドから立って、ベッドを囲むカーテ

ンの外へ出て行きました。

「アリサちゃん、なのはちゃんは？」

「うん。やっぱり熱がぶり返してるみたい。先生居ないから一応ベツドに寝かせたから」

「そう、じゃあ、私が看てるから、アリサちゃんは教室戻っても良いよ」

「ううん。あたしもなのは心配だし、ノートは後でハーケンに教えて貰うから、あたしもここにいるわ」

「そ、そう？それじゃあ一緒に先生待つてようか？」

「そうしましょ。っと、確かシャナのヤツがポケットに——あったあつた。これで暇潰しは出来るわね」

「それ、なのはちゃんと同じ……」

「そうよ。面白いから集めてるの」

「良いなあ……私の部屋はもう本置けるスペースがないから……」

「読み終わったやつなら明日貸してあげるけど？」

「ほんと？ありがとうアリサちゃん！」

「はいはい、病人居るんだから静かにね？」

「あ、ごめんなさい、アリサちゃん」

寝てしまおう……。――

なんか週明けからどつと疲れました――

To be continued...

第18話 アリサの告白（後書き）

なんで私が書くところもキャラがいつの間にか暴走してるんだろうか？

アリサがもはやアリサじゃなくなってるよ。

そして久遠には攻めなのにアリサには受けの星光なのはがカワイすぎて死ぬる。

皆さんの意見・感想をお待ちしております。

魔法少女バーニングアリサ、カウントダウン開始――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4448z/>

星光の魔王-シュテル・ザ・エルケーニヒ-

2011年12月28日04時49分発行